瀬戸内暮色（鷲羽山）

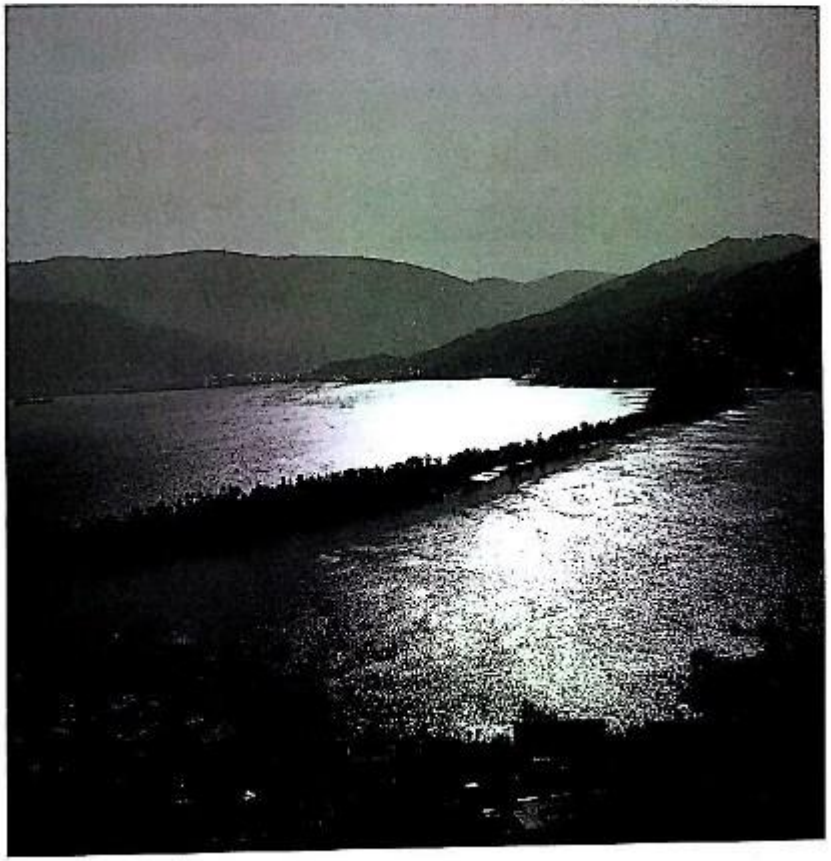
だんだん海が近づいてくる
ごうごう　ごうごう
海鳴りが響く断崖から見おろす
岩肌は黒く濡れ
泡のきわは白くはじけ
どどおんと青い青い光が押し寄せ
幾筋もの白い糸が揺らめいて
虹色に変わる
ゆっくりと息を吸い吐く
潮風が髪を洗い
日差しが頬に肩に降り注ぐ
目を閉じて海を見つめる
ざわわわ　ざわわわわわわ
すうっと波がひくように
静かに一日が終わる

サンセット（沖縄・残波岬）

Photo essay

秋の海

題字　中田蘭石
撮影　由井　収
文　松永恵一



光る海（天の橋立）

季節の実景

晩秋

撮影　武市通治

華（ツリガネニンジン）

動

静

枯

気

紅葉の杉林（大原）　中川　光郎

能登ヶ峰①（鈴鹿）　金谷　昭

雲海のかなたに朝の富士（雲取山）　三浦　弘幸

能登ヶ峰②（鈴鹿）　金谷　昭

晩秋の糠糖山にて（飛騨）

奥田　英一郎

紅葉のブナ林を行く

大カツラの根元を行く

円頂の高層湿原

新ハイキング　別冊　関西の山
'00年11・12月　秋号　第55号

●目次

表紙：松田敏男「ブナの黄葉」

●作者プロフィール●1949年、京都市生まれ。京都市立芸術大学卒。1987年より山岳版画、山岳画の発表多数開催。（京都洋画商協、南アルプス山小屋、東京ギャラリー百号、他）京都山と渓に親しむ会代表、日本山岳会会員、一等三角点研究会会員

●グラビア
秋の海……撮影　由井　収
紅葉の実景（除伐）「枯」他……文　松永　恵一
（口絵）金谷　昭　中川光郎　三浦弘幸　奥田英一郎　武市　通治　4　2

随想（山のエッセイ）
森林鉄道に思う―赤沢自然休養林にて―……奥田英一郎　10
「鴻応山・千頭岳」山名考……柴田　昭彦　12
山小屋よりの勧告……芝野　泰明　14
ジーパン山歩きも悪くない……平　一郎　15

紀行
五僧峠（鳥取県）を訪ねて（鈴鹿）……北川　浩　16
赤石ヶ岳・江笠山・伏見山・龍ヶ城（台湾）……生駒　貴彦　20
青谷道より摩耶山（六甲）……木村　太郎　24

連載
日本霊山紀行　番外編（福島13）
『新篇相模国風土記稿』（その2）……浅野　孝一　28
奥茶臼山（南アルプス）……松田　敏男　30
新ハイ別会自然観察山行　烏帽子岳・水晶岳
鷲羽岳・雲ノ平（北アルプス）……雲見　守康　36

連載
三角点を訪ねて㉗
権現谷の秘境、コザトへ（鈴鹿）……蓬郷　純　40
比良を歩く㊶　神蔵谷道から堂満岳……妻　康夫　44

●1等三角点峰（500m以上）548座完登の記録（第22回）
平成二年の北海道への山旅……坂井　久光　48

●鈴鹿の伝説・伝承
峰越山併せ鬼坂・野首・人魚塚之事……岩野　敏明　52

●江文峠から金剛輪山・登尾山……中村　敏文　56

●文学歴史探訪ハイク㊸義犬伝説の大峰山……松永　恵一　60

コースガイド
[1]烏城山から天狗倉山（大峰）……金谷　昭　64
[2]ベンケイと船岩（ヒ）（鈴鹿）……西尾　寿一　66
[3]笠形山（美濃）……多摩　雪雄　68
[4]沖島山（尾山）（琵琶湖）……山形　歳之　70
[5]城山（鶴原岳）（湖南）……柴田　昭彦　72

沿線ハイキングガイド……76
サービスチェーン……79
せせらぎ……79
新ハイ関西山行計画と報告……
バス時刻表（京都北山）……
編集後記・広告案内……
104 102 65

巻頭言

「関西の山は低山ばかりだ」と東京の人に言われたことがあります。たしかに有名な比良・金剛・高城・鈴鹿などの山でも、高くてせいぜい1200mぐらい。近畿で一番高いと言われる大峰の八経ヶ岳が1915mで、関西には2000m以上の山はありません。「近畿百名山」を見ると、1500m以上の山は、日出ヶ岳・山上ヶ岳・稲村ヶ岳・大普賢岳・八経ヶ岳・釈迦ヶ岳と六山ありますが、そのほとんどは大峰の核心部に集中しています。よく通る京都北山は桂子山が最高で972m。六甲の最高峰は931mです。

このように、関西の山は本格的な登山の対象としては物足りないと思われます。私は、若いときに思った「登山する」という意識を捨て、「山を歩くんだ」というイメージに切り替えてからもう何年にもなります。このように思えば、年齢的に不安を感じておられる方もずいぶん気が楽になるのではないでしょうか。森の自然を感じながらゆっくりと時間をかけて歩く、そしていつの間にか山頂に到着していたという境地です。長く関西の低山歩きを楽しんでください。

新ハイキング関西（代表）村田　智彦

森林鉄道に思う
―赤沢自然休養村にて―

奥田　英一郎

木曾谷のあちこちに森林鉄道が走っていた頃のこと。国鉄一万キロ走破を目標にして、全国のローカル線を丹念に訪ねている友と、裏木曾と呼ばれる阿寺山脈の小さな峠を越えて、ひなびた一軒宿の鉱泉に浸り、森林鉄道に乗る山旅を計画した。

御嶽野から木曾越峠を越え、ランプの宿の湯合鉱泉に泊まった。翌日は途中で道を見失いながらもなんとか白巣峠を越え、王滝川最奥の里、滝越にたどり着いた。

線路脇に駅舎とも民家ともつかない建物があり、その前に遊園地で走っているのを少し大きくしたような車輌が停まっていた。村の万屋さんのような店に入って、「森林鉄道に乗せてもらいたい」と言うと、「今日は運休で走っていない」と言う。期待してここまで来た友人に申し訳なく思った。とにかく車輌に入ってみた。運搬用車だったようで、機除当番の名札が掛かっていた。驚いたことに二十数人の名札のほとんどが三浦姓だった。ここは、かつて鎌倉から移れて来た武将三浦一族の定住した里だったのである。

王滝までは軌道を歩くしかなかった。鉄橋を渡りトンネルを抜け切り岸をたどり、時には深い淵を見下ろしながら長い道を歩いた。名のある所を通ったのだろうが記憶はない。等間隔に並べられているはずの枕木の幅が、歩行リズムに合わず歩きづらかったのだけを憶えている。

それから何年経ったのだろうか。あちこちの山を歩いている間に忘れていたが、昭和五十年頃に森林鉄道は最後の運行を終えていた。一度は乗ってみたかったのにと残念だった。

今春、上松の北西にある、もと木曾氏の城塞があったという台ヶ峰に出かけた際、赤沢の自然休養林に立ち寄った。木曾の五木と言われるヒノキ・サワラ・ネズコ・ヒバ・コウヤマキなどよく似た葉つきの木を観察しながら展望コースを歩いた。人の丈よりも高く根っこが浮かび上がっているのに目を奪われ、ミツバツツジの花に慰められながらぐるっと廻って来た所に、森林鉄道記念館があった。かつて御嶽山麓のあちこちを巡回して、山仕事にたずさわる人たちを調髪したという理髪車も正面に置かれていた。建物の中には、木材運搬に活躍した米国ボールド・ウイン社製の蒸気機関車がおさまっている。車体に不似合なくらいに煙突が大きく、鉄道マニアならずとも懐しくなるような愛らしい型をしている。

随想（山のエッセイ）

ここにはすでになくなったはずの森林鉄道が復活されて赤沢の深谷沿いを走っていた。もっともこの日は平日で運休だったが……。以前は運休でだめ、この日は平日でだめ、とは皮肉なことである。仕方なく昔歩いたように枕木を踏んで、伐材木を川の流れを利用して運ぶために仕組まれた床堰とかいう川床を見て引き返した。結局この日も森林鉄道には乗れなかったのだが、森閑とした渓流沿いの道がよかった。

その夜、旅宿にある民宿「赤沢荘」に民話になり、夕食には近くで釣ったというイワナとヤマメに、ギボシの酢味噌和え、チチ菜？の胡麻和えといった野趣豊かな馳走をいただいた。

翌日、台ヶ峰へは道なき渓谷をたどり、4人がかりでやっと手が結べるような巨木の混じる自然林をきまよい歩いた。残念ながら、時間切れで山頂は踏めずに深山の気を満喫して同じルートを引き返した。

下山後、せっかく木曾まで来たのだから蕎麦でもと、木曾福島の紅屋へ行きたいとタクシーの運転手に頼んだら、「先年主人が亡くなられて店は閉じられた」と言う。それなら川辺りにある創業三百余年という車屋へと言うと、「あいにく今日は休日だ」と言う。森林鉄道にも乗れず、山頂も踏めず、いまだ蕎麦にも巡離されたかと思ったが、親切な女性運転手は「お口に合うかどうか分かりませんが、もう一軒手打ちの店がありますが」と言って案内してくれた。

落ち着いた店だった。やっとありついた蕎麦もおいしかったが、二つ重ねの量に少々もてあまし気味でいただいていた。そのとき、隣の台でスキン（木曾のかぶ菜の漬物）そばを食べながら話っている老女の話が耳に入ってきた。「お父さんを森林鉄道の事故で亡くした兄弟の小さいほうの男の子が、私の家の近くの人のところへもらわれて来たンヨ。ある日、小学生の兄が上松から歩いて弟に会いに来て、水無神社のところで2人泣きながらしばらく抱き合っていたンヨ、後に母親がやって来て、『大きくなったら必ず迎えに来るからナ』と言って兄だけを連れて帰られた。それからというもの、小さい男の子は、夕暮れになると線路沿いの木柵に寄りかかって、上りの名古屋方面へ行く列車を見送りながら『オカアさんによろしくネェ』と言って手を振っていたンヨー」

老女はいかにも不憫だったという表情で、残りの蕎麦つゆをすすっていた。

レトロ調というのか、原田泰治の童画にあるような"郵便さん"（土地の人はこう呼んでいた）の60年にわたる歴史のなかにはさまざまなエピソードが秘

められていたことだろう。その間には幾多の犠牲があったに違いない。木材運搬のみならず、山里の人たちの足として、喜びも悲しみも運んだことであろう。あどけない子どもたちの夢とともに、雨の日も雪の日も郵便配達夫や行商人、そして時には花嫁も乗せて木曾の渓谷を走ったのである。いつか赤ん坊を背負った女性駅長さんがタブレットを交換している写真を見たことがある。ここには厳しい現実の生活があった。

車窓から見た上松の駅には、今も御嶽の山深い所から運ばれて来た伐材がうず高く積まれていた。かつての森林鉄道に代わって現在運搬の美をになっているのはトラックである。そして"軽便さん"は今、赤沢の渓谷を観光客を乗せて走っている。

中央本線の背景に描られながら、木曾福島の藁葺屋で聞いた老女の哀しい話を思いだした。

単なる懐古趣味で森林鉄道に乗ってみたいと思っていたが、そんな気持ちでは乗らなかったことがかえって良かったのだと自分に言い聞かせながら、木曾路をあとにした。

「鴻応山・千頭岳」山名考

柴田　昭彦

山名は漢字表記が同じであっても、地域によって異なった読み方をしている場合も多い。京都府・大阪府境の鴻応山と、京都府・滋賀県境の千頭岳も、そのケースに該当しており、ここでとりあげてみたい。

京都府亀岡市と大阪府豊能郡豊能町との境にある豊能富士と呼ばれる「鴻応山」はどう読むのだろうか。現在の2万5千分の1地形図「法貴」には、「こうの」とある。ところが、国土地理院近畿地方測量部で調べてもらったところ、亀岡市と豊能町の地名総覧では、「こうおうさん」と記載してあるという。『コンサイス日本山名辞典』には「こうおう（こうのう）ざん」、『日本山名総覧』には「コウノヤマ（コウオウヤマ）」とある。最近のガイドブックでは「こうのやま」としたものが目立つ。内田嘉弘『京都丹波の山（上）』では、地元の豊能町寺田の住人からの聞きとりで「こうおうさん」と読むと教えられたことから、「こうの」の読みを間違いとしているが、そう読む人は多い。

西川逢大『豊能ふるさと談叢』（平成7年、私家本）によると、鴻応山（こおのやま）の名の由来は、嘉祥3年（850）、義顕上人がここにやってきた時、山の頂上で鴻の鳥二羽が舞う下に金の仏様がおられたという。鴻の鳥の教えから、初めは「鴻山」

随想（山のエッセイ）

または「鴻の山」と書き、後には「鴻応山」という表記が定着したという。この説は、鴻応山の南麓に位置する寺田地区にある鴻応山菅師寺の由緒書（宝暦4年、1754）によるものである。

一方、鴻応山の南西に位置する牧地区に残る文政6年（1823）の古記によると、「鴻野山」とあり、寛平3年（891）、尼義の強猟師が来たところ、鴻の鳥二羽が当山の松の木に止まっていたという。その由来から鴻野山と名付けたとする。

従って、由来から考えると「こうのやま」と読むのが妥当であり、「こうおうさん」は、鴻応と書くようになってからの、表記につられた読み方と考えよう。今日においては両方の読み方が容認されていると結論づけられるのではないだろうか。

京都市伏見区と滋賀県大津市との境にある千頭岳はどう読むのだろうか。現在の2万5千分の1地形図「京都東南部」には、読み方は示されていない。

『コンサイス日本山名辞典』は「ちとうだけ」という読み方を採用している。『滋賀　大津』（大津市立総合研究所、昭和42年）にも「ちとうだけ」とある。国土地理院近畿地方測量部によると、大津市と京都市の地名調書には「ちとうだけ」と記載されている。おそらく、大津市側からの呼び方と考えられるが、登山者には全く用いられていない。

北山クラブ編『京都周辺の山々』（昭和41年）と草川啓三『近江の山』（昭和50年）には「せんず」とあり、『日本山名総覧』も「センズダケ」である。

最近のガイドブックでは「せんとうだけ」としたものが多い。内田嘉弘『京都滋賀南部の山』によると、地元での聞きとりから、南東麓の陀羅谷（伏見区醍醐陀羅谷）では「せんとうがだけ」、南西麓の桐川（宇治市西笠取）では「せんずだけ」と呼んでいるという。

『日本山名総覧』には、千頭を記した山名として、静岡県の千頭山（センズヂン）と山梨県の三頭星山（セントウボシヤマ）がある。

北川霞治『近江名跡案内記』（明治24年）には「千頭ヶ嶽　諸所南方ノ高山ナリ西山頭東山頭トニフ所アリ一ニ山頭嶽上ニフ」とあり、今西錦司氏も「千頭ヶ岳」（全集別巻、山名リスト）としている。

『地名用語語源辞典』には、「せんず（千寿、千頭、千手、千須、泉津）　①センジュ（千手）の転か。②セン（泉・湧・流）・ツ（接尾語）の形か。」とある。

以上の材料から考えると、「せんずだけ」と読むのが妥当であり、「せんとうだけ」は、

表記につられた読み方と言えよう。湖北山の場合と同じように、両方の読み方が容認されていると考えられる。

最近の傾向として、古文献や地元の古老による呼び名が忘れ去られ、若年層は、ガイドブックでの呼称を流用したり、漢字表記につられた、単純な読み方をすることが多い。幸いにも「こうのやま」は普及しているが、「せんずだけ」は読みにくいためか、「せんとうだけ」が普及しつつあるようだ。

山小屋よりの勧告

芝野　泰明

6月24日、京都仏大センターで「高原植物に彩られる妙高高原」と題して、講演とスライドの映写会が催された。講師は火打山山麓「高谷池ヒュッテ」のオーナー築田博氏である。

火打山は妙高山・影火打山・雨飾山と一群をなす妙高連峰の一つで、日本百名山にも最後の名山として絶賛されている。

近年登山者が急増して、その80％がいわゆる中高年者で、山小屋に疲労回復のための設備が要求されるようになり、現状は2人に蒲団三枚の割り当てであるが、近く増築し各人に蒲団二枚ずつを支給する予定であるという。

火打山への登山や高原の自然観察に来られる人たちに老婆心ながらお願いしたいことがあると託されたので、以下お願いの条項を記することにする。

①ペットの同行、及び自転車等の乗り入れは禁止されている。

②生理的現象は原則として設備のある場所で済ませること。やむを得ぬ場所で済ませる際は、痕跡の残らぬよう後始末を完全にしてほしい。

③積雪で地表が見えない時でも、雪の下には必ず高山植物があると自覚して、また雪のない季節でも至地に腰を下ろさぬよう。

④登山道・木道以外へ踏み外さぬこと。ここの道は狭く、すれ違いのため道を譲る時など道を外すと、湿原は荒れ道幅が広くなり、復旧するには人力の援けを借りても約10年の日時を要することになる。

⑤ストックの使用を控え目に。近年登山者のほとんどが一本ないし二本を使用しているが、極論すればいっさい使用して欲しくないのが本音である。各人の体力により、また下山時の安全確保のための使用は一概に否めないが、ストックの先端の細い金属部分は深く地表を抉り地層を破り、やがて雨による浸蝕・崩壊をもたらす原因になるので、使用の際はせめて先端をゴム製のキャップで保護し、道以外の所に突き立てないでほしい。

果たして私たちはこれらを守っているのだろうか？

随想（山のエッセイ）

ジーパン山歩きも悪くない

平　一郎

30年間の空白を経て、山歩きを再開した際に、つい昔の習慣でガーデニング作業で着古したジーパンをはいて行った。

ところが、このジーパンがおびただしく評判が悪く、多くの先輩方から注意を受けた。

山歩きのどの本でも、

「ジーパンはダメ、水にぬれるとゴワゴワになり、ひざが曲がらない」（奈良静子著『おかあさんは今、山登りに夢中』山と渓谷社刊）

「山のウェアにはコットンは禁物。天然素材のコットンは、インナーにもアウターにも適さない。山ではタブーな素材なのだ」（丸山晋弘著『中高年の山歩き』山と渓谷社刊）

「下半身はぬれると足が上がらなくなるコットンのジーンズ以外は何でも構いません。お好みのものをどうぞ」（横谷晃著『失敗しない山道具選び』山と渓谷社刊）

など、ジーパンは不評である。

ジーパンは濡れると問題があるようだが、私はズボンを濡らした経験がきわめて少ない。天気予報に気をつけて、無理な行動をしないので、雨に降られるようなことははとんどない。沢を渡渉しても、ズボンを濡らすようなへまをしたことがない。雪山では、オーバーズボンやスパッツに守られて、ズボンにまで浸みることはない。

専門家、あるいはベテランたちは、初心者にアドバイスをしているつもりであろうが、服装は、山歩きの状態と個人の好みとによって決めることで、世論や常識で規定することではない。何を着ようと大きなお世話であると言いたい。

私の反骨精神は、やがてズボンだけではなく、シャツや帽子までもジーンズで統一してしまうことになった。そして、服装が全身ジーンズづくめであるだけでなく、リュックは帆布製のキスリングザック。マウンテンストックはゴルフクラブを改造した伸縮できない手造り品である。

だからといって、装備を全く無視しているわけではない。外観上で見えない部分、下着や雨具などは新素材である。

私は山歩きに関しては時代後れの浦島太郎であるが、山歩き以外の分野でも、服装や装備で、いかにもベテランでござい、という格好を見るのが気に入らない。

私は持論として、外見上も、気持ちのうえでも、素人っぽさを忘れないようにしたいと思っている。

保月から廃村の
五僧峠（島津越）を訪ねて

鈴鹿

北川　浩

林道の落岩橋からほんの10分ほどのゆるやかな登りで五僧の峠に来てしまった。茅葺きが崩れ落ち、壁も柱も無残に倒れた廃屋を足下の斜面に見た。家の入り口らしき所に魔法ビンが光っていた。あれあれ、これが五僧峠か、行く手を見上げるとススキの穂が光り、向こうに二軒の瓦屋根が見えた。足元には瀬戸物やガラスの破片が散らばっている。その先にお地蔵様が二体。

峠はせいぜい10坪四方ほどの草地斜面。峠の由来説明板が一つ、反対側には標柱が二本立っていた。一本には県境とある。腰をおろして休憩する場所もなく、立ったままあたりを見廻す。秋の終盤にしては強い陽ざしにススキや夏草が輝く。昔はいざ知らず、今ではもう五僧の峠は手狭な山中のただの斜面になってしまったようだ。

昔ここに住んでいた人々が、この場を離れる時、屋敷跡に植林していったのだろうか、古い石垣の残る平地には杉が風にゆれていた。お地蔵様の背後の斜面は杉の大木が伐採中だった。倒された木は斜面に積たわり、枝葉はまだ緑のままだ。伐採の目印に付けられたらしいビニールの黄や赤の紐が材にからみつき風になびいている。人気のない山中に紐だけが生々しい。

五僧峠にて

保月からくだって来ると、落合橋を渡ったところで林道は二手に分かれていた。正面にお墓が一基ある。その右手に資材倉庫があり、どちらも真新しい。この倉庫の横手に五僧への道があった。倉庫の裏手に行くだけの道のように見えるが、これが五僧への古道らしかった。静かな涼しい谷間の雑木林を登る道だった。かつては大勢の人々が美濃へ近江へと往来

した間道だったせいだろうか、一見歩きづらそうに見える岩の並んだ登り道なのに、歩いてみると不思議に気分よく足が進んだ。岩の配列が足に適当で歩きやすいのだ。

説明板のある後方は山が迫り上がっていて小さなピークが見える。雑木におおわれたピークだが、こちらには伐採の手が入っていない。三国岳へ続く尾根だろう。五僧峠は三国岳から北に霊仙山へとつながる尾根の鞍部にある。東西は美濃と近江を乗っ越す峠道だ。

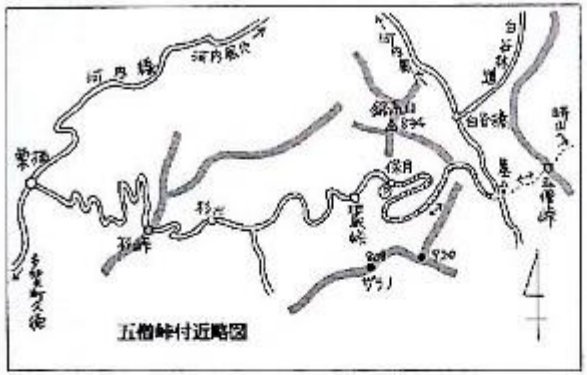
三国岳の方へ雑木と草を分けて入ると、苔むした石垣が続く平地に出た。ここにも杉が植えられている。昔、家々を結んでいた小道は、今、雑木と草におおいつくされ、家屋敷の跡地には杉が育っている。さらに谷の方へ廻りこんで行くと、登って来る時に見えた瓦葺きの民家の前庭に出た。

ここには明治まで木賃宿もあったという。そんな面影の残る大きな家だった。西面の前庭は植え込みがまったくない広場だ。外便所だけが建っている。草もくるぶしほどの雑草が生えているだけで広々として気持ちがよい。家の周囲はモルタルの犬走りで、ゴミ一つ落ちていない。それがかえって人の気配のない証拠のようにさえ思えてくる。どうもここは落ち着かない。弁当を広げる気分にはなれなかった。電気の引っ込み線は切断されてメーターだけが残っている。キツネやタヌキが出入するのだろうか、床下や板戸にやや大きな三角穴が空いている。キツツキの仕業だろうか、それともイタチやネズミの出入口だろうか、板壁には穴があちこちにある。ガラス戸の破れは一ヶ所もなく、しっかりと戸締りされ、戸口には南京錠がかかっている。

北側のもう一軒の家は南の方より小ぶりだった。そのうえ、日陰になるためか湿っぽく荒廃もかなり進んでいる。それでも南京錠がきちんと掛けられ戸締りはしっかりしてある。今ではもうめずらしくなった木の手桶が一つ転がっている。転がってから何年経ったのだろうか。タガは外れてはいない。

結局、峠の説明板の所にもどって来る。伐採された杉に腰かけて弁当にした。

五僧峠は島津越とも言われる。司馬遼太郎の『島津走る』という著書にも出てくると、うちの奥さんの解説を聞きながら峠まで上がって来たが、なるほど説明板にも書いてあった。関ヶ原の合戦に参戦した島津義弘が敗北の末、関ヶ原から時山に逃れ、さらにこの峠を越えて多賀から甲賀、甲賀から堺へ、そして海路島津へと逃げ帰ったとか。五人の僧が住んだので五僧だという説明もされている。



五僧峠付近略図

また、近江西人が美濃の紙を運んだ道でもあったらしい。

多賀からは、杉峠へ登り地蔵峠を越える。杉や保月の集落を通り五僧峠に至る。五僧峠からは一気に急坂をくだって時山に出る。多賀の栗栖から時山まで24キロほどあるという。今はもう越える人もない。鈴鹿の山奥にまで強りめぐらされた林道さえもこの峠は越えていない。忘れられ使われなくなった古道だ。峠に立って美濃側への下り坂を見通してみると、杉林の急坂が霊仙へ続く尾根のつけ根へ消えていった。

昭文社の山と高原地図「霊仙・伊吹・藤原」（山口昭著、昭和五十九年刊）の付録冊子には「五僧は久しく八戸だったが今は廃村」と書かれている。また角川書店刊『日本地名大辞典』（平成三年版）には「五僧（近代）　明治二十二年から現在の大字名。はじめ鳥ヶ畑村、昭和三十年から現行の多賀町の大字。戦後過疎化が進み、昭和四十九年の人口は二人となった」とある。しかし、今は住む人もない。

林道の落石橋に戻る。あの昔伐谷のまん中に電信柱が一本、電線のなくなった柱だけが伐材の放置に乱れる谷にぽつんと立っていた。

私たちはこの日、多賀町栗栖から車で保月まで上がって来た。本来なら栗栖から杉峠へ向けて歩くのがよいのだろうが、事情があってその日の暮れ方には自宅に帰りついていなければならなかった。栗栖からは急坂を上がるが、舗装された林道だから車で行くのは容易だ。ただし、道幅は狭く離合帯もほとんどない。それでも保月に着くまで約30分間は一台の車にも出くわさなかった。杉峠には多賀大社の神木という大杉がある。地蔵峠にもお宮と杉がある。

保月は広くて明るい谷間の集落だ。お宮もお寺も立派だ。小学校の跡地だという駐車場も広くてトイレもある。ここに車を止めて歩き出したのだが、落石橋までは車で行くこともできた。しかし、それ

保　月

では五僧という昔の峠を訪ねるにはあまりに申し訳ないと思った。

保月から五僧へは林道を歩いた。舗装された道は山深いのに栗栖あたりよりずっと幅広くゆったりしている。しかも、一台の車の往来もない。歩き出してしばらく、保月を抜けたあたりでキツネが道の真ん中を私たちの方へやって来るではないか。何か物思いにふけっていたのか、このキツネは私たちには全く気づかず手の届く所まで来てしまった。多くのドングリが舗道に転がっている。車輪に踏まれることもなくそのままだ。落石もいたる所にあるが、そのままだ。岩にダイモンジソウの白い花がまだ咲いている。猿のフンがある。車の来ない舗装林道歩きだった。霊仙山の全容が見える。西南尾根が大きい。道のど真ん中が絶好のポイントだ。写生道具を広げても車を気にすることもない。

廃村は五僧だけではない。杉や保月も人の気配がない。なかでも杉は荒廃の度がはげしい。「無断立入禁止」という立看板ももう古びている。でも、保月にはまだ人がお住みのようだ。まだとは失礼な言い方だが、杉を車窓に見て保月へ来たのだからほっとしたのだ。杉の荒れ放題を見てきた目には、保月の家々の整いようはほっとさせるものがあった。お宮もお寺もきれいに整備され、民家はそれぞれに戸締りされ、今にもだれかが帰宅しそうである。はずれの一軒は小高い丘の上にあったが、見にそこにはおじいさんが門口に腰をかけていた。遠くて声をかけずに通ったが、道にはそのお宅の車とおぼしき軽トラックが停車していた。夏には多くの人が帰ってくるのだと聞く。こんな所に住めたらなあ！　と私たちは歩みる。

「田耕用鍬！」

「雪に閉ざされるよ」

「かまうもんか、春を待てばよい」（昔の人はやってた！）

青空に白い雲が流れ、秋風に落ち葉が舞う舗装の林道を歩いた一日だった。

（平成11年11月初め歩く）

△コースタイム▽

多賀町栗栖（車30分）杉から保月へ（50分）落石橋（10分）五僧峠

△地形図▽2万5千＝高宮・藤立

明文社＝「霊仙・伊吹・藤原」

山と高原地図シリーズ

定価　各780円(税込)

*1 羊蹄・尻別・倶知安・ニセコ
*2 ニセコ・羊蹄山
*3 大雪山・十勝岳・美瑛岳
*4 十和田湖・八甲田・奥入瀬
*5 八幡平・岩手山・七時雨
*6 栗駒・早池峰
*7 蔵王・朴木山・南蔵王
8 鳥海山
9 月山・羽黒山
*10 飯豯山
*11 朝日・吾妻・安達太良
*12 那須・塩原
13 日光・男体山・奥日光
*14 尾瀬
15 越後三山・巻機山・七ヶ岳
*16 谷川岳・武尊山・苗場山
*17 志賀高原・草津
18 妙高・戸隠
19 鹿島槍・五竜・唐松
*20 浅間・蓼科・霧ヶ峰
*21 富士山・御殿場
22 箱根・箱根外輪山
*23 奥多摩
24 大菩薩連峰
25 南アルプス1・甲斐駒・仙丈
26 南アルプス2・北岳・甲斐駒
*27 高尾・陣馬
28 丹沢
*29 箱根
*30 伊豆
*31 富士・富士五湖
*32 八ヶ岳・蓼科
33 美ヶ原・霧ヶ峰
*34 北アルプス縦断
*35 白馬岳
*36 槍穂高・涸沢岳
*37 剱・立山
*38 上高地・槍・穂高
*39 乗鞍高原
40 御岳山
41 中央・南アルプス縦断
42 木曽駒・空木岳
*43 甲斐駒・北岳
*44 塩見・赤石・聖岳
45 白山
46 荒島・奥越・勝原
47 福井県・越前
48 比良山系
49 京都北山1
50 京都北山2
51 京都西山
52 北陸の山々
53 六甲・摩耶・有馬
54 君城高原・二上山
55 金剛山・葛城山
56 紀泉高原
*57 大峰山脈
*58 大台ヶ原・大杉谷・高見山
59 津軽・奥羽縦断高原
*60 秋ノ山・神々の山
61 大山・蒜山高原
62 四国剣山
63 石鎚山
*64 瀬戸内の山々
*65 阿蘇・九重
66 祖母・傾
67 霧島・桜島
*68 宮崎・椎葉・高千穂

（★印は別仕様の地図です）

※昭文社の「山と高原地図50」は年度版として毎年書換発行します。この山行の際はなるべく最新版をご使用下さいますようお願い申し上げます。
※2000年度版は「大雪山」「甲斐駒・北岳」「塩見・赤石・聖岳」「月山・鶴・九重」を全面改訂し、新刊として「霧島・桜島」を刊行しました。

株式会社 昭文社

本社　東京都千代田区麹町3-1　電話03(3556)8111(代)　〒102-8238
支社　大阪市西区西中島5-11-23　電話06(6305)3721(代)　〒532-0011

〈インターネットで情報発信中〉
http://www.mapple.co.jp/

『京都ふるさと登山50選』の山々を訪ねて

赤石ヶ岳・江笠山・伏見山・龍ヶ城

丹波

生駒聳峰

京都新聞社が発行している『京都ふるさと登山50選』の中に「京都盆地下には標高1000㍍以上の高い山はなく、『名山』に値する山は少ない」とある。

たしかに日本百名山に選ばれるほどの山はないが、関西のハイカーには人気のある山が多い。京都の北山は言うまでもなく、丹波にもたくさんの山が存在する。標高は低く深くもなく、都市圏からでもほとんど日帰りが可能で、人も少なく静かで無理をせずとも山が楽しめる。いくつかの山をふり返ってみよう。

赤石ヶ岳（標高736・2㍍ 3等三角点）

綾の大江山は有名でたくさんの人が登る。数年前に登った時、隣に長い裾野を引く赤石ヶ岳が美しかった。簡単に登れるためか、このガイドブックにも記載なく、岳友たちの話題になったこともなかった。南アルプスの名峰と同じ名前だけに、気になる山であった。

福知山から国道176号線を北上し、与謝峠のトンネルを抜けて加悦町に入る。地図を見ると大江山との鞍部にスキー場があり、林道が登っている。大江山からの縦走路はなぜか赤石ヶ岳にはのびず、峠で林道にくだっている。登山道がないのだろうか。

車で双峠スキー場に登ってみる。夏場はキャンプ場になっていて、レストランやおみやげ店があり、「憩いの家」では宿舎や浴場も営業していた。

「憩いの家」で赤石ヶ岳の登路を訊ねると、登る人が無いとか、多分登れるでしょうとか、何か要領を得ない。「憩いの家」のすぐ後ろの山なのにどうも妙だ。見上げる山は草原状で見通しも良く、それ程の高低差もないので簡単に登れるはずである。ともかく登ってみる。

赤石ヶ岳山頂にて

大江山のほうにはモノレールがエンジンの音を響かせ、ハングライダーの荷物を運び上げている。稜線には風を待つライダーの姿も見え、山頂からは三々五々ハイカーもおりて来る。稜線一帯は樹木もなく、草原状で穏やかだ。

稜線まで登ると、道は大江山のほうに向かい、赤石ヶ岳のほうへは踏み跡状態で草がかぶさり、石が露出して歩きづらくなる。しかし展望はすばらしく、大江山が大きく広がる。絶え間なく響くモノレールの音が少し耳障りだ。

頂上稜線に出るとやぶっぽいが、道を見失うほどではない。手入れはされずあまり歩かれていないようだ。そのため「憩いの家」では口ごもっていたのだろう。しかし原因はまだほかにもあった。

山頂に到着すると、一人のハングライダーが羽を広げていた。「どこから登ったのですか」と訊ねると、「モノレールに乗って来た」と言う。山頂の裏側に何とレールが付いていた。エンジンの音が喧しかったのはこのためであった。

下山後判ったのだが、運搬用で料金をとってお客を山頂に運んでいたのだった。それで歩いて登る私たちには面白れの悪い返事だったらしい。道も悪かった。

山頂の展望は西に江笠山の山塊が広がり、南に三岳山がひときわ大きい。尾根には刈り払われた道が北と西から登っていた。こちらのほうがよほど登山道らしかった。

スキー場に下山して確かめると、モノレールのりばがあり、山頂まで15分で500円とあった。しかしこのモノレールは、みかん等の運搬に使われる一本レールの運搬具で、人が乗ると不安定きわまりなく、乗用としての使用が心配な乗り物である。

「憩いの家」で汗を流す。きょうは泊まり客一人とのことだ。一人占めの浴室の窓から見ると、はるかに暮れなずむ加悦の町の灯が輝いていた。

（平成10年11月15日歩く）

△コースタイム▽

双峠スキー場（45分）赤石ヶ岳

△地形図▽20万＝宮津　5万＝大江山

2万5千＝大江山

江笠山（標高727・8㍍ 3等三角点）

国道175号線の与謝峠を挟んで赤石ヶ岳と対峙する山で、福知山市・加悦町・兵庫県但東町の三市町の境界にある。

登路は与謝峠トンネルの南口、仏谷の林道の左股の終点から取りつく。前年行っ

た時は全く道が見つからず、そのうえ他山の帰りに寄ったのでそのまま引き返した。しかし、どうも気になるので、今回再度出かけた。

『京都ふるさと登山50選』では、林道終点から小沢沿いのササのなかを取りついている。その場所へ行きよく見ると、どうやら道の跡のようであった。少したどって沢が二分する所まで来ると中央の尾根は完全にやぶ。仕方がないのでそのままやぶを突っ切って尾根上に達すると、植林帯になった。やぶも少なく歩きやすくなり、やがて主稜線に取りついた。

稜線は西側が植林帯で東は雑木林。稜線を外さないよう登って行くと、植林が切れてぽっかりと山頂に抜け出た。南東が開けて、赤石ヶ岳から大江山間には三岳山が望まれた。北への境界線上に道は見当たらなかった。江笠山の名はよく知られているのに登山路は不明瞭で、下山時も登りに取りついた沢の分岐におりられず、左の沢におりてしまった。こちらのほうがやぶは少なかったが、やはり道はなかった。

（平成11年5月12日歩く）

☆コースタイム☆

林道の左股終点（1時間30分）江笠山
〈地形図〉20万＝宮津　5万＝大江山
2万5千＝大江山

伏見山（標高710・1㍍　3等三角点）

山名は「ふしみ」でなく「ぶくみ」と読む。福知山市と但東町の境にあり、登尾峠から南にのびる山稜上で、谷を挟んで三岳山の西側にあり、東山麓の仏坂から登る。

国道3号線から山石町に向かう426号線に入り、三岳山登山口あたりの仏坂口から仏坂の道に入る。この道は最後の家あたりで終わり、仏坂峠への砂利道はワイヤーが張られている。車道の終点広場に駐車する。背後には三岳山がおおいかぶさるように立ちはだかっていた。ここから見る三岳山は圧巻である。中腹に散らばる集落も手に取るようだ。このあたりでは随一の山だ。

仏坂峠への道を歩む。鹿避けの柵をくぐり地道の林道をゆっくりと高度を上げる。峠の林のなかに二体の石像が静かに立っていた。道はそのまま峠を通り越して小畑にくだって行く。伏見山は右手の稜線だが、何の目標物もなく登山道も見当たらない。

歩きやすい所から稜線上に登る。やぶはないが通らしいものもなく、ただ植林のなかを尾根を外さぬように登って行く。稜線は何度もカーブし、登る時に間違わないが下山時に主稜線をたどるのは難しそうだ。あちこちで鹿が走り去る。最後は西が伐採されたササ地、東面は植林地の急登となる。

山頂には倒れた鹿避けネットときれいな3等三角点がある。雑木林と植林に囲まれて展望は得られない。

下山は北へ急下降。5～6分で鞍部にくだり着く。ここから北へ谷筋をくだるのだが、道も目印も見当たらない。地図で位置を再確認して植林の急斜面をくだる。やがて沢の源流におりた。しかし、道は現れずそのまま沢のなかをくだる。ここが本当の下山路だろうか。疑問を感じながらも注意してくだって行くと、傾斜もゆるくなりやっと道跡が現れた。

堀堤が現れると道は林道となって、車道にたどり着いた。この谷は寺谷となっていた。

村の女人たちは「時々登山者を見かけるが、道が悪いので私たちには登れない」

と話していた。

（平成11年5月12日歩く）

☆コースタイム☆

林道終点（20分）仏坂峠（1時間）伏見山（50分）仏坂峠道
〈地形図〉20万＝宮津　5万＝大江山
2万5千＝三岳山

雛ヶ城（標高646・6㍍　3等三角点）

雛ヶ城は伏見山よりさらに南にのびる山稜上にあり、伏見山の登山口仏坂峠からも登れるだろう。しかしマイカー登山では平に戻るのが面倒なので、山麓の小畑まで車を走らせる。いつものことだが一人でのマイカー登山では、どうしてもピストンコースになるのは残念だが仕方がない。もっともこの周辺の山々に登るにはマイカーに頼るほかはない。

笹場峠の石仏と石碑

コース案内では東山麓の新宮からも登れるとあったが、西側の小畑からのほうが、道が良いとのことで小畑を選ぶ。

この登山口の小畑も仏坂峠を通れば近いが車は通行できないので、遠く国道9号線に迂回して南から入ることになる。

小畑の「あじさい寺」圓満院の山門をくぐり、お寺の駐車場に車を駐める。お寺に声を掛け、登路の獣避けと駐車の許可を得て林道に入る。すぐ鹿避けの柵があり、ロープをくぐって林道終点に着く。

ここの小沢が登山口で、取水のパイプやNTTのケーブルが引かれていた。

植林内の道は落ち葉に埋り不明瞭。NHKのケーブル埋設注意の杭のみが目印だが、分岐らしい所で道を見失ってしまう。仕方がないので、稜線目がけて植林の急斜面をよじ登る。鞍を切らして登りついた稜線は、最低鞍部の峠よりかなり上部であった。稜線には明瞭な道があり、そのまま山頂台地に到着した。

城跡という広い平地の中央には、地元の小学生の丸太作りの休憩舎らしきものが建ち、古びた登頂板が転がっていた。そばには大きく欠けた三角点が見える。植林に囲まれて展望は全くない。片隅にある大穴は、このガイド本によると、大正時代に伝説の「金の鳥」を得ようとして掘った穴とのことだが、いったいどのような伝説だったのか知りたいものである。

新宮への道を探したが不明。小畑のほうが明瞭であった。

下山は鞍部の峠にくだる。笹場峠と言われ、竹石と小畑をつなぐ峠道で、石仏と石碑が立っていた。小畑への道も明瞭で、ジグザグに尾根をくだっている。登りに落ち葉に埋った道を外した所に合流し、お寺に下山した。

このお寺には「あじさい寺」の名の通り、たくさんのアジサイが植えられていたが、まだ蕾は固かった。代わりにウツギの花が満開であった。

（平成11年5月13日歩く）

☆コースタイム☆

圓満院（40分）笹場峠（30分）雛ヶ城（20分）笹場峠（20分）
〈地形図〉20万＝宮津　5万＝大江山
2万5千＝三岳山

「万葉集」歌枕紀行

青谷道より摩耶山

木村太郎

六甲

敏馬の浦から摩耶台へ

信仰の聖地と清遊の楽土との二つの顔をもつ摩耶山は、六甲山系の中でも早くから開けていた。その摩耶山を仰ぎ見る海岸線に摩耶埠頭が張り出している。阪神岩屋駅と阪神高速摩耶ランプから至近の位置に、神功皇后ゆかりの敏馬神社がある。

『摂津国風土記』の逸文によれば、その昔息長帯比売の天皇（神功皇后）が、熊襲の英彦山（今の三摩山）の須義の木で作った船で進軍して新羅を征伐した。一説には息長帯の船は対馬の海からひとりでに動きだし、灘沖まで帰って船が止ったという。卜占で神の御霊の望んだところと知り、灘の地に英彦山の神を祭ることにした。敏馬神社のおこりとする古き伝説である。

英彦山の松原と風土記に記された、白砂青松の美しい渚があって、敏馬の浦と呼ばれた入江を形成していた。上代より使節あるいは防人たちは、難波津を船出して筑紫や対馬、そして新羅へと渡って行った。大和を離れて難波津を発った旅人たちが、最初に目にした他郷の風景が六甲連山や敏馬の浦であった。

敏馬神社境内には、万葉ゆかりの池の碑とともに、人麿呂の歌の敏馬浦跡碑が立つ。

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の

野島の崎に船近付きぬ

（巻三―二五〇）

敏馬神社の万葉歌碑

柿本人麿吾の羇旅歌八首としてまとめられたものの一首。難波の三津の崎を出て淡路の野島の崎を通るまでに見た、敏馬の実景を詠んでいる。

妹と来し敏馬の崎を帰るさに

ひとりし見れば涙ぐましも

（巻三―四四九）

大伴旅人の羇旅歌である。万葉時代の名門であった大伴氏の族長の旅人は、太宰府に着任早々愛妻を病で亡くしている。

その昔敏馬の浦一帯は津の国津守郷と書われていた。敏馬の浦を「神の御代より百船の泊つる」と詠んだ万葉歌人もいた。かつての碇泊地のにぎわいをとどめて、摩耶埠頭の沖合には大型船が出入りしている。

歴史をしのばせる「后の宮」をまつった敏馬神社を後にして、摩耶山に向かって歩き始める。渚のタカバシまで来るとビル群の果てに、目的の摩耶山が手招きしているようである。阪急王子公園駅を過ぎ、旧ハンター部横を通り青谷橋へ出る。青谷道コースでは早速摩耶山に励む人々を見るが、元来は信仰登山の道である。摩耶橋で山登りの身仕度をして、浪切不動明王の小祠に手を合わせようやく登山道に入る。

青谷川の瀬音で涼をとりつつ山道をたどると行者茶屋に着く。山道が石段道に変わり延々と苦行を強いられる。表参道の上野道との合流地を過ぎると天上寺の山門が見える。ひと息つく間もなく天上寺跡への急勾配の石段が待ちかまえている。天空へ誘うかのように果てしなく見える石段を登りつめると、登山者らが触う史跡公園の台地に着く。

梁武帝は女人の難産をあわれんで、香木造りの聖観世音菩薩像をまつっていた。唐に留学していた弘法大師が縁あって持ち帰った、その仏像を奉安した天上寺があった場所である。

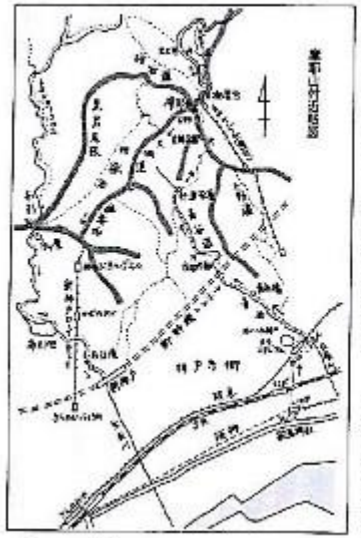
この史跡公園から神戸の街と海とが一望できる。六甲アイランドにポートアイランド、万葉集に詠まれた武庫の浦や敏馬の浦が眼下に広がる。視線をのばせば淡路島と明石大橋の浮かぶ海上を模型のような船舶が行き来している。いつまで見ていても見飽きることがない眺め、この展望こそ表六甲登山の醍醐味に違いない。

史跡公園を抜けて分岐を左へ進み、野仏の道に入る。暗緑色の樹林帯の尾根をたどって摩耶山（699㍍）三角点を踏む。その前方に天狗岩大神の大岩と小祠を見て、山中の道をくだると山上の舗装路に出合う。

華やいだ摩耶山上を翔星台へと廻る。黒岩尾根をはじめ、天狗道や桜谷道からの登山者たちも集まってくる。眺望抜群の遊園台地には摩耶山の別名でもある八州（国）の山名碑が立つ。紀伊・和泉・大和・摂津・播磨・丹波・淡路・四国の国々が見渡せる場所で昼食をとる。

天上寺から布引の滝へ

摩耶山という山名の由来になった摩耶夫人像に詣でるべく、女人高野みち寺の道を歩く。国民宿舎摩耶ロッジの前を進んで、六甲全山縦走路のアゴニー坂への道



を分けて、裏参道より摩耶山天上寺を訪ねる。天上寺は、律令国家の起点となった大化の時代、孝徳天皇の勅願により、インドの高僧法道仙人が開創した古刹であるという。

当時の御本尊は、釈尊自身が生みの母摩耶夫人に感銘し作った十一面観音像であった。有教を目的にシルクロードを渡ってきた法道仙人によって秘仏観音像は山に置かれた。元摩耶の地に帰って復興した金堂に、極彩色の七観音像を背に従えて唐様式の摩耶夫人像は、慈悲心に満ちたたおやかな微笑を浮かべている。

境内には与謝蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」の句碑が立つ。「摩耶詣」という春の季語があるほど観音霊場として栄えた。蕪村には「菜の花や摩耶を下れば日の暮るる」という別の句もある。近世の摩耶山麓では、春ともなれば菜の花畑が広がっていたのだろう。

天上寺は、「関西花の寺第十番霊場」でもある。娑羅（ナツツバキ）の花の寺である。娑羅の花は万葉集には詠まれていない。たとえるならば娑羅の花は「平家物語の花」といえようか。盛者必衰の理をあらわすという娑羅双樹の白い花が、清らかな寺庭をより清潔にして咲いている。釈尊が入滅を願い最後の旅をした地の娑羅樹の林で、季節はずれの花を咲かせたというインド仏教説話を彩った花とは別種の花である。

天上寺を御星台へ戻る途中、摩耶自然観察園の緑の門をくぐり、アジサイ池に立ち寄った。蓮華花と椿と木槿の花を指して、巷間に六甲の三名花と語られている。六甲山のアジサイは神秘がかった色が濃く、花毬が大きく豪華きわまりない。六甲の名花とたたえられることに合点がいく。そしてアジサイは「万葉集の花」でもあった。

言問はぬ木すらあぢさゐ諸弟らが
練りのむらとに詐かれけり
（巻四～七二三）

話のできないアジサイでも心変わりをする時がある。恋の使者として遣わした諸弟が、世に練れた村人に欺かれたことがあったと、大伴家持は詠んでいる。

大伴旅人の太宰帥任官には庶子家持が同行していた。家持の母親が九州で亡くなり、家刀自として故母坂上郎女が海を越え下向してきた。後年家持は歌を交しあった郎女の娘坂上大嬢を妻にしている。

低山登山～本格トレッキングまで、
登山用品のことならおまかせ下さい。
新ハイの会員証で更に割引します。

とスキーのヨシミ
〒543-0054 大阪市天王寺区南河堀4-70
TEL06(6772)7231

る。

天平二年冬に兼大納言として帰京した老境の旅人と、若き家持は敏馬の浦を眺め摩耶山を仰ぎ見ていた。神々しい摩耶山から吹き下ろす霊気が、未来のある家持の五体を包みこんでいた。その時、父の歌の才能は子へと受け継がれたのではなかったか。

我妹子が植えし梅の木見るごとに
心むせつつ涙し流る
（巻三～四五三）

天上寺境内の蕪村句碑

うち靡らし雪は降りつつしかすがに
我家の園にうぐひす鳴くも
（巻八～一四四一）

奈良の佐保の邸へ帰り、旅人は梅の木に亡き妻をしのんで涙した。家持は十五歳のみずみずしい感覚で青春とも思える覚を詠んだ。大伴旅人が亡くなったのは天平三年。大伴家持の歌が万葉集に見えるのは天平四年。それは万葉集を代表する父子歌人の、寂しく、そして華々しい交替といえよう。

摩耶山と市街地とを結ぶ摩耶ケーブルは先の阪神大震災で被害を受けた。六甲摩耶鉄道から神戸市の都市整備公社に事業が引き継がれて、現在復旧工事が続けられている。来春にはケーブル運行が再開される予定である。いまのところ車でも利用しないかぎり摩耶山からは歩いてくだるしかない。

下山のコースは、天狗道から稚児坂を通り市ヶ原から布引の滝へ出ることにした。布引の滝歌碑の道は私のお気に入りである。

布引の滝の白糸夏来ればこそ
絶えずぞ人の山路たづぬる

『新古今集』を代表する歌人藤原定家の歌碑を見つけると、布引の滝道も終わりに近づく。二年前の12月には、新神戸の駅頭にルミナリエが点った景色を見てきた。

冬には冬の、夏には夏の摩耶山の異なる表情に出会えると、妙に感心しながら駅へ歩いた。（平成12年7月8日歩く）

△コースタイム▽
阪神岩屋駅（5分）敏馬神社（15分）阪急王子公園駅（20分）青谷橋（10分）摩耶橋（30分）行者堂（30分）摩耶山史跡公園（20分）御星台（10分）天上寺（10分）摩耶自然観察園（1時間）市ヶ原（40分）地下鉄新神戸駅

△地形図▽2万5千＝神戸首部

△問い合わせ先▽
阪神電鉄三宮駅　078（331）4802
神戸市交通局　078（392）3034
神戸市文化振興課　078（331）8181

連載

日本霊山紀行　番外編（十三）

『新篇相模国風土記稿』（その2）

浅野孝一

山々を知るに及んでその山名の由来を知ることは重要なことである。

例えば白馬岳をシロウマダケと呼ぶ人は非常に少ない。多くの人はハクバダケと呼んでいる。これは地元の農民がその山に出現する残雪の形を農作業の目安とし、その残雪をシロウマと言ったので、シロウマと呼ぶのが始まりである。漢字では代馬と書く、後世白馬と書くようになり、音読でハクバと呼ぶようになってしまった。現在地元の自治体もハクバと言い、駅名もハクバと呼ぶようになってしまった。

日本人ほど古い地名や建造物などをこわしてしまう人種はないと思える。山名などもその例にもれない。

その一例として丹沢山塊の塔ノ岳がある。『風土記稿』巻之十六足柄上郡巻之五玄倉村の項に、丹沢を代表する塔ノ岳の記述がある。「塔ノ嶽　村東六住郡界ニアリ。此山ノ中腹ニ。土俗黒尊佛ト唱フ大石アリ。（高五丈八尺許。其形座像ノ佛像ニ似タリ。故ニ此稱アリ）」と記されている。古い写真を見ると尊仏らしい石が写されている。この文章を見ると、かつて塔ノ岳は尊仏山とも言われていたことが分かる。

この岩は関東大震災の時、谷に落ちてしまった。そのゆえか山頂にある山小屋は尊仏山荘の名称が付けられている。現在ガイドブックの中に塔ノ岳を塔ガ岳と表示しているものがあるが、これも一考を要する問題である。

また、西丹沢にある世附村を先輩よりユズクムラと教えられていたが、風土記稿に「與都久牟良」と読み方が付けられてあるので、ヨズクムラが正しい読み方であるのを知った。

山名についても読みにくい山が多い。八菅山も八菅村の項に「波須計牟良」とあるので、ハスケヤマであると判り、古文書・文献のありがたさを知った。

それはさておき、東京湾と相模灘にはさまれた三浦半島に、大楠山という242m の山がある。東京・逗浜に近いので休日には多くのハイカーに登られている。

早春この山に登ると、日当りのよい登山道にはオオイヌノフグリやホトケノザの花が咲いている。ある日、私はひとり前田川沿いの里道を山頂に向かって歩いた。樹林帯を抜けて山頂に立つと、晴天のもとに相模灘をへだてて箱根や伊豆半島、丹沢の山々が見え、東京湾をへだてて房総半島の富山がよく見えた。

大楠山については「保久須夜末　下平作村界ニ在（登二町許）山上昔老樹アリシ故ニ名ツク」。大楠山は逗子市と横須賀市との境にある山であるが、かつてこの一帯は要塞地帯であったので、地形図は入手できず、カメラを持っても歩けなかった。地形図上も空白であった。

逗子市の池子について『新篇相模国風土記稿』もこの部分だけ空白となっている。

このことについて「三浦郡中。池子村ハ。園村。鎌倉英勝寺領ニシテ。水府ノ吏是ヲ管ス。搜索ヲ盡シ難シ。因テ闕如ス」と記している。

当時池子村を管理・支配していた水戸藩が、その調査をこばんだのであった。水戸藩には皇国史観の考えがあり、幕府林大学頭の考えは実証史観に基づいていた。歴史に対する史観の違いからこのような事態が生じたと考えられる。

この件に関し、明治期の歴史家・地理学者であった河田羆は「新篇相模国風土記解説」の中で「今幕府吏員之ヲ査覈セント欲ス、素既ニ公正ニ屬シ、事秘機ニ關スルニ非ス、而テ拒テ之ヲ容レズ、此一編盛大ノ舉ヲシテ一村ヲ覈テ登載スルヲ得ザラシム、蓋藩制己ムヲ得サルアルベシト雖モ、竟ニ其編狹ヲ疑ザルナリ」と水戸藩を批判している。

『新篇相模国風土記稿』が起稿されたのは天保元年（1830）で、同十二年（1841）に完成した。これが完成するや、幕府は伊豆国の風土記の作成に着手した。そして編纂員として内山孝之助温恭等を調査に向かわせている。しかし天保十二年（1841）に、林大学頭衡、問宮士信が死去した。また、幕府の財政等の緊縮政策によって中止、未完となった。

地理取調所は幕末に至るまで存続し、幕府直轄地の調査に当たり、事業は明治政府に引き継がれた。

河田羆は多くの歴史・地誌の文献の解説を「史学雑誌」に発表した。著書としては『大磯記』や『武蔵通志』『静嘉堂秘籍志』がある。

「新篇相模国風土記稿解説」の中で「林衡一代ノ頑固不世ノ卓識ヲ以テ其編纂編纂スル所総テ有ノ書ニ非ルナシ、而テ獨リ地誌ニ於テ、無用ノ業ニ汲々スル者ナランヤ、今本編解題ニ草スルニ當リ、之ヲ推論シテ、世ノ地誌ヲ知ル者ニ示ス」と記している。

明治政府は、皇国地誌編集事業を開始したが、その完成をみるに至らなかった。その編集員の一員であった河田羆はその中に「無用ノ業ニ汲々スル者」云々と記したのは、皇国地誌編纂未完に対する河田羆の不満の声として感じるのは、私一人のみではないと考えている。

（この項終わり）

観光バスなら 確実第一の
太陽観光開発㈱へ!!

・小型（20人・24人）
・中型（28人乗り）
・中2扉（45人乗り）
・大型（55人・60人）
いずれもサロンカーからデラックスまで
スキーバスもあります
〒578-0971 東大阪市鴻池本町1-20 オカダビル4F
電話 06(6745) 3911・FAX 06(6745) 3983
夜間・電話 06(6242) 2371・FAX 06(6242) 2372

結局登れなかった

奥茶臼山

松田敏男

南アルプス

北岳など南アルプス北部の山に登った時、南方の重量感ある山並を一通り眺め終わったあと、その主稜線の右に少しはずれてどっしりと大きく裾を引いている山が目に留まった。それが奥茶臼山だと後で判った。標高は2473・9㍍、立派な高さだ。大沢岳から北西に派生している稜線の最後の高まりで、北は前茶臼山を経て大鹿村の大河原に没し、南は尾高山・鋤池山と高度を下げて日本のテロルと呼ばれる上村の下栗へと続いている短い稜線の最高峰だ。

数年前に買った「名古屋周辺・続山旅徹底ガイド」(中日新聞本社刊)の中に、「尾高山はしらびそ峠からのファミリー向きの山」という案内があって、積雪期なら尾高山にテントを張って奥茶臼山を往復できるのではないかと思い立った。

年末ならまだこの地域の積雪量はそう多くない。タクシーでだいぶ上まで入れるだろう。そして、しらびそ峠から尾高山までは登り2時間のファミリーコースということだから、雪が積もっていても安全だろう。問題はその先だが、地形図を見る限り等高線の間隔が広く樹林帯なので吹きさらしとか斜面が急な所もなさそうである。赤布をたくさん持って往路をしっかり確保すればあとは体力だけの勝負と思えた。

日程も、4泊できるという余裕のある計画で出発した。JR豊橋駅まで新幹線、飯田線に乗り換えて平岡駅へ行き、すぐ出発するバスに乗り込む。あらかじめ電話予約しておいたタクシーが終点の上村役場前で待っていてくれた。運転手さんの話から矢筈トンネルが開通してからは飯田から入るほうがずっと便利になったということが判った。

上村程野から林道に入ってぐんぐん上がって行くが雪など何もない。予想では林道の途中から歩かねばならないと思っていたのが、逆に水があるのだろうかという心配に変わり始めていた。しかし、しらびそ峠にはうっすらと雪があり、タクシーで峠まで上がれた。絶妙のタイミングだ。

シャツ一枚で歩き始めた。着ていた服をザックに入れて重さは約27㌔。これまで経験したことのない重さだ。山道は尾高山まで2時間の行程なのだから大丈夫と、家を出る時に切りつめなかった結果である。

全く雪のない植林の南斜面を登る。年末とは思えないポカポカ陽気である。ピッケルとアイゼンは本当に必要な箇所があるのだろうか。何かポッカ弧緩のようだ。

樹林帯に入ると、さすが南アルプスと思える深い森になった。そして待望の雪の斜面を登る。男性2人の登山者がおりてきた。軽装備だから尾高山往復だろうか。尾高山より先のトレースはどんな状態なのだろう。27㌔の重量はさすがに応えた。かなりのスローペースだ。樹林の間から雪の主稜線が光るのが何よりの救いだった。荒川岳は見慣れている厚さがなく単純な三角錐形をしていて少し物足りない感じだが、その右の蓑右岳は堂々としていた。その右に大沢岳がいちばん近くにそびえ、鬼岳への稜線の向こうに聖岳が奥深く望まれた。

深い樹林のなかの急坂を登りきった所が尾高山の頂上だった。大きめの岩が出ていて腰うのにはいい頂上だったが、テントを張る平地はなかった。ほんの20㍍程先に進んだ所が少し幅広の登山道になっていて、1人用テントなら張れた。雪がたくさんあれば雪をならして大きいテントも張れる広さだった。雪面は新雪のまま、先程の登山者も来ていないようだ。真新しい雪の上にテントを張れる無上の喜びを味わった。

この先に展望台がある。テントを張ってすぐに見物に出かけた。5分とかからない所に樹林が唐突に切れて大岩が張り出していた。その上に立つと南アルプス両部の大パノラマが満喫できた。目の前には巨躯の山、奥茶臼山が大きかった。

絵を描くには絶好の場所だが、16時を過ぎていた。水づくりから始めねばならないのですぐにテントに戻った。

最近発売された水を入れない時は薄くたためる水筒を今回初めて持ってきた。問題は雪を溶かした水をどうやって口が小さくてしっかりしない形の水筒に入れるかだったが、ゲル状のスポーツドリンクの下半分を切ってジョウゴとして持ってきた。このジョウゴもかさばらない。これにコーヒー用のろ過紙を差し入れて水を入れた。始めのうちは水筒が自立しないので外にこぼしたが、ある程度入ると調子よくなった。テントの床に置いた画板の上で作業したが、こぼれた水はすぐに拭かないと凍ってしまう。テント内でさえもマイナス10度近かった。

次の日はいい天気だった。赤布をたくさん持って8時に出発した。倒木の多い広い尾根だ。目印になるテープが案外多く付けてあった。これなら行けそうだと

登山道より奥茶臼山を望む

新刊

近江の山を歩く

草川啓三 著　菊変判・二〇〇〇円

夕暮れの山頂、変幻の谷、峠の廃村、線乱の花園、山寺の秋…湖国の四季50山。珠玉の紀行文と趣きある カラー写真で綴る、コース地図付グラフィックガイド。

大和まほろばの山旅

内田嘉弘 著　四六判・二〇〇〇円

―奈良県北・中部の山―山の辺、大和高原、宇陀、室生、初瀬、飛鳥、金剛、生駒 古代史探訪も併せた低山ハイキング。約60山地図、参考タイムつき完全ガイド!!

★表示の定価は消費税を含みません

ナカニシヤ出版

京都市左京区吉田二本松町2
☎075-751-1211 〒606-8316

思いながら進んだ。雪面にはっきりと足跡がつくから安心である。倒木をまたぐ時はピッケルで20㌢程積もっている雪を払い落として、下山時の目印とした。

樹林がまばらになって小広い雪面のこんもりとした高い所にたどり着いた。目印のテープが続いていたので、奥茶臼山の南西1㌔の2300㍍のコブに来たのかと思いながらくだり始めるとテープがなくなった。まわりは樹林に囲まれていて奥茶臼山は見えない。こういう時は用を足して気持ちを落ち着かせることが大切だ。しかし、その効果もなく現在地を確定することができない。いちばんはっきりしているような尾根をくだろうと思い、赤布を付けながらくだり始めたが、樹林が少し切れた所から意外な方向に奥茶臼山が見え、これは違うと思った。左にふり返るような方向なのだ。登りくだりひとつひとつを確認しながら確認しなかったツケがきて、この場所で道石を見ても使いものにならなかった。

元の高い所に引き返してトレースを戻る。すると小広い雪原の始まるあたりに、右へ樹林のなかに入って行く窪みを見つけ進んでみた。暫進するとその奥に赤布があり、ぐんぐんくだっている。これまでと同じぐらいの間隔で目印が出てきたので、これでよいのだと思えた。踏み跡と言えるものはほとんどない。倒木をまたぎ続けて次の目印を見つけて進む。そのあと尾根の上にのっているという感触がはっきりしてきたので間違いないと思えるようになった。

一度枯れ木が何本かあって遠くが見える斜面をくだる所で奥茶臼山がまだ遠くに見え、その左に仙丈ヶ岳が白く光っていた。さっきのコブは2300㍍どころではない。しかし今度は前が全く分からない背丈の低い針葉樹林帯に突っ込む。純度の高いやぶこぎとなった。赤布を付けながら突破すると枯れ木帯になった。青空が不安を少しは救うが、展望がきかない。日差しをしっかり受けた地面に雪はなかった。雪がないと相かく赤布を付けないと進めない。はっきりとした尾根ではなく、さまよう感じとなった。時刻は12時。ロスタイムがあったから3時間程でテント場に戻れる。きょうはこのあたりが潮時か。何か雪の冬山でないような気分でもの足りないが、あすはピッケルとアイゼンを置いてもう一度来ようと決めて戻ることにした。

体の痛くらいに雪をかき落としておいた倒木に、ぴっしり付着している苔が、日差しを浴びていっせいに空に向かってのびているのを見る。何とも心なごむ世界である。その苔の優しい感触をなでては、真っ白い雪の樹林の世界の超過を楽しんだ。

尾高山の登りより赤石岳（左）大沢岳（中央）聖岳（右）を望む

しかし次の日は曇っていて、ちらちら雪が舞っていた。だめだ。撤退だ。一日中雪が降ったりやんだりした。水づくりから始まり、食事やコーヒーをたてたりでテント生活を楽しんだ。寒い所で絵を描く時に使うために買った礼装用の絹の白い手袋が重宝した。粗かな作業が快適にできる。また文具店で売っている200円の鉛筆削りのナイフで少し凍ったエンジンも簡単に切れて、重い登山ナイフなど必要のないことに確信がもてて、何となくうれしかった。

早く寝たぶん翌朝は早く起きることができた。しかし安全優先を考え行動は明るくなってからと、7時15分に出発した。

道ははっきりとしたトレースが付けてあるからさっさと進めた。ピッケル・アイゼン・絵の道具を置いてきたが、食料・水・コンロ・救急用具にカメラを持っているので大きなザックの重さも含めてそれほど空身という感じはしない。今度は地形図をしっかり見て、鞍部やコブ上などはっきりした地点に時刻を書き込んで進んだ。きのう間違えた雪のコブは2266㍍地点だった。予想していたよりわずかしか進んでいなかったのだ。2266㍍地点を8時05分に通過。そして2日前に撤退した地点に9時15分に着いた。尾高山と奥茶臼山との水平距離でちょうど半分の地点である。ということはまだ2時間以上かかるということだ。しらびそ峠から尾高山までの水平距離が尾高山から現在地までのそれと同じかわずかに長いくらいなのに、また高低差にずいぶん違いがあるのに空身なら2時間なのだから、ここまで来るのは倒木などの影響で進めないでいるということだ。先行きが少し不安になってきた。目の前には初めて進むやぶ気味の樹林の山がひかえている。ともかくまだ9時過ぎなのだからと思い直して登り始めた。

目印はあるものの左右に蛇行している。雪をかぶった岩を登ろうとすると濡れた苔が出てくる。道いずるようにして登る。藪をかがめたり背のびしたりしてひとつひとつ突破していくような道だ。10時ちょうどに2269㍍地点に着いた。ぐっと南東へ進路を変えて鞍部に着く。10時10分。赤石岳方面が見える所だった。しかし、いつの間にか赤石岳は雲におおわれていた。この調子だとまだ3時間はかか

尾高山のテント地

るだろう。この山自体も雲におおわれてしまうかもしれない。雪が舞うかもしれない。

雪の降るなかをあの首むした岩を這いずりおりたり倒木をくぐったりしてくだることになるかもしれない。しかしまだ10時過ぎ。でも運よく進めても頂上は13時か。テント場に戻るのは17時頃か。17時と言えばほぼ真っ暗だ。

尾高山にテントを張っての往復というのに無理があった。テント場をきのう少しでも前進しておけばよかった。などといろいろおもいめぐらし、雪におおわれた赤石岳方面を見ながら、しばらく休憩した。

2266がのピークまで戻った。もうおなじみの道となっていたから天気が崩れても大丈夫。ところが樹林からぽっかり抜け出た空は青かった。あの先本当に3時間もかかるのだろうかなどと、今さら考えてもしかたのないことだった。

山は心と体の養生の場所なのだからこれでいいじゃないかと、反省してみたりしたが何だか落ち着かなかった。しかしテント場手前の展望地に戻った時、赤石岳はもとより奥茶臼山も暗い雪雲におおわれていたので、これでよかったのだと思えるようになった。

テントに13時15分に戻った。毎夜水づくりに時間がかかってスペア電池も残りわずかなので、すぐに最後の水づくりに勤む。

尾高山頂上で4泊したが、そんなに長い時間とも思えなかった。降雪日以外は夜半遅くに月が出て、樹林の影がテントにできて楽しかった。楽しみにしていた鹿などの鳴き声もなく、風の音だけの静かな夜だった。

最終日の朝、テントをたたむと、その形だけ雪がなくなっていた。腰のヌタ場のように見えた。晴れていたので最後の見納めに岩場へ行った。これから長い林道歩きがあるので、そして16時40分の飯田行きのバスに間に合わせねばならない。結局、絵は描かないまま頂上をあとにした。

しらびそ峠へおりて1時間ばかり車道をくだっている時に自動車とすれ違った。尾高山を登っている時に自動車とすれ違った時間ぶりに人間に会ったことになる。人に会わない最長記録を更新した。

また、積雪期に小屋のない所でのテント泊の最高地点という記録もできた。荷物27キロと合わせて三つの記録が何となく自信と満足感をもたらし、奥茶臼山に登れなかったことを帳消しにするだけの価値ある思い出深い山行だった。

（平成11年12月23日～27日歩く）

《コースタイム》

上村（タクシー30分）しらびそ峠（3時間）尾高山（3時間）2269が（2時間30分）尾高山（6時間）上村程野

《地形図》2万5千＝大沢岳

ベストシーズン到来！！

ネパール・ニュージーランド

＆海外の名峰登頂

ロッジ泊で歩く　エベレスト展望トレッキング9日間

憧れのエベレスト街道を歩く、ネパールでも1，2を争う人気のコースです。ロッジに泊まりながらの快適なトレッキングです。シャンボチェの丘からは世界最高峰のエベレストが一望できます。

◆出発日　12/9(土)　◇旅行代金　¥275，000

ロッジ泊で歩く　ヒマラヤ大展望プーンヒルトレッキング9日間

アンナプルナ山群とダウラギリ山群が一望できる人気のコースです。8000m，7000mの峰々が赤く染まるプーンヒルからのご来光は素晴らしいの一言です。3月はシャクナゲで山が真っ赤に染まります。

◆出発日 ①11/5(日) ②12/5(火) ③1/16(火) ④2/14(水) ⑤3/27(火)　◇旅行代金　¥272,000～¥282,000

ボルネオ最高峰　キナバル山登頂　5日間

マレーシア・ボルネオ島最高峰のキナバル山に挑戦します。熱帯のジャングルから一枚岩の山頂まで変化に富んだ山です。海外登頂登山の入門コースとしてもおすすめです。

◆出発日　①12/13(水) ②12/31(日) ③1/17(水)　◇旅行代金　¥159，000～¥238，000

ニュージーランドハイキング入門 マウントクック 6日間

ニュージーランド最高峰のマウントクックを眺めながらハイキングを楽しみます。6日間という短い日程でニュージーランドを楽しめます。海外が初めての人にもお勧めです。

◆出発日　①11/29(水) ②12/6(水) ③1/10(水) ④2/7(水)　◇旅行代金　¥223,000～¥233,000

ミルフォードトラックを歩く　9日間

世界一美しい散歩道と呼ばれるミルフォードトラックを、テ・アナウからミルフォードサウンドまで歩きます。1日たったの40人しか入山できない、豊かな原生林や湖、氷河、滝など素晴らしい景観が続きます。

◆出発日　①11/25(土) ②12/2(土) ③1/12(金) ④2/17(土)　◇旅行代金　¥433,000～¥443,000

ミルフォードトラックとマウントクックハイキング　12日間

ニュージーランドの自然を心ゆくまで楽しめるコースです。世界一美しい散歩道ミルフォードトラックとニュージーランド最高峰マウントクックハイキングの両方を楽しめるお得なツアーです。

◆出発日　①11/25(土) ②12/2(土) ③1/12(金) ④2/17(土)　◇旅行代金　¥478,000～¥488,000

アフリカ最高峰キリマンジャロ登頂とサファリ　11日間

アフリカ最高峰で赤道直下にあるにもかかわらず、氷河を抱くキリマンジャロ登頂ツアーです。高度順応日もしっかりと設け、高度障害が最小限になるように ゆったりと歩いていただけます。

◆出発日　①12/11(月)　②2/24(水)　◇旅行代金　¥535，000～¥555，000

憧れの南極大陸上陸と南米パタゴニアの旅　22日間

白い大陸南極と南米パタゴニアの旅です。9日間のクルーズの間には何度も南極に上陸し、様々な自然や動物を楽しみます。地の果てパタゴニアも南極に負けない素晴らしい自然が広がります。

◆出発日　1/20(土)　◇旅行代金　¥1，066，000～¥1，286，000

韓国最高峰　ハンラ山　冬季登頂　3日間

島にして山。東シナ海に浮かぶ済州島の韓国最高峰ハンラ山(1951m)に登頂します。積雪期にしか登山許可がおりないため、積雪期の登山となります。しかし、軽アイゼンで十分登ることができる比較的穏やかな山です。

◆出発日　1/19(金)　◇旅行代金　¥88，000

お問い合わせ・お申し込みは・・・　運輸大臣登録旅行業1366号　(社)日本旅行業協会　ボンド保証会員

アミューズトラベル㈱　☎06-6456-3366

〒530-0001　大阪府大阪市北区梅田1-1-3大阪駅前第3ビル7F　FAX 06-6456-3377

新ハイ例会・自然観察山行

烏帽子岳・水晶岳・鷲羽岳・雲ノ平（前編）

鷲見守康

北アルプス

7月20日「海の日」とその前後の土・日曜を利用した新ハイ例会縦走山行は、いつも旦前になってリーダーの私に何らかのアクシデントが生じてしまうようだ。一昨年も昨年もそうで、昨年は中止という事態になった。

今年は、山行の3日前の夜に仕事がらみの事件が発生。解決のめどがつかないまま事態は次第に悪化し、出発日の19日昼過ぎには自らの参加を断念せざるを得ず、サブリーダーのMさんらに山行を委ねるため、職場から電話連絡に追われるはめになった。

ところが、休日中の職員動員計画等を想案している最中の17時半過ぎに、事件は急転直下解決したのである。自分自身であらかじめ想定していた出発のタイムリミットは過ぎていたが、参加不可能な時刻ではない。「とにかく行かなければ……」と自らを奮い立たせてドタバタと慌ただしく出発した。

数日間蓄積したストレスのためか、あるいは事態の急変に気持ちの整理が追いつかなかったためか、夜行直通バス「さわやか信州号」乗車地の京都へ向かう電車の中で、私はずっと放心状態だった。ようやく気を取り直したのは、京都駅に集まっていた参加者の皆さんの静かな笑顔に出会えたときであった。

三ツ岳から野口五郎岳（後方は槍ヶ岳）

ブナ立尾根を登る

1日目、集合地の信濃大町駅前は早朝から登山者であふれ返っていた。ここから登山口となる高瀬ダムまではタクシーを使う。予約しておいた駅前のアルプスタクシーに分乗し、ひとまず七倉まで走る。七倉から高瀬ダムまでは東京電力の管理道路で、特定のタクシーしか乗り入れできない。しかも、車両規模や乗り入れ台数、時間帯の制限があるのだ。

七倉にはすでに何台ものタクシーがゲートの開く時刻を待っていた。待ち時間を利用して登山届導所に登山届を提出。

ゲートを通過すると、まもなく前方にロックフィル式の巨大な高瀬ダムが姿を現した。道はその岩石積みの巨大斜面をジグザグに追り上がり、ダムの上部に達していた。

高瀬ダムの湖面の奥には東銀座の山並が続き、その上には青空が広がっている。出発を前にして、私は体の芯に疲れが残っているのを感じていた。休憩はかなり悪い。きっとバテるだろうという予感に、行けるところまで先頭に立ち、駄目となれば最後尾からついて行こう、と考えていた。

ダムを車から西に進み、不動沢トンネルを抜け長い吊橋を渡り、次に湯沢吊橋を越えると尾根取付点に着いた。ブナ立尾根は行程のポイントごとに1から12の番号が付けられ、稜線に向かってカウントダウンしていく。

この尾根の登りはその名にふさわしく、取付点からブナ林が清々しいけれど、登るにつれ私は変調をきたし、パーティメンバーの皆さんにあれこれとお世話をかけるよう迷惑をしてしまった。そして、行程のちょうど半分にあたる6の番号札のある休憩ポイントあたりから、ついに落ちこぼれ、予想通り最後尾をとぼとぼ歩くことになった。

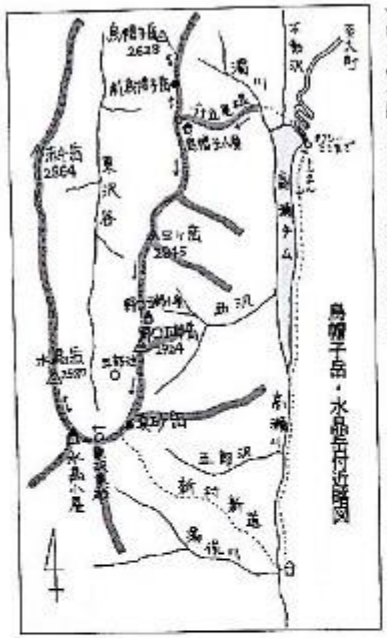
そんな私が言うのもおこがましいけれど、ブナ立尾根は北アルプス三大急登の一つと呼ばれてはいるものの、登山道はかなり整備され登りやすくなっている。だから、時間に余裕をもってじっくり登れば、それほど心配はないのだ。

烏帽子岳へ

私たちが烏帽子小屋に到着したのは、13時過ぎ。途中の昼食休憩を含めても5時間半余りで、順調なコースタイムであった。

小屋で手続きをし、割り当てのスペースにザックを置いて身軽になり、烏帽子岳をめざした。二重山稜の道は花崗岩の岩屑がいっぱいで、今も凍結融解作用により砂礫が動く斜面のようだ。このような高山荒原ではほとんどの植物は生息できない。強く長い根を張って耐え、孤高に生きるコマクサの世界だ。ほとんどの株が花を開き、カメラマンの絶好の被写体になっている。

烏帽子岳の手前にはニセ烏帽子岳（前



烏帽子岳）が立派なピークを描いている。このニセ烏帽子から眺める烏帽子岳が一番絵になるのだろうが、あいにくガスがかぶり山容を隠している。ニセ烏帽子の頂上付近を捲いて行くと道はいったん下降していく。

烏帽子岳は表銀座の燕岳に似て花崗岩のトアが林立する鋭峰だ。山頂には数人しか立つことができず、私たちのパーティを含め、登頂記念の写真を撮影する登山者が順番待ちをしている。私は山頂で記念写真を撮る習慣がないので、カメラマンの役割を請け負った。

小屋に戻ったのは、16時頃。山小屋はかなりの混雑で、一枚の蒲団を2人で分け合った。夜行バスでの疲れが残っているせいか、寝つきの悪い私もめずらしく早く寝入ってしまった。

野口五郎岳へ

2日目、烏帽子小屋の朝は清々しく晴れわたった。小屋の前からは赤牛岳を望み、三ツ岳への稜線も見える。早く稜線のピークに立ちたい、と女性陣から声があがる。

予定通り6時出立。ミヤマキンバイ・シナノキンバイ・ハクサンイチゲなど、お馴染みの花たちを愛でながら歩く。進むにつれ視界が広がって北アルプスの山並が浮かび上がり、眼下には登山口の高瀬ダムが見えてきた。

肩にあたる2616㍍の平坦地に至ると、三ツ岳が前方にどっしりと構えている。標高差は200㍍余り。さらに高みへと続く稜線のスカイラインがのびやかで、登山者の姿が米粒のように見える。

三ツ岳山頂に、標識が一本立っているだけのこじんまりとした平坦地だが、山岳展望がすばらしい。立山連峰・後立山連峰・表銀座・裏銀座・黒部源流部・槍・穂高連峰と北アルプスの全景が見渡せる。この三ツ岳から水晶岳まで、この日の稜線縦走は天候にも恵まれて、北アルプス最深部の遠大な景観が満喫できた。

陽が降り注ぐアルプスの稜線は暑い。野口五郎岳に至る道筋の雪田では、暑さに我慢できず、雪田の雪を掘りかき氷をつくって味わった。夏のアルプスでは残雪が心地よく、そして貴重な飲料水ともなるのだ。

野口五郎小屋からわずかに登り、野口五郎岳山頂に立つ。広々とした山頂からの山岳展望とともに、この野口五郎岳にはもう一つのセールスポイントがある。北アルプスでも屈指の鮮やかさをもつカール（圏谷）である。

このカールの壁は、東側は滑らかな斜面が稜線からカール底まで豊かな曲線を描いて流れるように続き、両側はデコボコの著しい岩壁とその下に岩屑の溜った見事な岩雑がつくられている。カール底には、モレーンがくっきりとしたS字形で波打つような華麗な配列を見せ、氷河湖ともいえる五郎池は静まり返っている。野口五郎岳のカールは、まさに氷河がつくった箱庭である。

水晶岳にて

野口五郎岳の向かい側には水晶岳が残雪を輝い、いぶし銀のような独特な山肌を見せている。茫洋としておおらかな感じの野口五郎岳と比べてきりりとした印象の水晶岳は、白っぽい山体の野口五郎岳に対し、色合いも黒々とした山体で「黒岳」という別名もうなずける。実に、シックで美しい山だ。

野口五郎岳からくだり、真砂岳の山頂を捲いて竹村新道を分けると、大きく下

降して東沢乗越に着いた。見上げると水晶岳への登りは険しい。

崩壊の進んでいる岩場を慎重に歩いて行くと、植生に変化が生じているのに気づく。ミヤマオダマキの群落に喫声をあげ、ムカゴトラノオ・ミネウスユキソウ・ミヤマクワガタなど、高山の崩壊地ならではのお花畑に足を止める。「ああ、やはり水晶岳の花は期待できそうだ……」と呟いた。

野口五郎岳から水晶岳を望む

裏銀座の烏帽子岳から野口五郎岳までのルートは岩屑帯が続き、コマクサは咲いているものの、花の種類はげっして多くない。けれど、水晶岳は違うようだ。だから一度、水晶岳を見てきてほしい、と自然観察会の仲間に言われていた。

水晶小屋の前にザックをデポし、さっそく水晶岳をめざす。岩壁の連続する道はなかなかスリルがあり、ミヤマダイコンソウ・シコタンソウ・イワベンケイ・イワウメなど、岩壁特有の花が斜面を埋めている。山頂からは明日のルートの雲ノ平が望めた。

山頂から小屋への帰路、水晶小屋に水がないこともあって雪を水筒に補給しつつ、豊富な雪田で全員遊んだ。

この日、水晶小屋の泊まり客は、小屋側もこれまでに経験したことがないという人数にふくらんでいた。もともと定員50人という小さな小屋は、前代未聞の混雑となり、他の多くの登山者とともに私たちは夕方遅くまで、寒さに震えながら外で過ごした。

おかげで、沈みゆく太陽が演出するアルプスの壮大な絵巻を目の当たりにできた。昼頃から西方向に広がった雲も上がり、富士山も白山も大絵巻に加わって、言葉では言いつくせない景観であった。

夜、小屋内は凄惨なありさまとなり、一睡もできない人が多かったようだ。まさに水晶岳でこの世の天国を味わい、水晶小屋で地獄を見た思いであった。

（つづく）

（平成12年7月20日～21日歩く）

△コースタイム▽

（7月20日）信濃大町駅5・30（タクシー この間待機時間あり）高瀬ダム7・30―ブナ立尾根取付点7・55―（この間昼食休憩あり）―烏帽子小屋13・10～50―烏帽子岳14・45～15・10―烏帽子小屋16・00（泊）

（7月21日）烏帽子小屋6・00―三ツ岳7・10―野口五郎岳10・00―真砂岳10・50―（この間昼食休憩あり）―東沢乗越12・35―水晶小屋13・40―水晶岳14・25―（この間雷雨で休憩あり）―水晶小屋15・25（泊）

△地形図▽

昭文社＝「鹿島槍・黒部湖」「燕・立山」

連載

三角点を訪ねて ⑦

権現谷の秘境、コザトへ

鈴鹿

磯部 純

本格的に鈴鹿の三角点を訪ね始めたのは平成10年の5月からである。それまでに、道のしっかりしている霊仙山・谷山・三国岳・烏帽子岳や、雨の雨乞岳・高畑山・那須ヶ原山等は登っているが、10年以上前の話。

鈴鹿は京都の山と違い山が深い。最初は鈴鹿を知っている人と歩いたほうがよいだろうと思い、だれかいっしょに歩いてくれる人はいないかと探したところ、思いだしたのが山本さん。彼は岩野さんの例会でサブをしていたので、迷わず新ハイ会員となった。おかげさまで岩野さんの例会へ参加するようになり、鎌子ヶ口・サクラダチ・宮指路岳・雨乞岳・土倉岳など、一人ではなかなか踏むことのできない三角点峰を踏むことができた。

ちなみに、鈴鹿山系で登る目標にしている500㍍以上の三角点峰は65山。これからも他の三角点峰へ連れて行ってもらえるに違いない。

今回訪れる三角点「コザト」も岩野さんの例会で訪ねることができた。

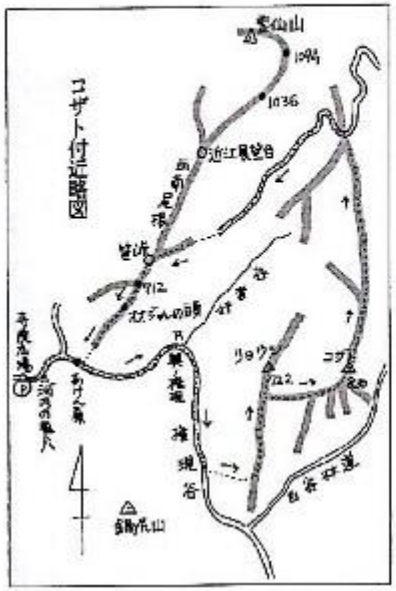
「コザト」は霊仙山の南、権現谷と白谷に囲まれた合地の奥にある山である。山名「コザト」の由来は明らかでなく、地元あけん原では「高尾山」と呼んでいるそうだ。この三角点もまだ踏んだことがなく、どこから登ろうかと悩んでいた。なにせ、鈴鹿の南部はだいぶ頭に入ってきたが、霊仙山の南、奥尻山付近のこのあたりは全く足を踏み入れたことがなく、未知の世界と言ってよかった。

奥の権現

集合場所が遠いこともあり、家を6時に出発した。音速道には入らず下を走る。久徳から分岐して東に入り、山間の道を走るが出合う車もない。これでもかこれでもかと先へ行くが、集合場所らしき広場へはいっこうに着かない。本当にこの道でよかったのかと思い始めた頃、やっと寺院広場へ到着した。まだ8時だったがけっして早過ぎることはなく、すでに7～8台の車が停まっていた。

参加人員は合計28名。駐車スペースの関係で、寺院広場から歩くことになる。「河内の風穴」を過ぎ、あけん原集落分岐を右にとり権現谷林道へ入る。大きく右に曲がってすぐ、道下に杉の大木が5～6本あり、その間に真新しい鳥居が立っていた。ここが口ノ権現と呼ばれている場所だった。何年か前までは朽ち果てた鳥居だったと聞いているが、最近に立て直されたのだろう。

さらに、水が流れていない白い石灰岩のゴロゴロした河原を右に見ながら進んで行くと、両側からそそり立つような岸壁が迫ってくる。道は左岸に変わり、ヘアピンカーブを回り込むと、左下の河原の奥に古ぼけた鳥居が立っていた。奥ノ権現である。このあたりはその谷の名から想像できるように古くからの行場で、役小角も大峰山に入る前にこの谷で修業したとの言い伝えがある。昔は修験者で村当賑わったと聞くが、今ではその面影などどこにも残っていない。役小角は山岳修験の祖と言われ、奈良・京都では至るところで開く名だが、まさか鈴鹿のこの地まで行動範囲を広げていようとは思わなかった。



奥ノ権現から道は南に向きを変え、しばらく歩いてミラーの立っている所から斜面へ取りついた。ここはどのあたりかと地図と磁石を取り出そうとするが、「ない！」。どこを捜してもなかった。どうやらウエストバッグの中に入れたまま車に置いて来たらしい。今回の山行では忘れ物をしなくてよかったと喜んでいたのに、やっぱりやってしまった。それもよりによって磁石だとは。またまた、名古屋の彼の助けを借りなくてはならない。

すでに20人程の人が急斜面をジグザグに登りだしている。皆の後に続いて斜面を2～3㍍登った時、突然「落石！」の声。上を見る余裕もなく斜面へ伏せた途端に頭の上を「ヒュー」という唸りとともに石が……。ふり返って見ると子どもの頭程もある岩が転げていくではないか！　そのまま立っていたら、おそらく頭直撃、この世にいなかったかも知れない。見ていた人が「よく岩を避けられましたね」と言ってくれたが、岩を見て避けるなんて余裕は全くなく、「落石！」の声を聞いた途端、何か落ちてくる気配を感じて斜面にへばりついたと言ったほうがよい。その時には「あんな岩が……」と思っただけだったが、しばらくすると震えがくる程の怖さが込み上げてならなかった。

気を取り直して急斜面を登りだす。リョウシ坂へ至るこのルートは古くからある道で、今でもだれかが歩いているらしく踏み跡も残っていて、テープも付られていた。ジグザグに急斜面を登りきると鞍部へと出る。ここがリョウシ坂と呼ばれ

霊仙山最高峰を望む

ている所らしい。鞍部を左折して岩のゴロゴロしている岩尾根をひたすら登る。ふと岩の窪みを見ると小さなピンクの花が可憐に咲いていた。ヒメフウロという花だとか。教えてくれた岐阜の彼は藤原自然探査会に入っていて、実によく草花や木の名を知っている。登る途中も出合う草や木の名前を数多く教えてもらったが、年はとりたくないもの、次々に忘れていく。やっと記憶したにメフウロ、赤く色づいているコマユミ、スハマソウの葉、ヤマアイだけが目に焼きついている。本当に情けないことだ。

16時50分、リョウシ（722㍍）へ到着。この山名は岩野さんによれば「霊嶺」からきたもので、昔の行場の名残ではないかとのこと。そう言えば、これから登るコザトの点名が霊仙山の古名「霊山」となっているのも、行場に関係のある山だったからかも知れない。

リョウシ山頂から少し北西へくだると谷へ突き出た岩峰の小さな広場に着く。目の前には霊仙山が立ちはだかっていて、笹峠からのなだらかな西南尾根がクッキリと空に映えていた。霊仙山最高峰は残念ながら雲のなか。左後方には、尾根を登るにつれて大きく見えてきた鎧尻山が威風を正している。空を見上げるも、あまりの人の多さに驚いたのか、このあたりに棲息しているという期待の鳥は姿を現わさなかった。

しばし風景を楽しんだ後、リョウシへ引き返す。北東の尾根をくだり、ナラ林の先にある日本庭園を思わせる若むしした岩綾地での昼食となる。実に趣のある林だ。昨日の雨はどこかへ行ってしまい、暑いほどの日射しであった。

出発は12時、尾根へと戻りコザトへ向かう。尾根は細く、植林された檜もあり快適な尾根とは言えない。28人のパーティともなると、ただでさえ列が長くなるのに、足に縦走を起こした人が出たので先頭と最後尾とでかなり間が開く。後ろのグループを歩く大府市からの彼女の「オーイ！　オーイ！」の声がひっきりなしに聞こえてくる。

12時50分、コザト（830㍍）到着。山頂に着くと、先着の人たちは三角点には全く関心なく、広場に集まりワイワイガヤガヤ。立ち並ぶ人々の足下に、一顧だにされず三角点標石は寂しげに立っていた。とても写真など撮れる状況ではない。皆が出発し、だれもいなくなってから、広場にひっそりと立っている三角点標石を撮影した。

標石は北東向きで、北から50度東に振っている。訪れる人が少ないのか傷もなく、実にきれいなものだった。

山頂から北へ尾根をくだる。アップダウンを繰り返しながら、道のない長い尾根をひたすら1時間も歩くと林道へ出た。

リョウシから近江展望台を見る

林道は霊仙山の山腹に沿って付けられている。比較的平坦だったが、長い歩きを強いられた。それでも行者谷を挟んで目の前に、今歩いて来たリョウシからコザトと、それに林道へ至る山々を見ていると飽きることない。アッという間に35分間は過ぎてしまった。

林道終点広場で休憩。小話の得意な桑名の彼の独演会で腹を抱えて笑い、疲れを癒したのち、霊仙山西南尾根までやぶをこぎ、笹峠へと向かう。笹峠は南霊仙岳から今畑へ向かう途中にある峠だが、昔の峠とは位置が違っていると聞く。新しくなった峠ではあるが、何か歴史ある峠の様相を残しているように思えてならない。

長い峠道の今畑寄りの所から左手へササやぶをかき分け712㍍ピークへ向かう。ピークからのくだりは、最初はやせ尾根だったものの、くだるにつれ情緒ある自然林へと変わった。時おりカエデの紅が鮮やかに目に飛び込んでくる。

オオジャレノ頭をくだった所にある平坦な林で最後の休憩をとった後、自然林の急斜面尾根をくだりきると、あけん原集落へと飛び出した。ちょうど、16時10分だった。

（平成11年12月6日・岩野氏例会で歩く）

☆コースタイム☆

河内寺院広場（30分）奥ノ桁現（15分）斜面取付（45分）リョウシ坂（40分）リョウシ（25分）リョウシ北東峰（50分）コザト（55分）林道（35分）林道終点（1時間30分）あけん原（20分）寺院広場

☆地形図▽2万5千＝高宮・筏立・霊仙

山・彦根東部

KOBEの登山専門店 ～手作りザックの店です～

クラッシック25

昔懐かしい帆布製のフレンチタイプ。メインの皮ベルトは一本締め。
サイドはファスナー付で小物の出し入れが自由。またストック、ステッキホルダー付。内部のファスナー付小物入れ内張クッション（厚さ5ミリ）は取り外し自由、ショルダーベルトは10ミリのクッション入りで体に沿う弓形。

カラー　サンド×ネイビー
　　サンド×グリーン
容量　25リットル
重量　800グラム
素材　10号帆布
価格　¥10,000→新ハイ価格

イモック山旅行くらぶ

春夏秋冬・シーズンを気にせず里山・低山・名山を訪ねます。詳細はお問い合わせ下さい。

IMOCK. KOBE

神戸市長田区日吉町3丁目1番30号
〒653-0039　カナゾノビル2F
TEL.(078) 621-5851
FAX.(078) 621-3528
住所が移転しました

連載

比良を歩く ⑲

神爾谷道から堂満岳

秦　康夫

比良登山リフトから乗り継いでシャカ岳駅を出たロープウェイは、左はるか下に神爾谷を見下ろしながら西行する。北比良峠の山上駅までわずか7分ほどだが、昨年秋たけなわの頃、ここから眺めた神爾谷一帯の紅葉はまことに見事だった。

今回はその紅葉の真っただ中に入り、深まりゆく比良の秋をじっくり味わおうという山行である。

JR京都駅から乗車した湖西線の列車が比良駅に着くや、ホームにどっと吐き出されたあふれんばかりの登山者の姿、バスは何台も臨時便が出た。終点のリフト前で下車し身仕度を整えている間にも次々と後続のバスが到着し、登山リフトにはあっという間に長蛇の列ができてしまった。

われわれは総勢12名だが、リフトには乗らないので気楽なものである。「これは40分待ちだなぁ」などと言いながら列の間をすり抜けてリフト山麓駅の横を通り、神爾谷沿いの登山道を歩き始めた。

右から入ってくるシャカ谷を木橋で渡り、右に折れる。しばらくは神爾谷を離れ、シャカ谷の左岸に石のゴロゴロした悪路が続く。「シンジ谷・シャカ岳」の標識が出た所で細い流れを渡って西に向かうと地道になり、間もなく登山リフトのガラガラという音が聞こえてきた。ゆっくり動くリフトの下を横断する。道は徐々に左寄りとなってリフトの音も遠ざかり、分岐点の案内板が現れた。右がシャカ岳への登り道、左の水平道が北比良峠への神爾谷道である。

紅葉の神爾谷

はるか左下に見える神爾谷の水音を聞きながら、尾根を巻き込むように道はなだらかに続く。ひんやりした空気に包まれた静かな歩きやすい道だ。谷を隔てた尾根の中腹には、色とりどりの紅葉・黄

神爾ノ滝

神爾谷から堂満岳付近略図

蒸が陽に照らされてキラキラと輝いている。やや登りになる頃、瀬音が高くなり、谷をのぞき込むと流が見える。「神爾ノ滝」の雄滝である。「シンジの滝・降り口」の案内板があり、せっかくだからザックを置いて滝見物をすることにした。

急坂を注意してくだれば、2、3分で滝壺のすぐ近くに立つことができる。雨の後の せいか水量は多い。滝口から垂直に落ちた水流が途中の大きな岩に当たって大きくジャンプし、消防のホースから放水された水のように豪快に踊っている。霧のようなしぶきを浴びながら記念写真をとり、元の道に戻った。

登山道は徐々に谷筋に近づく。V字型に切れ込んだ神爾谷の源頭付近を見上げると建物が見える。ロープウェイの山上駅だ。青い空をバックに意外に近く感じるが、実はこれからがなかなかである。間もなく神爾谷に出合って一枚板の橋を渡り、しばらくは右岸沿いの道が続く。この谷は堰堤が多い。橋を通る度に五つめ、六つめ、七つめと数えていたが、切りがないので止めた。それだけ上流地帯の崩壊が激しいということだろう。とにかく砂防ダムの連続である。

視野の狭い単調な谷道だが、両側から迫る山腹を彩る紅葉、黄葉は見事である。山麓うとはこのことか。陽の射し具合によって、色彩の濃淡が微妙に変化する。堰堤の上でゆっくり休憩。頭上はるか、岩もなくしずしずと進むロープウェイのゴンドラを見上げながら、晩秋の雰囲気を満喫した。

九つめくらいの堰堤のすぐ下を左岸に渡り、目印のテープに従って谷沿いをぐんぐん登る。いったん河原におり、登り返したあたりから道は悪くなってきた。時おり現れるロープや木の根っ子を頼りにしての急登が続く。登山道をさえぎって倒れている大きな木の下をくぐると、

神爾谷源頭部

鳥居が現れた。

粗末な朱塗りの小さな鳥居が、二つ並んで建っている。「次郎坊宮」と書いてある。近くに祠は見当たらないが、往古このあたりを支配した、比良一族の祖先の霊をまつるお宮さんということなので、略式ながらお詣りをしておいた。そういえばこの上の、比良明神のある山は次郎坊山（1020㍍）と名付けられている。

また谷にくだり、立派な遺難碑の横を通って石のゴロゴロした河原の中を歩く。高さ10数㍍の堰堤が現れた。左に高捲き道があるがかなりの急傾斜である。垂れ下がったロープと木の根をつかんで、腕力を頼りにやっとよじ登った。このあたりが神爾谷道の核心部、何度も谷を渡り返しまだまだ険しい登りが続く。

岩角や木の根をつかんでの急登になると、もはや秋の景観を楽しむ余裕はない。目の前の手がかり足がかりを見定め、ひたすらよじ登るばかりである。しかし、だらだら登りの長一場と違って、こういう登りはけっこう楽しい。

錆びたドラム缶が半分土に埋まっている所を通過すると、左から小さな谷が入ってくる。ここで休憩してから右の谷沿いに登り始めたが、なかなかの難路である。谷道に入ってからロープウェイはずっと右上に見えていたが、いつの間にか真上近くにロープが走っている。だんだん水量も少なくなってきた。谷が大きく二つに分かれる。右の谷のほうが大きいが、標識のテープによると左の小さい谷が登山ルートのようだ。

ロープを頼りに右岸の岩場をへつり、左岸に渡った所に北比良峠への案内板がある。「岩石の矢印に沿って登降して下さい」と書いてあるが、肝心の矢印は消えてしまったのか、岩が転がってしまったのか、どこにも見当たらない。石のゴロゴロする細い荒れ沢を登りきると視界が開け、やっと源頭部が近づいてきた。カール状になった砂地の急斜面、「蟻地獄」と呼ばれる最後の難所である。

3月に一人で来たときは、登山ルートになっている溝状の道も、もちろんクサリもすっぽり深い雪に隠れていた。急傾斜で直登はできないので、右のほうから大廻りして、砂地に雪が乗る滑りやすい急傾斜をこわごわトラバースした苦い思い出がある。

それが頭にあるので登路を決めて登りだしたが、意外や意外、固く締まった踏み跡と随所に置かれた土嚢のおかげで、クサリを頼りにせずとも階段を上がるような手軽さですいすいと登ってしまった。

登り着いた所にあるのが北比良峠の旧い道標。お地蔵さんが二体並んでいる。ここでひと息入れ、ダケ道との合流点を過ぎて、いま登ってきた源頭部の縁をぐるっと廻り、山上駅前の広場でゆっくり休憩した。

ここから左廻りの道をとって八雲ヶ原に出たが時計は11時20分、昼食にはまだ早い。奥の深谷の源流、コッパ谷をくだり、大橋方面と金糞峠への分岐の少し手前、テント場の広場で昼食にした。頭上にはひときわ鮮やかな紅葉、目の前には台杉のように株立ちしたブナの巨木、手

元には、それぞれのザックからどっと出てきた自家菜培の野菜サラダやモロキュー、冷や奴やゴボテンなどごちそうの数々、それに冷たい缶ビール、すっかり秋の行楽気分になって1時間ほどを過ごしてしまった。

金糞峠付近テント場にて

午後、まだ堂満岳への登りが控えていた。金糞峠を通過すると、荒々しく切り立つ岩稜の堂満岳北面を眺めながらの急登が始まる。この登りはけっこうしんどい。展望を口実にし、何度か立ち止まって休憩した。琵琶湖・鈴鹿方面の眺めがよい。北小松の牛山の稜線から琵琶湖に向かって飛び出すかのようなトビ岩が、ここからよく見えるのに初めて気がついた。

南比良方面への縦走路と分かれ、尾根が東に向きを変えるとやっと勾配がゆるやかになり、ぽつぽつと花芽をつけたシャクナゲの林を抜けて堂満岳に到着した。北方稜線のツルベ岳・蛇谷ヶ峰と東の琵琶湖方面の展望はよいが、南の蓬莱山あたりはガスのなかである。早々に堂満岳東南稜ルートで下山することにした。

くだり始めのしばらくはかなりの急坂だが、これを過ぎるとずっとなだらかなくだりが続く。

山頂付近は紅葉も終わり、すっかり葉を落とした冬木立だったが、くだるにつれ葉が多くなり秋が戻ってくる。カエデの黄葉に混じるミズナラ類の薄緑が、なんともいえないやわらかな雰囲気を醸しだす。ルンルン気分の尾根くだりを満喫して堂満岳登山口の別荘地帯におりてきた。

ここからはイン谷口のバス停が近いが、山行の余韻を楽しみながらJR比良駅まで歩くことにした。30分ほどの距離である。

途中ふり返って眺めた堂満岳の、薄暮の迫る山脈の中央に、すっきりと浮かぶ端麗なシルエットが印象的だった。

（京都北山グループ例会・
平成11年11月14日歩く）

◆コースタイム◆

リフト前（25分）神爾の滝降り口（35分）次郎坊宮の鳥居（40分）ダケ道出合（10分）コープウェイ山上駅（15分）八雲ヶ原（35分）金糞峠（40分）堂満岳（3時間）別荘地帯・堂満岳登山口（30分）JR比良駅

◆地形図◆2万5千＝北小松・比良山
昭文社＝「比良山系」

連載

1等三角点峰（500㍍以上）548座完登の記録（第22回）

平成二年夏の北海道への山旅

坂井久光

平成二年7月19日からまた北海道へ行った。羽鶴よりフェリーで小樽には21日に着いた。バスで余市へ行き、乗り継いで美国へ。食料を買ってバスで積丹岳登山口まで行き、そこから約3㌔歩いて山小屋へ着いた。よい小屋だったが、湧き水から引いた水道が止まっており、やむなくポリタンを持って2㌔も下流の貯水池近くの谷川まで水汲みに行った。

夕方岐阜大卒の青年がバイクで到着した。彼はニュージーランドで1年間暮らして山にも登ったとか。やぶがなく、牧草地からすぐ岩礫帯となるので気持ちのよい山が多いとか。一番驚いたのは、火口湖に張りつめた氷が見る見るうちに融け、蒸気が上がり噴火が起こり、すぐに爆発したのを湖畔で見た時だと言う。休火山が爆発する現場にいられたのは全く幸運だったが、怖くて駆けくだったこと、など話してくれた。

翌22日は、4時頃に目が覚めた。涼しいと思ったら、外は雨が降っていた。4時20分頃には小雨になったので、晴れると思って余別岳めざして出発した。夏道は茂っていたが、八合目までは刈られていて歩きやすく、白樺林を過ぎると稜線で山頂が見えてきた。そこから先はやぶをかき分けて稲穂岳（3等三角点）へ登った。

山頂で朝飯のおにぎりを食べた。しかし、一面のガスで10㍍先も見えない。吹き上げてくる風がものすごく、そのうち雨がひどくなってきた。きょうもまた、この先の余別岳へ行くのは無理だと断念して山小屋へおりた。

余市岳

コーヒーを沸かして飲んでいると、札幌から娘2人を連れた登山者がジープでやって来て賑やかになった。昼頃に雨もやみ、陽が差してきたので登山口へ下山して、仁木の猟師塩津さんの家へ向かった。

塩津さん宅から電話し、今春知り合った丸谷さんを訪れた。彼は郵便局を退職して、しばらく余市岳麓のヤマハスキー場の工事現場に勤めていたが、今は辞めて鮎釣りに夢中とのこと。「雨で余別岳は登れなかった。明日は余市岳へ登りたい」と言うと、登口まで送ると言ってくれた。夕食に叔の釣った鮎三匹をおいしくいただいた。

ピヤシリ山頂

23日、赤井川側のヤマハスキー場の工事現場まで送ってもらい、そこから林道を歩いて登山口へ。余市川沿いを歩いて渡渉後、対岸の支尾根を登って朝里岳との鞍部に出た。急峻な尾根道を直登して西峰へ登り、ハイマツの切り開きを通って余市岳東峰（1488㍍）に登頂した。この山でちょうど480番目である。

ガスのため天狗山・手稲山が見えたぐらいで、展望は良くない。オトギリソウやキリンソウが咲いていた。眼下にはヤマハスキー場の工事現場が赤茶色の地肌を見せていた。下山は、工事現場のはずれまで行くと近良くヒッチでき赤井川バス停へ。余市駅からJRで然別の丸谷さん宅に戻り、厚く礼を述べて辞し、近くの酒屋からビール一ダースをお礼に贈るよう頼んだ。

JRで小樽から札幌に行き、夜行急行「利尻」で翌24日早朝天塩中川駅へ着いた。まだ4時頃で、駅員もおらず店も開かず、仕方なくパンケ山をめざし登山口を探して山麓へ歩いた。

途中、散歩中の人に採石場から右手の林道を登ればよいと聞いた。牧場の入口で朝食をとってから尾根筋に向かう道を探したがない。やっとそれらしきを見つけて登った。熊の糞がたくさん散らばっていて気持ちが悪く、笛を吹いたり爆竹を鳴らして先に進んだ。尾根筋に出たが、また下りとなり、ぐるりと一周りしただけで途中の谷間に戻った。疲れたので谷沿いをくだって中川町へ戻った。近くの「ぽんびら温泉」へ行って夜行の疲れをいやした。再行を計るべく、入浴後、売店の人に話してみると、「パンケ山には道があり、小学生でも登っている」と言い、さらに「車なら30分程で山頂直下まで行ける」と言う。

午後、副長が案内してくれることになり、洗濯物を干して昼食後再出発した。この山は北海道大学の演習林内にあり、パンケはアイヌ語で下、ペンケは上の意である。林道の鍵を借りようと演習林管理人の家に行った。ちょうど演習林の車の燃料が少なくなり、燃料補給に行くのでついでに案内しようと、一緒に行く。下中川から入林して、その車を途中に置き山上へ走った。一部悪い箇所もあるが、おおむね乗用車でも通れる林道で、山頂

ウエンシリ岳1等三角点

直下に駐車できた。ハイマツを切り開いた山道を約5分でパンケ山（632㍍）山頂へ着いた。

晴れるとオホーツク海も見えるというが、薄曇りで遠望がきかない。3人で三角点を眺めながら、私が三角点めぐりの話をすると2人は感心していた。しばらく休んで下山した。車でぐるっと林道を走り、採石場の中川町登山口へ出た。けさ通った反対側のチエーンのかかった林道が登山口だった。温泉に戻り厚くお礼を述べて一泊した。

25日は雨だったので名寄の駅近くの旅館で一泊。

26日、タクシーでピヤシリ山登山口のスキー場ロッジまで行き、長い林道を歩いていると、現場へ行く車に拾われ、峠越林道との分岐（2㌔）まで乗せてもらった。林道終点からハイマツの切り開き約200㍍でピヤシリ山頂（987㍍）へ。晴天なら360度の展望は曇りで見えない。アイヌ語でピは岩、ヤは有る、シリは山とか場所の意で、岩山のことである。山腹には立派な山小屋も建っていた。そのあたりでヒッチして名寄駅へ。バスで西興部へ行き旅館で一泊。

27日、町営バスで上藻まで行き、ウエンシリ岳へ登った。ウエンは黒い・嶮悪の意で、急峻嶮悪な山である。氷のトンネルでも有名な名山である。山麓まで7㌔あり、歩いていると町の人の車が来て氷のトンネルまで乗せてくれた。今年は暖冬で氷も少なくなっていた。崖状のため斜面を500㍍程登り、尾根の東端に出ると3㌔の標示柱があった。岩のやせ尾根が数ヶ所あり、用心して登った。コブも二、三あり、なかなか楽ではない山だ。一汗も二汗もかいてやっとウエンシリ岳山頂（1142㍍）へ着いた。

展望は広大で、眼下に興部や滝上町の集落がよく眺められ、オホーツク海や紋別・網走方面まで見えた。天塩岳や大雪山群も遠望できた。休憩後、新設の中央登山道をとって下山。6㌔くだってやっと林道へ出た。登山口まで4㌔歩き、道路でヒッチして滝上町の「温泉ホテル」に行った。

主人は私と同年輩で町の有力者とか、あす登る観山のことを訊ねたら、昔は熊がいたが今はいないとのこと、また、途中まで車で送ろうと言ってくれたので厚意に感謝した。

28日、シュルトルマップ川の二股まで車で送ってもらい、登山口まで5㌔余り歩いた。途中、狐の子が二、三匹出て来てすぐ隠れた。林道終点からササの茂る踏み跡をたどり鞍線へ。標識が次々にあり、小ピークを四つ越えてやっと狐山（628㍍）の山頂へ着いた。

1等点を探して、やっと見つけた時はうれしかった。白樺とトドマツの林で展望は全くない。小憩後往路を下山した。

滝上町に戻り、バスで紋別へ行き、乗り換えて遠軽町へ。エンガルはアイヌ語のインガル・シ（いつも眺める処）がなまったもので、町のシンボルともなっている75㍍の巨岩が屹立している。東北・越後・関東に多い姓の「五十嵐」もこれに由来しているとのこと。バスセンター前の旅館で一泊した。

仁頃山1等三角点

29日、バスで瀬戸瀬駅に行き、タクシーで瀬戸瀬温泉へ入った。瀬戸瀬山を登るため温泉に荷物を預け、軽装で林道を歩いた。終点から尾根筋の踏み跡をたどった。1・7㌔、2・6㌔の標示を見て遠軽営林署の小屋に着いた。小雨のなか雨具を着け、なおも奥の山頂へ踏み跡をたどって登ったが、瀬戸瀬山（901㍍）の山頂一帯は広大な平原で、どこが山頂か全く判らない。塚状の所を何ヶ所か探し約30分後に樹の廃材を見つけ、付近の塚状地でササのなかに1等三角点をやっと見つけた時は天にも昇る心地だった。

雨でゆっくりもできず、標識を頼りに下山した。下に林道が上がってきているのを見つけそれをくだった。途中6㌔の標示があり1時間余で舗装道へ。宮地団地・丸瀬布南側でヒッチに成功して瀬戸瀬温泉へ戻った。旅館の支配人は親切だった。早速入浴し、浴衣に着替え肌着も替えた。泉質はなめらかで美人湯の名が高いという。

30日、バスで遠軽に出て、乗りかえ北見の西相内で下車した。昼食後タクシーで山麓へ行き、約3㌔の車道を登って無線塔の立つ仁頃山（829㍍）へ。ちょうど警察の無線塔を建設中だった。ガスのため展望はよくなく、休憩後往路下山。途中ダンプをヒッチして西相内へ出て、バスで北見温泉の温根湯へ行く。旅館を探したが皆満員で、仕方なくバスで留辺蘂で下車しユースホステルで一泊した。

31日、ヒッチして瓶村ドライブインへ行き、ブル道や廃道に近い山道をたどり北見常土（2等三角点・1281㍍）を登り、小憩後沢沿林道経由狐村に下山した。小憩後またヒッチして石北峠を越えた。旭川から深川に行き、友人の田中氏を訪ねた。

田口氏から「小樽の上口が心配していたから電話せよ」と言われ、すぐ電話すると「小樽に行って無事下山したのを知ったが、その後気になっていた」ということであった。

深川の旅館で一泊して、8月1日、芦別岳（2等三角点・1727㍍）を登り、2日、日本山岳協会の赤岩指導員の集会に参加して翌日小樽からフェリーで帰京した。

（次号へつづく）

（文中の太字は今回登った1等三角点の山を示す。）

鈴鹿の伝説・伝承

蜂巣山併せ鬼坂・野首・人衆坂之事

岩野　明

はじめに

永源寺ダムに直接注ぐ佐目小谷の谷筋の古道はほとんど消えているが、鬼坂越への道は残っている。現在、佐目小谷に入るにはこの道を登っている。この道の近くに昔は蛇を越冬させたという蛇穴（鬼の洞）がある。

峠をくだると中河原で、昔は僧の庵や郷があり、田圃十反ばかりと茶畑が広がっていたと伝えられている。

ここから約1・5㎞登ると蛇穴渓の出合で、姫ヶ滝が轟音を響かせている。この谷から東の天狗岩や水舟の池に向かう枝谷が蜂ノ巣谷で、蜂ノ巣山と言われている。

滋賀県神崎郡永源寺町佐目村の若宮八幡社に残る古文書「金峯峯詣道名所跡付　上之巻・下向道之巻」から、水舟の池と姫ヶ滝布については本誌第33号の「伝説・伝承の紹介」ですでに紹介した。

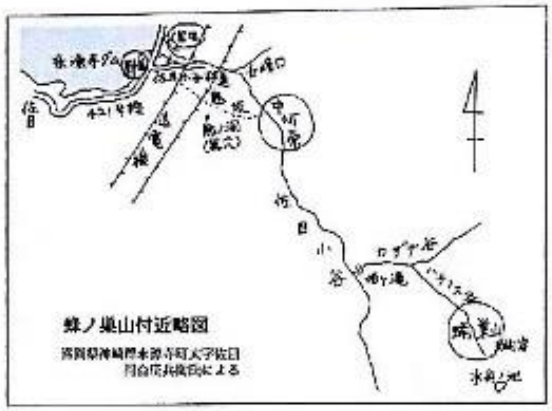
この広大な山域を舞台に蜂ノ巣山の鬼蜂を退治するという、壮大でおもしろい伝説があるので紹介する（原文のママ）。

金峯塔尾参詣道名所跡付下向道中之巻蜂巣山併せ鬼坂野首人衆坂之事

この蜂の巣山昔それ二十丁程の間、深々としてことごとく三尋より七八抱余りの大木生ひ茂げりありしとなり。ここ寛平年中の頃何方からとも知れず、長さ三尺あまりの蜂夜な夜な金子村に飛び来り、人を刺殺しくらうなり。村人嘆き悲しみ老若ども宮人匡崎信濃守吉忠が宅へ集り、評議の上吉忠のいわく四月の頃七日八日或は十夜の間一度に飛来りしに、この間は毎夜毎夜飛来りて人を刺殺し苦労なり、この侵捨てかねるは村に人種の絶ることなり。急ぎ氏神へ祈願いたし、退治せん

蜂ノ巣山（中央）、会塔の右が鬼坂

ことを祈るべしと申されければ、人々悦び水の垢離を掻氏神へ参詣するなり。宮人祈願して云、このたび何方からとも知れず長さ三尺斗りの蜂夜な夜な村中へ飛来り、出逢う者を刺殺すなり。これによって夜は勿論昼とても憶病な者は家をいで申さず、この通りにては家業の炭焼も致し難く村中騒動仕り難し、ここに干満何



卒若宮大明神大慈大悲の御神力をもって退治を祈り奉るべし、おわんぬこれとき寛平五年六月十八日なり。其夜明神白羽矢一枝御手に持ち宮人吉忠へ夢中にかこつけしていわく。村の東一里余り奥の深山に廿尋余りの柏木あり、其の内に大なる蜂の巣を作り住居となして、村人を悩ますものこれ鬼人の妖けたるなり。明日汝大将として廿余りの若者ども数十人取連れ退治すべし。これは即ちこの神通飛行の矢なり汝にこれを与ふとの御声おわれば、夢覚ぬ枕元を見れば白羽の矢二本あり、宮人喜悦の余り直に水垢離を掻明神の宝前へ詣り祈念して云、昨夜御夢想の如く今日深山へ鬼蜂退治にまいります、明神の御守り祈り奉るべしなり。然して吉忠が宅へ廿余りの若者五十人斗り召寄るなり。御夢想の様子語りければ人々悦び喜々我宅へ帰り急ぎ容易仕るなり。吉忠それ白の装束には、胸には白金の面垂を身に著し卯の花縅の鎧にて四方白甲、腰には荒物作りの太刀はいて、左の手に本弓藤の弓を持ち、右の手には明神より賜ったる神通飛行の矢を握り、栗毛の駒に打乗りて出立ったり。跡につき添う若者ども思い思いの装束にて一様に削りたる六尺の棒てん手に突き立ち、北の坂にぞ勢揃いける。大将岩に腰打かけて云、五年が十年でも鬼蜂退治するまでは、吉忠がかばねをばこの山にさらざらんこと各々いかにと給えば、若者ども山中に生れし我々なればいづくで死するも同じ山、大将御帰りあるまでは御伴中と言葉を揃えて答えける。吉忠聞てたのもしき者どもかなおおいに悦びいきみける。吉忠行年三十二歳なり、中に四人は屈強のものどもなり。第一本田九良左ェ門が一子・又六良行年二十三歳二十人力。二番に中尾十左ェ門が二男・定十良行年二十一歳十五人力。三番に中江治良右ェ門が舎弟・孫九良行年二十二歳十人力。四番に大盛浅右ェ門が末子・藤七良行年二十歳九人力。この四人は吉忠が四天王にしてその勢部合四十九人なり。大将の云、今日深山へ鬼蜂退治に行く事一大事のきわみなり。人々猶分村ちもらさぬように明神を祈り奉るべし。空中飛行の鬼蜂なれば人力に及ばず、ひとえに神力にあらずんばなんぞ退治することを得んと下知して、大将ものども引具し彼深山のふもとまで押寄せたり。人々山の様子をうかがひけるに、深々と大木生ひ茂り入るべき屋あ

らざられば如何せんと評議取々成る所に、雲中に声あって汝等騒動することなかれ、急ぎ東の峯に登るべしとの御声に応じ屋なき嶮岨けわしき山を、ようようとして東の峯に登り着き、深々と生い茂げる山を見れば中程に、六七間はかりも上へすすみ出でたる枯木見えける。大将の云彼木ならん、空中飛行の鬼蜂相手なれば人力におよばず、隠分明神を祈り奉るべし。一疋にても討ちもらさぬようにと下知すれば、人々心得たりと眼をかため棒の手そろえて待ちかけたり。大将明神より賜たる神通飛行の白羽の矢を引きしめ引きしめ羽ぶしをかけてぞ射当てければ、蜂ども大いに驚き空中へむらがり上がってほえける音は大嵐の鳴ごとしなり。すきまあらず又射かけたり。もとより神通飛行の矢なれば数千万の矢さきが、あらわれむらがる蜂の中へみだれ落ちれば、蜂残らず射られにけり。人々息つき休まんとせし処へ、何方にうせけん蜂一疋飛び帰って人々見かけ飛び来るを大将太刀ぬき待かけ、若者どもは相手鬼蜂飛びかかるを左の手になぐり、右手にうけうけしろえ飛び回りければ身をかわし、上に飛べば若の上へかけあがり、又飛び下りれば谷の方においかけり、四方八方おいまわす。空中飛行の鬼蜂なれどもついには羽よわりしか、若根に飛寄り逃まんとせしところを、大将東の峯より大音声によばわって、あれなる岩根に飛び行ったり、手ぬかり致すな射ちとれと下知すれば、四天王の者共かけよりかけよせ、たたみかけりゅうりゅうはっしと打つとも、元より鬼の妖けたる蜂なれば又飛び上がらんとせしところへ、大将かけつけのりかかって首を刎たまう。こわありがたき次第なり他の蜂も討取りしはこれ明神の神力なりと歓喜して人々、皆急で山を下り中河原まで帰り着き、駒の足をも休めんと人々暫く息つくところに、又討もらしたる鬼蜂一疋北の山の頂上よりほらがいのごとく鳴り来る。人々これはと驚き大将駒をすすめて打乗って馬上にかまえて待ちかけたまうなり。四天王の者どもは互に棒の手揃えこぶしをかため待うけたり。跡に並びいる者どももてんでに棒をふりかざし、蜂飛かからば討たんとこぶしを固めて立揃いける。かかる所へ鬼蜂は人々を見かけ無二無三に飛かかるを、人々心中に神を念ずれば神力くわわっていよいよ強勢にぞなりにける。空中飛行の鬼蜂相手に河原の中を、西から東北から南と火花を散らして戦いけるが、空中飛行の鬼蜂なれども疲早こはかなわじと思いしか、南の峯指してぞ飛び行きたり。遠きじやと総じて追いかくれども、蜂は空を飛ぶ・人々は岩を乗り越え乗り越え、気かかる内についに鬼蜂見失い人々これは仕損じたりと申しければ、大将の云、最早夜に入り仕損じても、たとえばこの山狩りほずとてなにほどのことあらん、次は村佐目野の大平に場所を堅め村人総じてほら貝を取寄すべし。夜中のことなれば目を吹いて軍勢を集むべし。急げ急げとのたもうてこれから続づけや続づけ者どもと下知すれば、人々急ぎ隅の峯指してぞ登りける。頂上に登り着き押しつづいて狩りまくれども夜中のことなれば方向得と知れざるゆえ、暫く息つき休んで様子うかがいければ峠よりはるか北西の間に神き声聞えける。大将定十郎に下知していわく汝彼の响く所へ飛び行、様子を伺い見るべしとのたまうなり。定十郎急ぎ行き様子を伺いければ、坂の頭に大なる岩洞あり、その内に彼の鬼蜂昼の蜂とは姿を変え、丈一丈斗りの鬼人となり頭には両角鋭くして、両眼は鏡の光るがごとく、口は朱盃に似たり。剣のごとくなる牙を生じさも恐ろしき姿にてありけるに、数か所の矢傷を負い苦痛の声云う斗りと申し上げれば、大将聞て大いに悦び左程に騒りたる上は、最早討取に手間もいるまじ、されども討もらさぬように隠分明神を祈り奉るべし。この上は最早棒にては叶まじ、人々打物にて向うべしと下知すれば、其の内に村よりほら貝持ち来りける。大将始め四天王の者どもは刀を抜きつれ、後に並び居る者どもてんでに鎗をふり上げ、彼の坂近き所へ押し寄せほら貝吹き立て鬨の声を上げければ、彼鬼岩洞の内よりかけ山で人々に立むかいしばし戦いける内に、神力人々にくわわっていかなる鬼もこわかなわじと思いけん。坂を指してぞいっさんにかけ下るお、大将それ逃がすなと下知すれば、又ほら貝吹き立て鬨の声上げてぞ追かけ下るなり。左目野に控えし又大良、ともども刀おっ取って身づくろい、坂を踏んで立ちたるは如何なる天魔授神も恐れんものこそなかりける。程なく山手より大勢追かけ下りける。左目野に又六急が待つづけ前後を固うて攻め寄せたり。鬼は坂を逃げ下りける跡に続く人々が追い下りければ、鬼は左目野へ出んとなりし所に、又六良左目野の手より攻めかかれば、鬼も行方なく千峯口の方へ返さんとせし所へ、大将をつつき左目野の入口にてのっかかり首をちょうど切り落す。四天王の者どもも突き通し刺し通し念願の鬼人を討取る。人々あやうき館をのがれしも偏に明神の御陰なり、ありがたきこの上は村中安穏と悦んで、金子村にぞ帰り着き時刻の様子を伺えば、明け七ツ時なり。翌二十日村中氏神の庭に集り御湯を上げ御高肥て歌い舞して、明神を讃め奉りおわんぬ。この因縁をもって今の世に至ても六月二十日には明神の宝前へ村中出で、詞するなり。しからば数日の後ち村の若者ども数一人彼の渓山へ行き、山をきりあげし枯木の元へ近づき見れば、数萬の蜂ことごとく矢先にかかって死しけり。枯木を伐りたおし内の様子を見れば大きなる洞となって総体蜂の巣となり。見届け終って山口にいで直に山へ火をかけ焼きはらうとなり。彼坂の頭の岩洞に鬼住みたるゆえ彼坂を鬼坂と云う。又其河を鬼が河とぞ申なり。又左目野の入口にて大将鬼の首取たるゆえ野首と云う。同じく北の坂にて人衆勢揃いしたるゆえ人衆坂と云うなり。其時節は牛がひたい山に住居をなし金子村とぞ申ける。彼大なる蜂の巣ありけるゆえ蜂の巣山とぞ名付けたり。

鬼どもが蜂の姿に身をばけて
　多くの人をなやましにけり。
鬼蜂が人を食らいしむくいにて
　ついには神の矢にてぞ滅れる。
蜂巣山昔しの噂聞きぬれば
　今に見る目もおそろしきかな。

鬼岩洞（風穴）

＊古文書の解読・訳は柿木克子さんに協力してもらった。

江文峠から金毘羅山・翠黛山

コースとコースタイム　京阪出町柳駅（バス30分）戸寺（25分）→①江文神社（20分）→②江文峠（30分）→③琴平新宮社（25分）→④金毘羅山（40分）→⑤翠黛山（40分）→⑥光院（20分）→⑦大原バスセンター（バス35分）京阪出町柳駅

中村敏文

洛北大原の里と静原の里を分ける金毘羅山・翠黛山は、600㍍足らずの低い山であるが、岩場のゲレンデもある厳しい山である。大原の寂光院から登るのも江文峠からの登りと大差ない。今回は西から金毘羅山から翠黛山を越えることにした。

京阪鞍馬線終点の出町柳駅から京都バスは380円、30分足らずで大原入口の戸寺バス停へ運んでくれる。バス停前のコンビニエンスストアの両側から細い道をくだり、高野川の元井出橋を渡り井出町を北々西へ10分ほど歩き、東海自然歩道の道標を見ると左へ分岐する道に入る。府道大原静原線を横切り少し行くと江文神社の古い鳥居があり、参道が右へ分岐する。

①江文神社（京都左京区大原野村町）

車の入れる谷川沿いの参道を10分も行くと人気のない金毘羅山山麓に、近世は大原八郷の産土神であった旧村社の江文神社が鎮座する。現在は鳥居と簡素な拝殿と社殿の他に末社の源大夫社がある。

江文神社の現祭神は伏見稲荷と同じ宇賀御魂神であるが、元は道化三神（天之御中主神・高皇産霊神・神皇産霊神）をまつる江文山の山麓社である。9月1日の八朔祭りは、男は道中姿、女は大原女の昔ながらの姿で伊勢音頭・名所づくし・大原節・黒木節・小野篁頌の本節りを踊る。

江文神社

平安時代に参議の藤原為隆が鞍馬寺と法輪・信貴・高野・粉河・勧修の各寺に四天王像を安置したと伝えられ、その昔存在した江文寺は金毘羅山（江文山）山腹の不動堂のあたりと伝えられる。江文神社から山中を経て大原へくだるまでトイレがないので注意してほしい。

②江文峠（金毘羅山登山口）

現在は大原から江文峠を経て静原へバスが運行しているが、東海自然歩道は江文神社の参道の途中から旧道の山道に入る。道標に従って参道から図（左）へ江文山の山中へ入ると、細い谷川沿いの石ころの多いゆるい山坂道がしばらく続く。峠近くの山腹は勾配がややきつくなり、分岐から20分ほどで峠に登り着く。

大原と静原を経て薬王坂道で鞍馬へ至る古道で、中世・近世を通じ往来の盛んであった洛北機新道である。すこし荒れてはいるが、平安後期の文治年間に後白河法皇が鞍馬から大原へ行幸したという資料も残る。

金毘羅山付近翠黛山付近略図

③琴平新宮社（金毘羅山南側中腹）

府道へ出て少し西へ上がると江文峠の金毘羅山参道口で、鳥居の手前に三体不動明王・金毘羅大権現と二行に文字を刻んだ石碑がある。鳥居をくぐると段々で土留めをした階段状の参道が杉林の奥へ続いている。

参道が池大形へ移ると岩場混じりで勾配もかなりきつくなる。岩場にまつられた「むつみ地蔵」を過ぎると坂道はややゆるみ、江文峠から30分ほどで簡素な覆屋で保護された琴平新宮社へ到着する。

毎日健康をいただきに参拝している熟年の女性が清掃をしている。静原から薬草を採取しながら新宮社を往復するので風邪ひとつひくこともないという。

④金毘羅山（静原と大原の分水嶺）

新宮社の右側から一対幅の登山道をしばらく登ると徐々に勾配がきつくなり、丸木のなかをジグザグの石段の多い登山道となる。石段道が終わり石場をはうように登ると、多くの岩に囲まれた狭い平坦地へ上がる。金毘羅宮と金毘羅山頂への分岐で、大原と鞍馬駅を示す道標もある。

金毘羅宮へ左の道を少し行くと、朱塗りの覆屋に囲まれた金毘羅宮が岩場に鎮座し、鳥居・灯籠の立つ社前の小広場は格好の展望所となり休憩所もある。

金毘羅宮の右側から十数㍍の岩場をよじ登ると573㍍の金毘羅山の山頂で、8㍍四方くらいの平坦地に石柱で囲った三等社がある。その昔に火雷・風雷・雨雷という自然石の石祠が存在し、静原・大原の人々が降雨祈願をしたので、三雷社の呼称が付いたと言われている。

もともと金毘羅山は記紀神話に登場する道化の三神を祭祀した山で、山全体が御神体で山頂付近の聖域は古代の祭祀道跡である。此叡山に天台宗の寺が開かれると、平安京の東北の鬼門を守護する毘沙門天を本尊とする江文寺が山腹に建立され、仏法修業の山として天台密教の修行僧が多く山入りしたという。

その後、平安末期の保元の乱で敗れ横死した崇徳上皇のため、琴平神宮を勧請し、金毘羅大権現として祭祀したという。正しく言えば現在の祭神は崇徳上皇の金毘羅大権現と讃岐の琴平神宮の金毘羅大明神となる。

⑤ 翠黛山（別称小亀山）

金毘羅山山頂から数百㍍北々東の翠黛山への下りはかなり急勾配で、2000㍍余りはロックガーデンのような岩場をくだることになる。山頂と寂光院間（2㌔余）の下りは60分、登り90分が一般的な登山ペースとされるが、不特定多数の団体は下り90分のペースで歩き、危険予防が必要だ。

ゆっくりと岩場をくだりきり尾根道に入ると道は二分するが、右への巻き道は楽なルート、左への山道は小ピークを経由する。高いほうがよいと左のピーク越えをするが樹木で展望はない。

分岐道が合流してしばらく行くと左へ分岐する翠黛山経由の道へ入る。比較的ゆるい勾配で10数分で翠黛山へ登るが、展望もない平凡な山頂である。

翠黛山の山頂を避けるルートは山頂近くの山腹を捲き、山頂越えより少し距離は長いが10数分早く尾根で合流する。

翠黛山の東尾根を少し南東へ歩くと、ジグザグ道は北東へ向きを変える。小さなコブを通過すると谷沿いの薄暗い樹林帯に入り、少しくだると左側に建礼門院御子に仕えた阿波内侍の墓がある。その近くには同じく大納言佐局・右京大夫局・治部卿局の墓もある。ここから林道へは薄暗い一直線の石段百段である。

⑥ 寂光院（京都市左京区大原草生町）

林道を少しくだると寂光院である。過日の火事で大半を焼失したのは残念なことである。大原川で隔てられた小塩山（翠黛山）東山麓の、三千院の西北西1㌔の幽邃の地にある尼寺で、聖徳太子作の地蔵菩薩像を本尊とし、太子の創建と伝承される。

現在寂光院門前町は観光客が途絶え、ハイカー目当てに一部の店が開いているのみ。金閣寺同様に再建してほしいと願う。

『平家物語』の悲劇の女性である高倉天皇の中宮建礼門院徳子は平家滅亡後は寂光院に隠棲し、高倉上皇・安徳天皇の菩提を弔い、59歳で逝去している。寂光院背後の徳子の五輪塔は明治九年に大原西陵として御陵に認定され宮内庁の所管である。

寂光院は平安時代には叡山三千坊の一つとなり、往生極楽院・来迎院・勝林院と同様に沙弥・聖の住する念仏別所であった。鎌倉・室町時代の戦乱で荒廃していたが、江戸初期に至って、大坂城の淀君が父母兄弟の菩提を弔うために再興、地蔵堂本堂も再建した。

⑦ 大原の里（京都市左京区大原）

寂光院の門前町が途切れると、東海自然歩道の道標に従い、大原川を渡り大原草生町の田園の中の道を東へくだる。20分ほどで高野川を渡ると一段高い石垣上に観光用に整備された大原バスセンターがある。

出町柳駅・三条京阪・JR京都駅方面行きのバスは1時間に三本はある。出町柳駅へは30分、京都駅までは54分である。

三千院のある大原来迎院町に代表される大原の里は、高野川本支流域にある集落で、大部分が山地帯の広い地域で、大原を冠する町が十三町ある。

古代の大原庄から発達した大原八郷は、今回歩いた大原戸寺から井出・野村・草生と、南から上野・大長瀬・来迎院・勝林院の八町である。明治初年に北部の山地帯を含め大原村が成立したので、小出石・百井町なども大原を冠している。

新ハイキング選書

第4巻 **一等三角点のすべて** 多摩雪雄 編
改訂2版／上製本／B6判 350頁／定価1890円 一等三角点の知識をこの一冊に収録

第6巻 **花の山を行く** 松本雪枝 著
3刷発売中／上製本／B6判 368頁／定価1835円 山の花を訪ねての紀行文集

第7巻 **山旅素描** 足立真一郎 著
3刷発売中／上製本／A5変型判／定価1835円 山岳画家足立画伯の珠玉の画文集

第8巻 **旅がらすの山** 冨田弘平 著
3刷発売中／上製本／B6判 368頁／定価1835円 内容豊かな紀行文50編を収めた

第9巻 **一等三角点の名山100** 安藤正義/市川静子/多摩雪雄/冨田弘平/松本清 共著
3刷発売中／B6判 335頁／定価1602円 一等三角点100座の紀行・案内文集

第13巻 **甲斐の山山** 小林経雄 著
改訂2版発売中／B6判 350頁／定価1680円 山梨県の山と峠を解説した事典的な書

第14巻 **百歳までの山登り** 冨田弘平 著
2刷発売中／上製本／B6判 360頁／定価1835円 話題豊富な著者の紀行と随想集

第15巻 **日本300名山ガイド（東日本編）** 市川静子/岡田敏夫/岡部紀正/川越はじめ/廣澤和嘉 共著
9版発売中／A5判 320頁／定価1680円 新ハイキングの精選5氏実踏踏査のガイド

第16巻 **日本300名山ガイド（西日本編）** 市川静子/岡田敏夫/岡部紀正/川越はじめ/廣澤和嘉 共著
8版発売中／A5判 320頁／定価1680円 地図・写真・コースタイム入りガイドブック

第17巻 **城跡ハイキング** 中山権四郎 著
2刷B6判 354頁／定価1680円 歴史を訪ねる城跡ハイキング。紀行と案内の書

第18巻 **一等三角点の名山と秘境** 安藤正義/多摩雪雄/冨田弘平/松本清 共著
2刷A5判 340頁／定価1890円 一等三角点の山100座の登山コースを紹介

第19巻 **山との出会い** 冨田弘平 編
B6判 330頁／定価1680円 山の随想集。55名が執筆の読物

第20巻 **一等三角点の山々** 山口ゆき子/横山隆/高柳生雄/川越はじめ/岡村美琴 共著
A5判 310頁／定価1680円 第9，18巻の山と重複しない80座の登山コースを紹介

第21巻 **中央線の山を歩く** 藤井寿夫 著
A5判 295頁／定価1680円 あまり歩かれていない中央線の山107コースの紀行と案内

深田久弥の研究 深田クラブ 編
A5判 387頁／定価1680円 深田久弥のすべてを野心に研究した成果を収録

発行所 新ハイキング社 〒114-0023 東京都北区滝野川7－5－13 電話／Fax 03－3915－6110 振替 00130-9-146915

●価格は消費税込み●郵送でのご注文は送料当社負担

文学歴史探訪ハイク ㊺

義犬伝説の犬鳴山

松永恵一

空

空。空っぽになりたい。コンクリートジャングルの中で毎日を送っていると、自分に中身ができてしまう。中身があると私はダメ。なぜだか分からないが、中身がいっぱいになってしまうとマズイ。中身が詰ったら何も手に付かなくなってしまう。中身が詰まりそうになると逃げ出す。逃げるところはいつも自然のなか。

白装束に身をかため、険しい山道を登り、心身鍛錬の修行を行う熱心な山岳宗教の信者も、「空」を求めているのだろうか。

「色即是空、空即是色」という「般若心経」の冒頭は、「空」というむずかしい概念をなんとなくわかるように表現したものとして親しまれている。

せせらぎの聞こえるなか、夕暮れのだいだい色の光が、あたりをあかあかと照らしていた。その光のなかで、ひとりたたずみ読経する。

なんだかとても気持ちのよい場所。何もないのに、空気が清明で、優しくて、明るくて、光に満ちている。懐ろしく昔、少なくとも千年以上前から、この場所はずっと祈りの場所だった。この場所そのものが浄められている。

かつて人々は何日もかけて参拝に来た。何度も訪れた。何のためにだろう。何を祈るために来たのだろう。もしかしたら、ただ「空」になるためにここまで来たんじゃないかなあ、って気がした。

犬鳴渓谷

山に登る。すごく苦労して、めちゃくちゃしんどくて、いっぱい汗をかいて、頂上まで行った時はへとへとで、とにかくもう歩かなくていいんだと、脱力してひっくりかえったら、空っぽになった。真っ青な空が自分の中に落っこちてきたように感じた。

小さな古い祠の前で般若心経を唱えた。千年の祈りに浄められた地は、優しく光あふれていた。

犬鳴山七宝滝寺

葛城修験道八の宿。真言宗犬鳴派の本山。本尊は役小角作と伝える倶利伽羅大龍不動明王（秘仏）。老樹に匿まれ、両界塔、弁財天、小梶、奥、千丈、布曳の七つの流をはじめとする諸行場がある。

『七宝龍寺縁起』によると、修験道の開祖役小角が、当山奥の滝岩に出現した不動尊をまつる一堂を創建したことに始まる。七宝龍寺の寺名は天長年間（824～834）の旱魃の時、淳和天皇が当地の七つの滝に祈ったところ、その験あって和泉国一円に雨が降った。そのため七つの流を金・銀など七宝に擬し、七宝滝寺と勅賜されたという。

南北朝時代は南朝方と通じ、楠木正成らの大きな力となったと伝えられている。戦国時代には和泉・紀伊境にあり一堡塞であったためたびたび受難した。天正十三年（1585）には豊臣秀吉の紀州攻撃の兵火にかかり本堂以外を焼失したという。

その後秀吉は滝本坊を再建し、江戸時代に入って本堂が修復されるなど、寺観が整えられた。広大な境内には、本堂・庫裏・参籠所・宝我堂・七福神堂・鎮守堂・滑滝堂・観音堂・宿坊などがある。

犬鳴山に伝わるむかし話

平安時代の寛平二年（890）の昔のこと。紀州池田庄（現和歌山県那賀郡打田町）の猟師がいつもと同じように愛犬を連れて獲物を探し廻っていた。一頭の鹿を見つけ、仕留めようと狙いを定めたとき、突然愛犬が猟師のほうを向いて、今にも飛びついて噛みつかんばかりにけたたましく吠えだした。猟師は一生懸命なだめたが、愛犬はなおいっそう激しく吠え続ける。せっかくの獲に逃げられて怒った猟師は、持っていた山刀で愛犬の首を切りつけた。切断された首は、血しぶきをあげて飛び上がり、猟師の頭上を飛び越えた。猟師はハッとしてふり返ると、なんと愛犬の首は今まさに猟師を呑み込もうとしていた大蛇に咬みついていた。猟師はこの瞬間、愛犬が吠えた本当の意味を知り、死んでも飼い主を守った愛犬に心から詫び、発心剃髪し修験者となり、殺生の罪を懺悔して、田地を不動堂に寄進した。

時の帝はこの話にいたく感動され、「犬鳴山」と改めるべく、詔を賜ったという。義犬の墓は今に残り、義犬の像が建てられている。

志津の涙雨

奈良時代の昔のこと。淡路島に志津という女性がいた。たまたま島で修行中の諸国巡礼の青年僧にすっかり魅了されてしまった。志津は修行僧を庵室に訪ねるが、見向きもされない。志津は庵室の前で待つことにした。

いつの間にか眠っていた志津が目覚めると、夜は明け、読経の声は消えていた。庵室には一片の紙が置かれていた。「私は修行の身。女性は妨げになるだけで不要である」と記されていた。忘れ難い思いを胸に抱き、志津は修行僧の後を追う旅に出た。

二年の年月が流れた。対岸の泉州の犬鳴山に志津はいた。白雲の立ちこめる山道を痛む足を引きずりながら喘ぎながら登っていたが、力尽きて発狂した。集まってきた人々の中に、志津の探し求めていた修行僧もいた。経を読む両眼からは止めどなく涙が流れていた。

その後、犬鳴山に白雲が立ちこめると必ず雨が降るようになり、村人は「志津の涙雨」と呼んだ。不動堂への参道の中ほどに、志津女の墓が悲しい恋を秘めてたたずんでいる。

天狗岳の天狗

コース概観

うっそうとした原生林と多くの滝をもつ渓流美で知られ、大阪府の史跡名勝地に指定されている犬鳴山。特に秋の紅葉は目を奪う美しさ。覗き岩・押上岩・平等岩などの修験道の行場がいたるところにあり、渓谷全体が神秘的な雰囲気に包まれている。紅葉と温泉を楽しみに猟師と愛犬の伝説を秘めた、犬鳴修験道の根本道場を訪れてみた。

南海本線泉佐野駅前か、JR粉河駅前、または熊取駅前から南海バスに乗る。犬鳴山バス停下車。

日根神社の地を通過する。古くは大井関明神と称せられた。新羅から渡来した日根造により開かれた地で、根武天皇が行幸されるなど、皇室と縁の深い日根野の一の宮。祭神は神武天皇の御両親神、鸕鷀草葺不合尊と玉依姫。神武東征伝説が伝わる。

神武天皇東征のみぎり、生駒山を越えて大和に入ろうとして、日下坂で長髓彦に行く手をさえぎられる。兄の五瀬命は流れ矢で負傷されるなど難局あらず、太陽を背にするため、路を転じて紀州に向かおうとされ、佐野に上陸。当地に日の神をまつり戦勝を祈願されたと伝える。日根は日の神の根拠地の意味だという。

北麓の慈眼院は旧神宮寺。国宝の多宝塔が残る。弘仁六年（815）から二年間空海が止住し、一山を整備したとも伝える。空海の杖が根づいたという蛇桜がある。府指定天然記念物で『和泉名所図絵』は「奇代の大樹にして枝葉の没り時は遠近ここに来たりて実を翫して春日の永きををしむ」と記す。

土丸から大きく右に折れ、右前方に小峯土山、左前方に甫山の美しい姿を眺める。この道は粉河街道と呼ばれ、粉河寺から高野山へと通じている。

左にそれて、終点の犬鳴山に到着。不動堂への参道コースをとる。渓谷沿いに日帰り入浴施設の犬鳴温泉センターが目に入る。歴史のある秘境の名湯の一つで、泉州の手軽な奥座敷。泉質は単純硫黄泉。神経痛やリュウマチに効く。円形の大浴場からは情緒あふれる四季折々の景色が楽しめる。渓谷のせせらぎのなかで、飲んで食べて、一日湯ったりくつろぎたい人はどうぞ直行してください。

不動堂までの道は、両側に多数の石塔が並び、夏は渓流沿いに涼を求める人、冬は紅葉狩りで賑わう。参道の真ん中に大杉がそびえ立ち、「大阪みどりの百選」顕彰碑がある。高さ32m、府下で最も高いと言われている。

七宝瀧寺の山門をくぐる。深い木立に囲まれた渓谷は、アラカシ・シラカシ・イヌダモなどの木々が茂り、ソメイヨシノやイロハモミジが四季折々の美しさを見せてくれる。このあたりではめずらしいルリミノキなども見られる。

苔むした岩壁には石仏がまつられ、だれが点したのか絶いろうそくの灯が目につく、思わず手を合わせる。原生林の趣を残す森と、修験者たちの足跡は、どこか神秘的な世界へと誘ってくれる。

左側に両界ノ滝が落ち、宿坊・白雲閣を仰ぐ護摩場を過ぎると右手に塔ノ滝、義犬の墓を過ぎると、御供所の手前に分岐がある。まっすぐ進むと本宮奥に行者の滝がある。滝に打たれる修験者の姿が

犬鳴山付近略図

見られることもある。古来より連頭向上、成就の守護神として、また生命を不動尊として霊験あらたかなりと崇拝されている。清滝堂で白装束を借り、行をすることもできる。

不動明王の大きな像の右手の角から磐明ヶ岳への登りが始まる。急な斜面をジグザグに登る。時折、ゴーンと鐘の音が響いてくる。蛇腹、黒い岩が続く。尾根は直登につぐ直登。尾根筋の空が広く見えるようになると磐明ヶ岳、「犬鳴山奥之院」。急な尾根をつめると経塚権現山、葛城第八経塚。

少しくだり、分岐点を右にとり天狗岳をめざす。最後に少し急な坂を登ると天狗の像が出迎えてくれる。

しばらく休憩して、先ほどのお不動さんの像まで戻る。行者の滝の左手の赤い鳥居をくぐると滝の頭に出る。「元山上ヶ岳」の道標がある。左へとり裏行場へ入る。すぐに地獄谷の鎖場を登り、鉄鬼岩を過ぎる。岩壁の横の般若心経塚。役行者をまつる祠と護摩壇がある。さらに登り文化十二年奉納の祠で表行場は終わる。すごい急斜面の道が続く。穏やかな登りとなりよく踏まれた道に出ると、すぐ高城山（651・0m）。この山頂の最高峰だが、植林のため展望はきかない。

気持ちのよい尾根道歩きを楽しむ。大きくくだって少し登り返すと高鍋山（669・0m）。道標に従い、すぐに左にとりコッツキ谷をくだる。感じのよい雑木林の谷道をくだると犬鳴山。再び、お不動さんの広場に到着。ベンチに腰掛けて休憩。ひと息ついて、犬鳴山のバス停へ向かう。

△コースタイム▽

泉佐野駅（バス30分）犬鳴山バス停（40分）行者の滝（40分）経塚権現山（10分）天狗岳（40分）不動堂（1時間10分）高城山（15分）高鍋山（35分）不動堂（30分）犬鳴山バス停

△地形図▽2万5千＝内畑・樽井

△費用▽

南海難波駅～泉佐野駅　580円
泉佐野駅～犬鳴山バス停　470円

△問い合わせ先▽

南海総合サービスセンター
06（6643）1005
犬鳴温泉センター（毎水曜日休）
0724（59）7208
（朝9時～夕5時（日・祝6時まで））

特選コースガイド⑪

大峰

大峰前衛の静かな山
高城山から天狗倉山

中級コース（★★）

金谷　昭

大峰前衛の山は、最高峰八経ヶ岳を始めとする大峰主脈の名に隠れて、登る人はきわめて少ない。しかし、これらの山に登って、木の間越しに見る主脈のすばらしさは格別である。そして、何よりも静かな山行が楽しめる。

高城山はその標高1111㍍の数字のゴロ合わせで、平成11年11月11日は、狭い頂上は溢れんばかりの登山者で、地元では何事かと驚いていたという。たった一日のブームが過ぎ、今ではほとんど登る人もない。地元の天川村ではこのヨのためではないだろうが、九尾より直登尾根コースを整備している。九尾より高城山だけでは少し時間が余るので、天狗倉山（1061㍍）への縦走を試みるのもよい。

天川沿いの九尾谷林道に入る。なお、九尾集落では吉野杉磨き丸太の生産がさかんで、磨きの作業が見られる。

林道は九尾谷の奥深く天狗倉山の直下にまでのびていて、その中間までは舗装されている。15分程歩くと林道の右側に八大龍王の滝行場があり、さらに20分程行くと、対岸（右岸）に林道が分岐する。なおも本谷沿いを5分も歩くと、天川村が設置した「高城山登山口」の標識がある。標識といっても木製で、いつまであるか分からないような不安定なものだ。この本谷におり対岸に渡る地点の約50㍍先の林道の右の支谷に作業用モノレールがあるのを目標とすればよい。

本谷に架かる丸太橋を対岸に渡ると、薄暗い檜植林に入りすぐ分岐となる。右の道が高城山から東南に派生する直登尾根コースで、それだけに急登が多いが、道は明瞭だ。テープや標識が所どころにあり、迷う所は少なく、ゆっくりと登っても高度が稼げて意外に早く登頂できる。

10分も登ると被線の右側は檜植林、左側は雑木林となる。地図の677㍍のコブに達すると、傾斜もややゆるやかとなり少し開けているので小休止するのによい。

コブからのゆるやかな登りも10分程で再び急登となるが、右側の檜植林はやや谷側に後退し、道は雑木林のなかを登って行く。この急登を終え、次のコブに達すると再びゆるやかになり、ササが出てきて、前方に山頂が見える。

やや急な最後の登りを終えると、高城山の山頂である。2等三角点標石を中心にした小広場となっているが、雑木林に囲まれて展望はない。松の大木やその他の樹木には先の平成11年11月11日登頂の記念の板がベタ打ちしてあり、静かな山頂の風情にそぐわない。

天狗倉山へは山頂から東北方向に向かってササのなかの踏み跡に入る。縦走路は、所どころにコンクリート製の村境界杭があり、被線を忠実にたどればよい。

すぐに急なくだりとなり檜植林帯に突入する。いったんゆるやかとなると右側（九尾谷側）に松の多い雑木林となる。しばらく行くと小さな鞍部となり、再び登りとなる所で左側に山腹を捲く作業道が分岐するが、ここは被線を忠実に行く。この登りを終えると、ミズナラ等の高木疎林の緩やかな広い尾根に出る。往年の大峰の山被の雰囲気を留めている気持ちのよい所で、北方木の間越しに吉野の山々が望め、休憩に適する。

さらに進むと右に折れ、や壷尾根となり、どんどんくだって最低鞍部の狼越に達する。かつての展望の良さも植林が成長して駄目。両側の谷にかすかな踏み跡がくだっている。

峠より急な登りとなり、登り終えたピークはタカノスである。ここには九尾谷から南西尾根に踏み跡が登って来ている。

タカノスを越え、小さなコブを二つ越すと露岩が出てくる。右側を捲き急登すると天狗倉山に飛び出す。残念ながら展望はない。北側は檜の巨木、南側は若い檜植林帯となっている。

天狗倉山より東南にのびる尾根には五色谷・沢原ルートがあり、984㍍峰を経由して小池谷への支尾根をくだって林道終点近くにおりられるが、間伐林の放置によりルートは寸断されており、おすすめできない。

帰路は先程のタカノスより九尾谷の上部、池谷にのびている尾根をくだることにする。

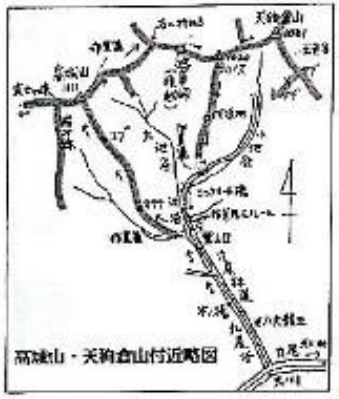
この尾根は左側は若い檜植林、右側は雑木林、その境界被線の踏み跡を忠実にたどってくだる。所どころにテープがある。

この被線の伐採地から見ると、草地の観音峰の上にボリュームのある山上ヶ岳、稲村ヶ岳から大普賢岳の縦峰等、大峰の千両役者が勢揃いする。

これを過ぎると踏み跡はよりはっきりしてくる。万一踏み跡を外した場合は、左側にくだるようにすれば比較的ゆるやかで、尾根側に付けられた林道におり立つことができる。谷音が聞えるようになってきた頃、被線を横切る作業道におり立つ。これを左側にたどれば200㍍ほどで林道に飛び出す。

池谷は明るい谷で、雑木林を愛でながらくだればよい。

（平成10年11月16日・平成12年2月5日歩く）


天狗倉山
1061
高城山
1111
小倉峠
小倉谷
ニコヤ林道
ニコヤ林道
ニコヤ林道

特選コースガイド 2

鈴鹿

鈴鹿の秘峰を訪ねる

ベンケイと船岩(石)

一級コース（★　）

西尾　寿一

鈴鹿の近江側、滋賀県甲賀郡の土山町黒滝に山小屋をもつK氏の招きで、土地の古老や住民とともに田村川沿いの鈴鹿の山々の話をする会合に出席した折、黒滝からベンケイと船岩を登ってきた。

この山行には土地の人たちと、新しく黒滝の住民になる若い夫婦なども参加されてにぎやかになった。いずれも鈴鹿の山に深い興味と関心を示す人たちばかりである。

特に黒滝在住のS氏や黒川の博物館長などはことのほか熱心で、昔からあった山道や炭焼き道を復活させたいと、チェンソーまで買にしての登山であった。

黒滝の氏神惣王神社の脇から地形図にみえる獣道を登りだす。始めはやぶがかぶさるが、登るに従い昔の道が明らかに残っている。尾根通しで迷う所はないが、鹿の食害防止のネットが張りめぐらされていて、道をかくしているものの問題なく最初のピークに着く。

草原もあって所どころ展望もきく。ピークからくだるとやせ尾根のキレットとなりややルートが乱れるが、方向を定めて前方に見えるベンケイの黒い森をめざせば通過できる。急登いちばんでベンケイ（761・6m）の山頂となる。

山頂は木がよく茂り、植林もあって展望はきかない。2時間程で登ったが、急登につぐ急登で、仕事は早いが少々きつい。しかし登った充実感は気分のよいものである。ダラダラ登りで時間を費すのとどちらがよいかは好みの問題である。

山頂で弁当を広げて雑談にふけり楽しいひとときを過ごす。展望がきかないので早く船岩へ行く意見が大勢を占め、歩きだす。ゆるくくだって行くと、浅い鞍部となり、風の通り道とみえて植林の杉がバタバタ倒れている所に出る。丹精した木がこれだけ倒れてしまっては山主は立つ瀬がないだろう。近年の風害は各地で森を破壊しているが残念である。

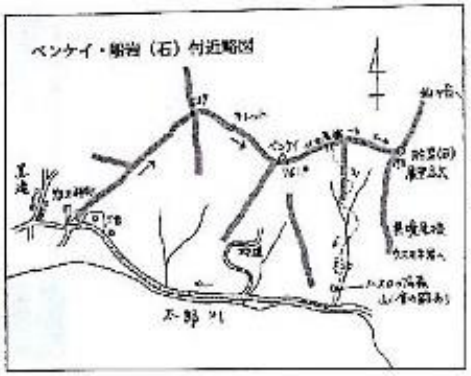
風倒木帯を過ぎると登りとなる。少しの急登でポッと飛び出した所が船岩で、伊勢側の広大な展望が得られる。仙ヶ岳周辺が圧巻で石水渓もすばらしい。

船岩（右）に乗って伊勢方面を見る

船岩は伊勢側では船石と呼ぶが、同じ岩であったことに安堵した。以前、調査のおりには伊勢側の資料のみで船石と断定したのだが、黒滝では船岩と言って杉本氏などは子どもの頃この岩に登って盛んに遊んだという。

近江と伊勢で地名が共通する例は少ないが、南部の低い山脈となると交流があったとみえておもしろい。船岩は細長い岩が積たわって中央が窪み船型に見えなくもないが、見逃す人もいるだろう。鞍走路も通っているが、単に展望の良い場所と思って素通りする人も多いと思う。

下山は南下する鞍走路に入らず、元の道へ入る。先の風倒木帯の手前から短かい尾根にテープがあり、これをくだると太郎谷へ出合う。尾根を10分ばかりくだると大量の風倒木に出合うが、杉本氏はチェンソーをあやつり片っ端から切断してゆく。小気味よい手際の良さで数十本の倒木を処理して、道しるべのテープを付けたので、今後このルートを登るときには役立つと思う。



左岸の滝急道は少し荒れているがすぐ安定した杣道となる。しかし右岸をトラバースして数段の滝を捲く所は、細いフィックスロープがあるものの、こわがる人もいるだろう。

地元ではこの部分をもう少し改良すると言っている。滝はこれだけで終わり、以後安定した杣道となり「ノースロップの森」という、甲西高校の学校林と小屋の跡を過ぎると間もなく太郎谷の林道におり立つ。そこから黒滝までにわずかである。

ベンケイの登路としては、伊勢側の人が鞍走路から往復するとみえて、よく踏まれている。これに対して近江側では都合三本のルートが考えられる。登りに使った尾根コースは古典ルートで、地形図にもあるが現在はあまり使われていない。しかし、今回歩いてみて十分使えそうなので利用したい。下降に使った太郎谷川からのコースは地元ですすめている。今回風倒木の大半を片付けたので、登りに使っても出合から1時間もあれば登頂できるだろう。

第三のコースは山頂直下の南から新しい林道が登ってきており、これを使って終点から支尾根に取ついて登るもので、地元ではこれが一番早いと言う。しかし少々のやぶこぎはさけられそうにないので、そのむね注意がいる。

ベンケイの名称については地元公民館の会合で尋ねてみたが、だれも由来を知る人がいないのは困惑する。古い時代の名ではないとは思うが、単純なだけに難解な名称ではある。

黒滝では新しく入村する都会の人とともに、田村川筋の山々の登山道の改良をすると言っているので、能登ヶ峰・仙ヶ岳などが近江側から登りやすくなると思う。

また黒滝峠・丁半峠など、まぼろしの峠なども復活されるものと思われる。この方面の山に再注目したい。歩くのは晩秋と早春の頃がよいだろう。

（平成11年10月16日歩く）

△コースタイム▽

惣王神社（2時間）ベンケイ（50分）船岩（1時間30分）黒滝

△地形図▽5万＝亀山

特選コースガイド③

蝶群れ翔ぶ播磨富士

好望・笠形山

一般コース（★　）

多摩　雪雄

播磨

笠形寺まで車を乗り入れる。本堂は薄汚れた板戸を固く閉めてはいるが、背後の一段上に住職の家がある。庭には樹齢四百五十年の天然記念物コウヤマキが天空をおおっている。

横手の石段を登った広場には、木尊聖観世音菩薩と金剛蔵王大権現を祭祀する蔵王堂があり、一見の価値がある。

車は休み堂を通過して神社下駐車場に着く。ストレッチ体操後、一段上の東屋を過ぎて杉林中の2間幅の道をゆっくり登って行く。15分で笠形神社の広い境内に着く。

大杉に囲まれて県文化財の中宮をはじめ、神楽殿・併祭神の小社等があり、緩斜地の最上段にある西宮の本殿は春日造の銅板葺き、蟇股の龍、木鼻の獅、欄間には雲に鶴と龍に鳳凰、腰障子の獅子の流落とし等のすばらしい彫刻が目を楽しませてくれる。祭神は菅原道真他二神。

本殿脇に昭和三十四年姫路城改修の際に心柱として使用した大杉材に建つ碑を見て、それに匹敵する大杉が散在する境内をあとに、本殿裏から始まる登山道に入る。

西斜面の杉林をゆっくりたどってから左へ、草叢（くさむら）の登りもわずか、ベンチのある尾根上に出ると見晴らしがいい。神社から25分。ここからシシ止めネットを高く張った間の西斜面を再びたどる。一書に猪止めとあるのは鹿止めである。

すぐに仙人谷道を合し、右へ木段を登って、再び明るい尾根上のシシ止め間の道から、正面に見えている杉林とササの登りに入る。

急な木段が終わると、赤松と雑林とササの平坦に近い歩みとなって右へ廻り込むと、岡部川水源を左手すぐ下に見て、最後の木段を登りきる。明快な小広い草地の頂上には東屋があり、一段下にはトイレもある。正面には笠形山が見えている。ここは笠丸。数種の蝶が乱れ飛んでいる。

雑林と丈余のササのなかで次のコブへのいやな下りもわずか、神崎町分岐を過ぎてちょいと登ると九合目。次いで低い平頂を過ぎるとササの種類が変わり、大石が連続する登りで、間もなく笠形山の小広い頂上に達する。

笠形山山頂にて

笠形山の東屋

笠形山付近略図

二つの東屋の間にある939・36が1等三角点標石は、北面が欠落しているとはいえ保護石に囲まれ、彫りの深い立派な顔を見せていて、磁北は0度。現定通りに埋定されている。

展望盤は草付き斜面に倒れ込んでいた。360度の大好望で、重畳たる山並を、20万図を拡げ時間の経つのも構わず指呼していた。

東の微風。積雲1、高層雲?、乱層雲2、高曇りながら薄日が差している。東屋に設置された温度計は25度。ここも蝦が多いが、この山域には、蚊（ぶと）な蚊や蚋（ぶと）がいないのがいい。

神崎への下りは登り道と同じく、2万5千図とはまるで異なる長い道程で、各合目には真新しい標示があり、要所には東屋が設置してある。手入れのいい杉林のなかの斜面を、ぐるぐる廻りながら小沢をいくつも越えるたびに降登する。

宿泊棟や公衆電話のあるグリーンエコー笠形までは、下りなのに長い時間を要した。

積雪量が少ないとのことなので、冬期の望岳山行も悪くないだろう。

（平成11年9月1日歩く）

△参考タイム▽

姫路9・00＝大黒屋10・00＝笠形寺10・05～20＝神社下駐車場10・30～45＝笠形神社11・00～15＝尾根上ベンチ11・40＝再び尾根上11・50＝笠丸12・15～55＝神崎町分岐13・05＝笠形山13・25～14・30＝神崎へ下る14・50＝アセビの森（ベンチ）15・05～15＝水辺広場（東屋）15・55～16・05＝炭焼窯跡16・26＝扇妙ノ滝見台（東屋）16・50～55＝グリーンエコー笠形17・30～45＝川辺小学校GPS18・10～20＝福崎町高橋・美嘉荘18・40（注）△地形図▽2万5千＝粟賀町

特選コースガイド④　琵琶湖

2等三角点のある山
沖島山（尾山）

初級コース（★　）

山形　歳之

日本一大きい琵琶湖で、唯一人の住む沖島（竹生島・多景島はきのろ）に、2等三角点（262m）の山がある。住民の大半は漁業を営み、百軒を超す家屋がある。島には小学校もあるが定期船がなかった。島に行くには船をチャーターする必要があり、頼む所も不明で、一人では高くつくだろうと躊躇していた。

前年、近江八幡の国民休暇村に宿泊した際、手にとれる近さの沖島を眺め、ぜひ登ってみようと思った。その後定期船が通うようになったと聞いたので、今回の山行となった。

船は近江八幡市大中町の堀切港から出港する。名神高速道の竜王インターで降り、近江八幡市を経由して安土町に到る。織田信長ゆかりの町は、立派な観光の町になっていた。西湖では休日のバス釣りの大会があり、湖面には釣船がひしめき、湖岸周遊道路もマイカーが連なっていた。

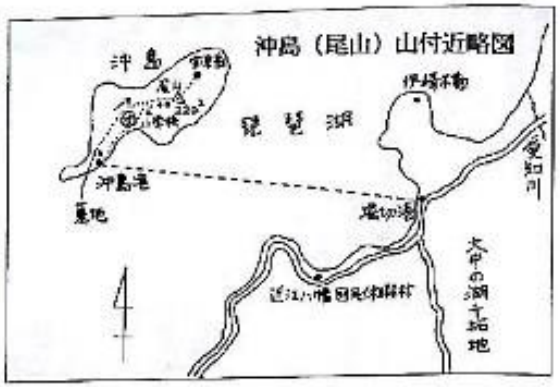
地元の人に尋ねながら堀切港に行くと、入口に船の案内が出ていた。それによると、2時間毎に便がある。しかし港は島の人たちの専用で、岸壁の駐車場は車で埋まり、「関係者以外進入禁止」の看板が立っていた。休日とて港で釣りをする人もたくさんいて、車は道路まで溢れている。島に行くのだからよいだろうと、進入禁止の看板を無視して岸壁に車を乗り入れる。何とかスペースを見つけて車を駐めた。特に管理する人がいるわけではなく、問題はなさそうだ。

あまり大きいと言えない港は、漁船が何隻も繋がれ時々出入りしている。休日で特に漁をしているとは思えないが、みんな沖島に向かって行く。車で帰って来た島民も簡単に繋いであった船で島に向かう。「乗せて！」と声が峻まで出かかった。それにしても、海も湖の漁も全く変わりないことを知った。

沖島の定期船

出港時間が近づくと、沖島から船が近づいてくる。20人乗りくらいの船で、島からの人が降りると入れ替わりに乗り込む。2～3人しか人影がなかったのに、船の出港時間になるとどこからか人が集まってくる。船は折り返して出港する。10分余で島に到着した。

乗り合わせた島の主婦に、山の登り口を訊ねたら、「行ったことがないので知



沖島山（尾山）の三角点

らないが、行くのなら判る人を教えます」との返事。どこの山でもそうだが、その山麓に住んでいても全く山に入らない人が多い。地元の山でも知る人が少ない。

地形図を持っていることだし、わざわざ教えてもらうほどでもないので、港の正面に見える墓地をめざす。狭い路地の間を抜け石段を登ると、山の斜面に並行して墓石が並ぶ。島では平地も少ないので、墓に長々と連なっていた。やがて墓地が終わり、休憩合の所から登山道がのびていた。

林のなかをゆっくりと登る。山はわずか標高200m余。そのうえ迂回はすでに初が終で、登りは100m余りだ。簡単に稜線に登り着く。しかし、人の歩いた気配はなく、蜘蛛の巣がいっぱいだ。やがて小学校への下りの分岐表示を過ぎ、さらに林のなかを進むが、ピークらしい所がない。道なりにたどると「宝来岳」の標示が目に留まった。林のなかの平地だった。周辺を探すも標石は見つからず、その先は道も怪しくて下り気味。歩行時間と地形図から見てどうやら三角点は見過ごしたようである。

戻りながら高そう所を注意して行くと、「尾山三角点」の小さい表示に気がついた。登りに見過ごしていたのだ。雑走路から18mばかり入った所に目的の標石があった。雑木林のなかで展望は全くなく、北向きの標柱が立っていた。

下りは小学校にくだる。学校の上に出て始めて展望が開け、対岸に国民休暇村や堀切の港が見えた。

地形図の三角点の所が「尾山」。その先のピークが「宝来岳」となっていた。

（平成12年6月4日歩く）

船の時間（片道400円）

沖島港発		堀切港発	
7・00	8・00	7・45	8・15
10・00	12・00	10・15	12・15
14・00	17・00	14・15	17・15
18・00		18・15	

★1便2便は休日運休

△コースタイム▽

沖島港（約30分）尾山

△地形図▽20万＝名古屋　5万＝彦根西

部　2万5千＝沖島

特選コースガイド⑤　湖南

中世の山城跡

城山（篠原岳）

初級コース（★　）

柴田　昭彦

野洲町の相場振山（水茎図号で紹介）の頂上から南への縦走路で東側を見ると、足下に辻ダムでせき止められた相場の水面が広がり、向こう側に秀麗な山が見える。これが城山である。角川地名大辞典の解説では「古老は相場振山ともいう」と記しており、城山と相場振山とを混同していることがわかる。

中世には全国（北海道を除く）に山城が築かれ、その多くが「城山」の山名を持っており、『日本山名総覧』には276山がリストされていて、最も多い山名となっている。

野洲町の城山は、標高286㍍のピークをいい、小堤城山城の遺構が残る。

この山城は、15世紀後半頃、馬淵氏（近江守護佐々木六角氏の有力家臣）の政治的・軍事的支配下にあった永原氏の山城であり、郡の前面に石員を多用した、湖南（野洲・栗太地区）で最大の山城とみえられている。北川孫治『近江名跡案内記』（明治29年）によると、応仁元年（1467）に六角政綱の庶永原信頼が西住したという。『永原氏由緒』では、小堤村の続きの山に城を築き、文明12年（1480）に永原重秀が入ったことが記されている（野洲町史）。永禄11年（1568）、永原重虎の時に浅井氏に滅降したという。『滋賀県中世城郭分布調査3』（昭和60年）によると城山は「篠原岳」ともいい、小堤城山城は「大篠原城」とも呼ばれている。

一方、城山の東方の標高259㍍のピーク（古城山）付近には、古城山城（岩倉城・岩蔵城）の遺構が見られる。『近江名跡案内記』によると、岩倉古城は正安2年（1300）に六角頼綱が築き、家臣の馬淵秀信に守らせたが、天正元年（1573）、馬淵秀信の時に織田信長に滅ぼされたという。西方に小堤城山城が築かれてからは、その出城としても利用されたが可能性があるが、石垣は用いられていない（虎口付近に戦国末期に後補された石垣が残っている）。

野洲町の城山はハイキングコースが整備されており、今回、県立希望が丘文化公園から登り、辻町へくだるコースを紹介する。

JR野洲駅で降りる。中山道に入り、

山上ダム湖に映る城山

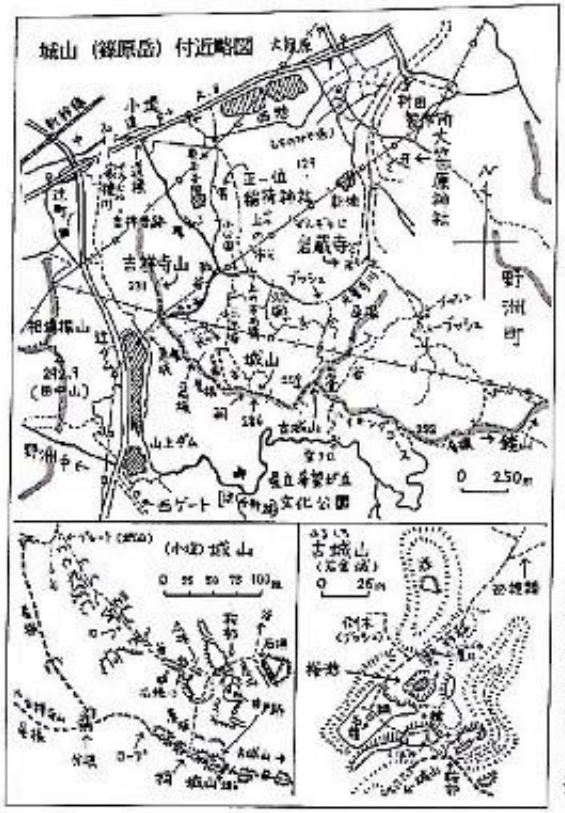
稚荷神社から相場振山の南を通り抜けて山上ダム湖の前に出る（西ゲートまでバス利用可）。城山が鉢を伏せたように見えている。右側の通路から川のコンクリート道を渡り、辻ダムの東側から迂じている未舗装の道に入り、防火用水のドラム缶を見ながら進む。中世の集落跡の淀千軒伝承地（山城を構えた頃、南麓で繁栄した市街という）を経て山手のほうに入り、登山口に着く。ハイキングコースの案内図があるが、表面が剥落して全く利用できなくなっている（なぜ設置しているのか？）。

堰堤の左を捲いて飛び石伝いに対岸に渡り、シダの多い道を登ると鞍部に着く。右は城山への縦走路である。まっすぐにくだるルートは岩蔵寺方面に通じる道で、左が城山への道である。左へ尾根伝いに進むと、右手に黄色のテープがあり、正面がくだりになっていて、やぶに覆われた場所（鞍部）に出る。ここが古城山城の南側にあたる。右手（東）の尾根も郭の一部である。鞍部から城跡の中心部や桜池に出る道はやや分かりにくいが、ルートファインディングのできる人のためにガイドしておこう。

黄色テープの地点（鞍部）から左（西）へ登るのが城山へのコースであるが、登りかけてすぐ右に入る。平らな部分が郭で、踏んだ場所で右に出て、急斜面を見下ろすと、檜の大木がある。下におりずに左へ踏み跡をたどって迂なりにくだると、広場の中央に出る。そこに、あやしげな石積があり、瓦で丸い石を囲って祠のようにしてまつってある。北東側の低い所には桜池と俗称される池が見つかる。

『野洲町物語』（昭和62年）には「昔からどんな旱魃でも涸れたことがない底なしと伝えられる」、「姫城のとき黄金の唐櫃を投げこんだとか、元日の朝には馬の蹄の音が池の底から聞こえてくるという」などの伝説を紹介している。北東

城山（篠原岳）付近略図



城山の山頂

の石垣の道構の一部である。登るのはきついが、ほどなくすばらしい展望の開けた城山の山頂に着く。小堤生産森林組合の石標があり、平成12年に設置された真新しい山名板も立つ。山頂部の窪みは井戸の跡である。この頂上付近で昔の戦火をしのばせる焼き米が発見されたことがあるという。少し先に祠があり、その背後の自然石が人の上半身のように見えておもしろい。

自然石の背後へくだる。急坂だが、ロープが整備されている。やがて道がゆるやかになると、一般向けの道は右に折れるが、ここではまっすぐに尾張伝いの道をたどる。やがて、赤ペンキの目印のある道は尾根を離れて左（西）へ急坂をくだる。再び尾根にのり、次の明瞭な分岐（火の用心のこわれたプレートがある）では左をとる。火の用心の看板がいくつかある所に出る。左は辻ダムの湖畔に通じる巡視路で下山に利用できるが、転げ落ちそうなほど急な道なので注意が必要である（辻町バス停へはこのコースでもよい）。まっすぐ北に向かうと鞍部で、右に壱ヶ谷を経て、狐谷へ出る道がある。ここで吉祥寺山まで往復してくるのもおもしろい。吉祥寺はその北麓の丘にあったが廃寺となり、今では名前だけを小字名に残している。鉄塔を経て、尾根伝いに主に岩の右側を巻きながら進むと吉祥寺山の山頂で、見事な大岩が立っている。もう少し先まで歩けるが行き止まりなので引き返し、鞍部から下山する（少し荒れた箇所がある）。狐谷には生森小公園があり、城山への一般向け登山道（三ヶ谷経由）の入り口に新しい道標が立っている（筆者が最初に訪れた平成12年1月にはこの道標になく、3月末の再訪時に設置されていた）。

手洗いの案内があるが、水場と倉庫だけでトイレは見当たらない。ここの南東一帯を久坂という。明治32年2月に大津の船橋達五郎・横井常三がここでマンガンの試掘を始めたといい、太平洋戦争中にも再び掘られたが、今は廃坑となっている（『野洲町物語』『野洲町史』）。北北西に進路をとり、国道に出て小堤バス停に着くが、日祝日は便がないので、中山道を経由して辻町バス停（土日祝は5時35分が最終便）に出るとよい。

ファミリー向けには、辻町・小堤バス停から道標に導かれて、三ヶ谷遊経由の

尾張道の往復のみをおすすめする。尾根道に入る手前の左手にある「昭和60年夏　城山」のプレートの地点から踏み跡に入り、城跡を観察するのも冒険まじりでおもしろい。左右には削平された郭が残り、広場に出る手前の左手に石垣がある。広場から鞍部を越えてくだると、右手上方に長い石垣がある（炭が焼る）。鞍部から南へ上がるとやぶのなかに井戸跡が見つかる。広場から南へ急な坂をよじのぼると祠に出られるが、相当にきついルートである。

城山の北麓にあたる上の市（川の東側）は、昔、ここに市が立つほどのにぎわいをみせた宿場であったという。地形図では、ここから岩蔵寺・大笹原神社へ通じる良い道があるように思えるが、実際は、やぶ道で歩きにくく迷いやすい。

吉祥寺山の立岩

大笹原神社へは、村田製作所バス停から光善寺川沿いに進み、橋の所で左折して分岐で右をとるとよい。越知諸実による社殿の造営は寛和2年（987）と伝えられ、鎌倉時代初め（建久の年）に社殿が佐々木定綱によって造営されたという。現在の本殿（国宝）は応永21年（1414）、岩倉城主馬淵定信が再建したもので、三間社入母屋造檜皮葺である。文亀元年（1501）の屋根葺替えの願主は永原軍秀で、在地支配の強さがうかがえる。拝殿横の寄倍の池（石組3基を沈めた底なし池）はどんな日照りでも涸れることがないといい、古くから、神殿前で雨乞い神事が行われた。左側の境内社の篠原神社本殿（重要文化財）は春日造りで一間の宮」といい、鏡餅の神をまつる。

薬師さんと地元で呼ばれる岩蔵寺へは、光善寺川に沿う道を進み、車止めのある所で右に入るとよい。この寺は、弘仁の頃、最澄の開基と伝える天台宗寺院の後身で、文安5年（1448）に再興されたが、馬淵氏の滅亡と共に衰退したという。鎌倉時代の本尊薬師如来立像（重要文化財）は秘仏で拝することはできない。

境内には中世の小型板碑が残る。

野洲駅南口からの近江鉄道バスを利用する場合、やや分かりにくいので説明しておこう。「希望が丘西ゲート」方面なら、辻町か西ゲート下車（日祝日だと、西ゲート行きは11時まで30分間隔、11時20分と12時は斉秋院の幸福運行）が利用できる。

「村田製作所」方面なら、辻町・小堤・大篠原・村田製作所下車で利用しやすいが、日祝運休に注意したい。また、町内循環バスで北循環（左回り、10時5分、小堤・大篠原）と南循環（右回り、10時33分、辻町）が利用できる。北循環（左回り、11時10分、大篠原、小堤）も利用できるが、かなり遠回りになる。

（平成12年1月15日・

3月26・30日歩く）

△コースタイム▽

野洲駅（50分）西ゲート（30分）登山口（15分）吉城山（25分）城山（35分）吉祥寺山岡鞍部（10分）吉祥寺山（20分）狐谷分岐（15分）小堤バス停（15分）辻町バス停

△地形図▽2万5千＝野洲

1万＝野洲町全図（平成7年）

沿線ハイキングガイド

近鉄　京阪　阪急　南海　神鉄　山陽電車　叡電・京福
公開ハイク　歩け歩け大会　文学散歩　歴史散歩　その他

近鉄

▽金峯山寺修験体験「回峯行者といく吉野十五丁」　11月3日(祝)～4日(日)雨天決行（集合）吉野線・六田駅14時20分（コース）「1日目」六田駅―柳の渡し跡―吉野神宮―金峯山寺蔵王堂（泊）（2日目）宿―金峯神社―四寸岩山―百丁茶屋―大天井ヶ岳―五番関―トンネル口（バス）聖宝寺―桐川温泉（バス）下市口駅（約28㌔御徒歩）参加費14000円（1泊3食付）定員50名（電話申込制）中学生以上60歳までの健康で健脚な方（申込先）営業推進局大阪ハイキング係06（6775）3566まで

▽室生赤目青山国定公園指定30周年記念事業「秋の三峰山さわやか登山」　11月5日(日)（集合）榛原駅8時40分～9時10分（コース）榛原駅（バス）みつえ青少年旅行村―登り尾―山岳―三峰山山頂―八丁平―三峰峠―新道峠―みつえ青少年旅行村（バス）榛原駅（約10㌔）参加無料（バス代別途）定員200名（申込制、先着順）（申込み方法）往復ハガキに郵便番号・住所・氏名・年齢・電話番号を記入、最終締切10月30日定員になり次第終了、当日参加は一切不可（申込先）〒514―8570津市広明町13三重県庁森林部自然環境室自然共生・協働グループ059（224）2339まで

▽駅長お勧めフリーハイキング「三茸・竹ノ内街道を歩く」　11月5日(日)雨天決行（集合）二上神社口駅9時30分～11時（コース）二上神社口駅―二上ふるさと公園―当麻寺―当麻寺―竹ノ内街道―孝女尾張・現願寺―長尾神社―磐城駅（約7㌔＊係員は同行しません）参加自由・無料（拝観料別途）（問合せ）近鉄高田市駅0745（53）2531

▽榛原町第2回ファミリー登山大会「高城岳・三郎岳登山」　11月11日(日)（集合）ふるさと水車広場（伝隆寺跡）10時30分（榛原駅からバス、高井バス停下車約20分）（コース）（ファミリーの部）ふるさと水車広場（受付）―登山口―高城岳―三郎岳―高井十本杉―榛原―高井（約10㌔）（健脚の部）ふるさと水車広場（受付）―登山口―高城岳―三郎岳―石割峠―諸木野公園―与三郎の墓―諸木野関跡―高井十本杉―榛原―高井（約20㌔）参加無料（バス代別途）電話申込制10月11日(水)～11月6日(日)までに榛原町観光協会0745（82）1301まで

▽駅長お勧めフリーハイキング「吉野・宮滝万葉コース」　11月12日(日)雨天決行（集合）吉野駅9時30分～11時（コース）吉野駅―世尊院―金峯山寺蔵王堂―吉水神社―勝手神社―秋見の松―桜木―（吉野宮滝万葉の道）―喜佐谷―象水神社―吉野歴史資料館―宮滝（バス）大和上市駅（約10㌔＊係員は同行しません）参加自由・無料（バス代拝観料別途）（問合せ）近鉄吉野神宮駅0746（32）2173

▽近鉄フリーハイキング「榛原寺から山萌える赤目滝へ」　11月18日(日)雨天決行（集合）赤目口駅9時30分～10時10分（コース）赤目口駅―榛原寺―日本サンショウウオセンター―木動滝―乙女滝―キ三滝―布曳滝・陰陽滝―荷田滝―琵琶滝―赤目滝バス停（バス）赤目口駅（約13㌔＊係員は同行しません）参加自由・無料（バス代・保険料別途）（問合せ）営業推進局大阪ハイキング係06（6775）3566

▽近鉄万歩ハイキング「高取城まつりを訪ねる、壺阪寺から高取城址へ」　11月23日(祝)雨天中止（集合）壺阪山駅9時10分～9時40分（コース）壺阪山駅―高取町役場―壺阪寺―五百羅漢―高取城址―やすらぎ荘―壺阪山駅（約12㌔）参加自由・無料（拝観料別途）（問合せ）営業推進局大阪ハイキング係06（6775）3566

▽ミステリーロマン2000飛鳥「壁画飛鳥16キロハイキング」　11月23日(祝)雨天中止（集合）飛鳥駅9時40分（コース）飛鳥駅―飛鳥歴史公園館―中尾山古墳―亀石―酒船石遺跡―橘寺―石舞台古墳―岡寺―酒船石遺跡―マラ―伝飛鳥板蓋宮跡―入隈古墳―飛鳥寺―甘樫丘―東の宮殿―飛鳥歴史公園館（約15㌔）参加自由・無料（拝観料入館料別途）（問合せ）国営飛鳥歴史公園館0744（54）2441

▽駅長お勧めフリーハイキング「生駒山系の湧き水・水呑み地蔵と大阪平野を望む」　11月23日(祝)雨天決行（集合）東花園駅10時～10時30分（コース）東花園駅―恩智川治水緑地（池島・福万寺遊歩）―鍵塚・心合寺山古墳―水呑地蔵―服部川駅（約8㌔＊係員は同行しません）参加自由・無料（入場料別途）（問合せ）近鉄八戸ノ里駅06（6788）0866

▽歴史街道あるく道第16回「謎の石像物から大和三山へ」　12月10日(日)雨天延期（延期の場合12月16日(日)）（集合）飛鳥駅9時40分～10時10分（コース）飛鳥駅―岩屋山古墳―亀石―坂―益田岩船―欽明山―香久山―橿原宮跡―耳成山―畝傍駅（約14㌔）参加自由・無料（問合せ）営業推進局大阪ハイキング係06（6775）3566

京阪

▽朝日・五私鉄リレーウォーク第5回「平等院から醍醐山寺巡礼へ」　11月19日(日)雨天中止（中止の場合は11月23日(祝)に延期）（集合）宇治公園中の島（午前9時30分～11時（京阪宇治駅から約10分）（コース）京阪宇治駅―中の島（受付）―橋姫―平等院―大ヶ瀬吊橋―大ヶ瀬森林公園―赤井川―（東海自然歩道）―大吉山―宇治神社―醍醐寺ミュージアム―観音寺古墳―三宝寺―東西―醍醐―上り口―醍醐寺―醍醐駅（約12㌔）参加自由・無料、京阪電鉄ハイキング係06（6947）3702

▽スポニチファミリーハイク「真如堂・赤山禅院」　12月3日(日)雨天中止（集合）百万遍知恩寺9時～10時（コース）出町柳駅―百万遍知恩寺（受付）―吉田山―真如堂（哲学の道）―銀閣寺―鹿苑寺―北白川仕矢町―石川丈山の墓―金福寺前―詩仙堂前―圓光寺前―宝森神社―赤山禅院―修学院離宮前―赤山禅院―叡電八瀬遊園駅（約11・5㌔）参加自由・無料、京阪電鉄ハイキング係06（6947）3702

江若交通

▽こうじゃくMtsハイキング「青葉ナノ原生林散策」　11月8日(祝)雨天中止（集合）JR安曇川駅9時（コース）安曇川駅（バス）若狭路出合―ナベクボ峠―三国岳―長須賀分岐―長須賀―生杉（バス）安曇川駅（約5㌔電車）参加費290円（バス代含む）電話申込制（1ヶ月前より受付）＊75歳以上の単独参加不可（申込先）江若交通本社077（573）2701

叡山電鉄

▽北山ウィークデーハイキング「二ノ瀬ユリ・夜泣峠」　11月1日(水)雨天中止（集合）貴船口駅9時30分（コース）貴船口駅―貴船神社―奥宮―奥宮―鞍馬―薬谷峠―夜泣分岐―夜泣峠―二ノ瀬駅（約11㌔）参加自由・無料、叡山電鉄鉄道部075（702）8111

▽北山ウィークデーハイキング「アンガ谷・扶桑橋」　11月29日(水)雨天中止（集合）貴船口駅9時30分（コース）貴船口駅―貴船神社―奥宮―奥宮―鞍馬―アンガ谷―三花峠―吉井別れ―扶桑橋―鞍馬駅（約11㌔）参加自由・無料、叡山電鉄鉄道部075（702）8111

▽叡電ハイク「鞍馬・天ヶ岳」12月10日(日)雨天中止〈集合〉鞍馬駅9時30分～10時〈コース〉鞍馬駅―奥千丈―三角点―三又岳―天ヶ岳―百井峠―扶桑橋―鞍馬駅（約12㌔）参加自由・無料、叡山電鉄鉄道部075（702）6111

南海

▽金剛生駒紀泉レインボーアタック2000第6回「岩湧山から滝畑ダムへ」 11月5日(日)雨天中止（当日午前11時か12月10日(日)）〈集合〉天見駅9時～10時〈コース〉天見駅―岩湧寺―岩湧山―滝畑ダム（バス）南海河内長野駅（約13㌔）参加自由・無料（バス代別途）、南海テレホンセンター06（6643）1005

▽鷲峯ヘルシーハイク第5回「鉢巻山ハイキング」 11月11日(日)雨天中止〈集合〉加太駅10時30分〈コース〉加太駅―鉢巻山―淡嶋神社―加太駅（約7㌔）参加自由・無料、南海テレホンセンター06（6643）1005

▽南海・近鉄・朝日合同企画、金剛生駒紀泉レインボーアタック2000第7回「金剛山から葛城山へ」 11月23日(日)雨天中止（予備日12月3日(日)か12月10日(日)）〈集合〉南海河内長野駅8時15分～9時15分〈コース〉河内長野駅（バス）金剛登山口（受付）―のろし台峠―金剛山（転法輪寺・葛木神社）―水越峠―葛城山頂（ロープウェイ・バス）―近鉄掛所駅（約12㌔）参加自由・無料（バス代、ロープウェイ代別途）、南海テレホンセンター06（6643）1066

神戸電鉄

▽神鉄ハイキング「ジョイフル有馬紅葉狩ハイク」 11月12日(日)雨天中止（集合）岱が滝公園9時30分（有馬温泉駅南約1㌔）〈コース〉有馬温泉駅―岱が滝公園―湯槽谷峠―斎匠屋畑茶板―極楽茶屋―紅葉谷―有馬温泉駅（約9㌔）一般同 参加自由・無料、神鉄観光事業部078（521）0321

▽神鉄ハイキング「鴨池と国宝法華山一乗寺ハイク」 11月23日(祝)雨天中止〈集合〉粟生駅9時20分〈コース〉粟生駅―医彩町―鴨池―七ツ池―一乗寺―北条鉄道法華口駅（約15㌔）健脚向 参加自由・無料（入山料別途）、神鉄観光事業部078（521）0321

▽神鉄ハイキング「三田水源地と大岩岳ハイク」 12月10日(日)雨天中止（集合）神鉄藍那駅16時〈コース〉神鉄藍那駅―月見坂―牛野橋―三田水源地―大岩岳―JR道場駅（約12㌔）一般同 参加自由・無料、神鉄観光事業部078（521）0321

山陽電車

▽山陽ハイキング「馬坂峠から八家地蔵を訪ねる」 11月5日(日)雨天中止（集合）大塩駅前大塩公園10時〈コース〉大塩公園―馬坂峠―牛谷―北脇―的形―八家地蔵―小狭谷遊歩道―八家駅（約10㌔）一般同 参加自由・無料、須磨浦遊園ハイキング係078（731）2520

▽山陽ハイキング「のじぎく栽培地見学・なぎさ公園へ」 11月19日(日)雨天中止（集合）網干駅下車 揖保川河川敷右岸10時〈コース〉揖保川河川敷右岸―日本航空のじぎく栽培地―なぎさ公園―ダイセル異人館―大覚寺―網干駅（約9㌔家族同）参加自由・無料、須磨浦遊園ハイキング係078（731）2520

▽山陽ハイキング「高取山から菊水山ハイク」 12月3日(日)雨天中止（集合）西代駅前山陽電車本社前10時〈コース〉西代駅―高取山―丸山―鵯越―菊水山―地蔵谷―鵯台（約10㌔健脚向）参加自由・無料、須磨浦遊園ハイキング係078（731）2520

三岐鉄道

▽鈴鹿の山を歩こう「秋涼の御池岳」 11月5日(日)雨天中止（集合）近鉄富田駅8時〈コース〉富田駅（電車）西藤原駅（バス）御池岳登山口―（コグルミ谷）―カタクリ峠―御池岳（丸山）―鈴北岳―被岩峠（バス）西藤原駅（約11㌔一般向）参加費200円（交通費別途）予約申込制（定員200名）、三岐鉄道運輸課観光係059（64）2143

せせらぎ

類宇・小林雄璃三

醍醐山へよく出かける。早朝、登山口の醍醐寺で、僧が読経する姿に出会う。

トレーニングとして急ぎ足で登ることもあり、ゆっくりと風や谷川の音を聞きながら登る日もある。

今年5月、山頂の開山堂の修理が完成し、奥の院へ行けるようになったので、本宮ノ峰を登り、回峰道を初めて歩くことができた。静かな山道である。以来すっかり気に入って何度か通っている。

帰途に三宝寺に立ち寄った5月。おりしも石楠花が満開で、山の斜面が赤く見える程だった。

4月には葛城山に寄り道した帰路、登山道はツツジの花のトンネルだった。おまけに小鳥の巣を拾った。

初めて行く山はとても感動的であるが、何度も通う山も心が落ち着くものである。

（栗津典子）

ポンポン山北西一帯が最近「大阪野鳥森林公園」として整備され、その中にある東尾根ルート・西尾根ルートが、大変歩きやすくなった。前者は、森林案内所（中畑回転場バス停から30～40分）を拠点にすれば分かりやすいので、後者の西尾根ルートを紹介しておきたい。

出灰バス停から出灰川沿いの車道を進む。せせらぎの里を、次に一休禅師史跡経由の登山口20～30分を通り過ぎ、桜木橋を渡る（車道は左岸沿いに変わる）。

しばらく行くと、右側に車道に沿って登る細い踏み跡があり、登山口30～40分である。この道はすぐに車道の右側にある電柱の右を通っている。登山口のすぐ先の車道の左側には、杉の木が二、三十本並んでいる（6月6日までは道標やテープなどは見当たらない）。登山道はしばらく車道に沿っているが、すぐに沢沿いを右上へ車道を離れていく。道なりに右へ左へと方向を変えて登っていくと、右側に立派な道標40～55分が立っている。ここが森林公園の入口である（その先は、森林案内所に通じる）。

ここからは、道標などが完備し、道もしっかりしている。「つつじの丘」45～60分や「りょうぶの丘」75～105分と称する休憩運地があり、案内板・ベンチなどが設置されている。「りょうぶの丘」からポンポン山の山頂まで30分程度である。

逆コースをとる場合の留意点に触れておこう。

○新ハイ関西サービスチェーン

名峰・二枚登山　小白森―大白森―中子・諸頭への縦走基地　1名でも最寄り駅送迎可（なぎ平駅）　霧天温泉と内湯

福島・二岐温泉
日観連　大和館
〒562-0621
箕面市箕面桜天栄村二岐温泉
電話 0272-34-3331
F 0272-34-2755

草上登山・富士五湖
東海道自然歩道
（石取山・ハリモミ林林）
三医山の麓
ペンション　コットンテール
〒401-0502
山梨県南都留郡山中湖村平野
電話 0555-65-8515

大阪鉄道運輸中板から谷沿板分岐点
観光・宴会店あり
JR中央線中山駅下車タクシー10分
バス20分登山口下車徒歩2時間
山小屋　福ちゃん荘
〒484-0022
山梨県坂山市上萩原2232
電話（自宅）2133-35-4639
（山小屋）0280-84-7921

民宿、平ケ浦海岸と釣りの山小屋
桂後二日只見国立公園内
清四郎小屋
はんものの手打そばと魚匠は
樹海
〒946-0000　新潟県北魚沼郡湯之谷村鷹の巣（奥只見山）
電話 0960-25-8[illegible]-0028
期別券（1月～4月）は
0257-91-2[illegible]-[illegible]226

山頂から、北へ急坂をくだり、すぐ下のT字路を左にとる。その先で、左にくだる道（一休禅師史跡経由の登山道で出灰への表示がある）と右に少し登る道に分かれるが、後者をとる。さらにその先で道が二手に分かれるが、左への道をとり尾根を外さないように進む（右手の道もしばらくは尾根道だが、最後は、右側の谷にくだってしまう）。「りょうぶの丘」はそのすぐ先にある。

（吉峰孝次）

本年6月7日、会員の森川信之さんが61歳で逝去されました。

昨年8月末、山行の予約中込みのキャンセルで電話をいただいたとき、ふだんより少し早口ではありましたが、自ら癌であることを告げられ、詳しく経過を説明されたのでした。私は「癌」という語感にオロオロするばかりで、返す言葉さえ失ったままでしたが、しばらく治療に専念して、また山行に参加できるよう頑張る、という森川さんの言葉をそのまま素直に受け止めていたのでした。

今年に入ってからもそんな思いは変わらなかったのですが、3月初旬、他の会員の方から、決して楽観はできない、との情報を得たとき、私は少なからずショックを受けました。

痛みに苦しむことは最期までありませんでした、との奥様の話に、わずかな救いを見い出すのですが、まだまだやり残したことがいっぱいあっただろうと考えると、胸のつぶれる思いです。

私が森川さんと初めて出会ったのは1996年の夏、新ハイ例会で私がリーダーを務めた後立山連峰縦走山行の時でした。白馬駅に降りて、最初に森川さんとあいさつを交わした光景を、今でも鮮やかに思い起こします。

花好きというお人柄もあってか、その時から、森川さんは自然観察山行の常連になり、迷いながらリーダーを続ける私を常に温かく見守り、「頑張ってください。応援してますよ」と励まし続けてくれたのでした。

私が数年前から山行の際にはいつも使用しているモンテベルの財布は、実は、思いもかけず誕生日プレゼントとして森川さんからいただいたものです。贈る側も贈られる側も何だか気恥ずかしいやりとりでしたが、森川さんの細やかな心遣いが胸に滲みる思い出です。今、この財布は、森川さんの唯一の形見となってしまいました。

（鷲見守康）

別に現状から逃避したくなったわけではないが、無性に心が乾ききったようになり、自然のなかに身を浸き、「心の故里」を求めたくなる時がある。

読みかけの本や、自炊用具とカメラをザックに詰め込み、だれもいない電気もない山里に行きたい。ここ奥吉野前鬼の里がそんな私を迎えてくれた。

早春の寒い夜中、布団に潜り込み、朗詠とヘッドランプの灯りでの読書に疲れ、窓に目を向けると、そこには透き通るような半月が前鬼の里を照らし、私を屋外へと誘い出す。

月光に浮かぶ白く荒化粧した「行者岳」に見惚れ、カメラのシャッターを押すが、冷え込み

汗をたっぷり流せる温泉と笹ケ峰牛のシャブシャブ日本海の鮮魚と山の幸
ハイカーの宿
ナガサキロッジ
〒949-2100 新潟県中頸城郡妙高高原町池の平温泉
電 0255-86-2261

高山の花、高原の花
妙高山と火打山
百名山を二つ登れる山小屋
黒沢池ヒュッテ
〒949-2100
新潟県中頸城郡妙高高原町池の平温泉 ナガサキロッジ
電 0255-86-2261

「伊豆の踊り子」の情緒 レトロな宿
眼下に河津川の渓流
湯ヶ野温泉 湯ヶ野荘
バス運行時間外は送迎いたします。
天城峠・七滝・河津駅等
〒413-0507
静岡県賀茂郡河津町湯ヶ野93
電 0558-35-7225

伏流水入浴も歓迎
10名以上マイクロバスで送迎
箱根仙石原温泉
福島館
〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原139
電 0460-4-6041

の厳しさのためか切れない。いや、この静寂は現代文明の雑音を寄せつけず、拒絶さえする。

1300年もの昔からこのお堂の前で、いく人の修験者や旅人が祈りひざまづいたろう、その姿が目の前に現れる。いつしか私も彼等の後に並び、日々の行に懺悔し、手を合せ寛容している。

この山里は山や森に包まれ、風の音・水の音、そして木の音までもが声となり、訪れる人々に癒しと生きる喜びを与えてくれる。

古木や苔むした石垣の屋敷跡は、獣道となり、埋もれた石仏にも出会え、先人達の祈りの世界が想ばれる。

陽が昇り始めると、厳寒な行事も淡雪と消えてしまう。さあ、今日は釈迦ヶ岳をめざす。今宵は小仲坊で五鬼助夫妻と愛嬢の話をさかなに"一杯"といこう。

（佐々木治郎）

梅雨明けを待って、頭城山系の天狗原山・金山へ登った。

前夜は村営雨飾駐車場で車泊。翌朝、林道笹ヶ峰小谷線を歩く。ゲートが開放されていて登山口には7台も駐車中。ヤマケイにお花畑のある山として掲載されていたとかで、多くの人で賑わっていた。

ブナ立尾根の急登もすこしも疲れない。ブナの巨木群に心が踊り、興奮すら覚える感動のすばらしい原生林。

雪渓も豊富に残り、点在する池塘の廻りには高山植物が生き生きとしていた。入山者が少なく手つかずの自然がそのまま残っている貴重な山だった。

翌週、南アルプス北岳へ最老渡から往復。針葉樹林帯の急登も南アルプスらしく、樹海のなかをひたすら歩く。三吉平からお花畑が現れる。静寂平では北端の水場で冷たくておいしい水を飲み、午後降雨のなかを元気にくだった。

（繁津浩二）

7月7日から9日にかけて、吉野山金峯山寺が催す蓮華奉献入峯修行に参加した。

8日の午前2時に起床、朝食後に金峯山寺蔵王堂へ参拝し、午前3時過ぎに、大峯山山上ヶ岳へ行列を整え出発した。

10時頃余りで山上ヶ岳へ到着。西ノ覗などの裏行場、平等岩などの裏行場で行をし、柴灯護摩に参列した。

蓮華奉献入峯は、役行者誕生地である大和宮田市奥田の捨篠池で蓮（はす）の花を採り、僧侶や行者がこれを奉じて、大峯山寺（山上）や金峯山寺（山下）に献ずる蓮華会の行事の一つで、吉野の風物詩ともなっている蛙飛び行事もこの蓮華会の一環である。

今年は、役行者の没後千三百年にあたることから、役行者ルネッサンスとして、いろいろな行事が催されている。この入峯修行も大々的に修行者を公募したもので、近鉄の冊子「あるく、みる、まなぶ」を見て応募した。

思えば、遥年とはよく言ったもので、3月下旬に血尿を出し、医者から山行を止められ、呑のベストシーズンを惜に狙ってしまった。

いくつかの山行はドタンバキャンセルしてしまい、リーダーには迷惑をかけた。

4月下旬にドクターストップ

四季織りなす乗鞍高原のハイク
上高地・乗鞍岳へ 冬はスキー
けやき山荘
温泉旅館
〒390-1500
長野県南安曇郡安曇村乗鞍高原
電 0263-93-2555

さわやか信州
蔵王風呂 山吹の湯
湯田中温泉
日野屋旅館
〒381-0400 長野県下高井郡山ノ内町湯田中渋温泉郷
電 0269-33-3578

標高2000m 雲上の温泉
湯の丸高原自然休養林
ハイキングにXCスキー
高峰温泉
〒384-0300
長野県小諸市高峰高原
電 0267-25-2000

ハイキングに！ スキーに！
お買高原 **石の湯ロッジ**
バス 熊の湯駅平林下車
電 0269-34-2421
東京本社・東京都新宿区新宿3-20-5（新光第2ビル）
㈱スポーツサービス
電 03-3341-0211

が解け、ゴールデンウイークには、念願の祖母・傾・霧島に登ることができた。

夏山に向けての体力チェックの意味もあり、厄除けも兼ねて、今回の入峯修行にチャレンジした。

おかげで7月22日には北アルプスの槍ヶ岳にも登り、何とか回復が確信できた。

11月12日には、小出リーダーのお声がかりで、湖東の繖山から安土城跡へのサブリーダーをする予定である。

山々の紅葉も盛りの頃だと思います。皆さんと楽しい一日が過ごせたらと思っています。ぜひご参加ください。

（杉本　高）

7月9日、菅笠寺山（甲西富士）に登りました。麓の西蓮寺には、様々な草木が植えられ、訪れた時は、桔梗が咲いていました。寺の方の話によると、8月には鬱草の花が見頃になるそうです。また、山の正式名は竜王山で、地元では寺山とも呼んでいるとのこと。三角点より少し北にくだった岩の上から、琵琶湖が見えることも教えてもらいました。三角点そばのプレートには「桜山」、寺の古絵図には「巨ヶ嶽」の山名も記されていました。

8月5日には、十二坊と水口町の古城山に行ってきました。十二坊の山頂は展望広大で、長い鈴鹿山脈も端から端までそのほとんどが眺められます。冬に登れば、雪化粧した鈴鹿の峰が美しいだろうと思いました。山頂の北5分の所に展望台があり、琵琶湖や比叡山も望めました。尚、十二坊林道の途中から西へくだる車道は、通り抜け不可となっていました。

水口の古城山（大岡山）は、木陰の道で手軽に登れ、説明板があって歴史の勉強にもなりました。

（鈴木伸人）

日本一高い山の富士山に登ったあと、日本一低い山・天保山に登った。

富士山は9年前に登頂を試みたことがある。その時は登山口の駐車場に着くと、大型バスから降りた人がそのまま登山道に入り、たいへん混雑していた。花もない鳥も啼かない瓦礫の斜面をもくもくと歩き、八合目小屋の上に出たとき、突然頭上で轟音がし、ブルドーザーがおりてくる。ばかばかしくなり、そこから引き返してきた。

天保山は岡山や福知山と同じように地名だとばかり思っていたが、それがれっきとした山であることを知ったのがやはり9年前。それ以来この二つの山が気になる山になった。

梅雨明け前の7月、晴れ間を見計らって再び富士山へ出かけた。七合目までは愛鷹山がうすぼんやりと見えていたが、頂上では流れる雲のなか何も見えず、風も冷たい。登山具を着込んで寒さに絶えていた。

翌日、天保山公園の前に立つと公園の中に小高く盛り上がる山があり、駆け上がる。「ザンネンデシタ」ここは天保山の山頂ではありません。山頂は右の階段を降りて……」と書いた木札がある。その矢印の方へくだり防潮堤の上を歩き、三角点標石の前でエイヤッと飛びおりると登頂に成功した。

さて昼食はどこでとあたりを見れば徒歩3分の所にレストランがあり、水場や便所も完備。山頂近辺がこれほど設備の整った山は他にはないのでは。天保年間に付近の土をかき集めて山を作ったというのだから、昔の人は偉い。

（山形　明）

7月22日、三年越しの計画であった白山へ登ってきた。

昨年から来年までは室堂の食堂が改築工事中で、入山者は少ないかと思ってたが、意外に多く室堂で泊まれなかった。

今年は雪が多かったこともあって、登山道が雪渓におおわれ歩くのも危険。テント場の近くまでも雪渓が残り、テントの数も制限されていた。そのためテントを持参したが、日帰りせざるを得なかった。

入山は岐阜県側からの平瀬道をとった。2000㍍以上から高山植物も増え、全部で130種余の花が咲いていた。クロユリの多さとハクサンコザクラの群生が見事だった。初めて見る花も10種以上あった。

往復12時間の歩行と標高差1500㍍近い歩きにとても疲れたが、下山後の温泉はそれを癒してくれた。

（山田明男）

8月上旬、有名な北アルプスの白馬岳へ登った。

白馬尻から大雪渓経由で登頂して白馬山荘に投宿。翌早朝、再登頂してすばらしい晴天の下に360度の展望を楽しむことができた。

これについては、鷲見守康氏の紀行文（本誌23号）が大変参考になった。それを片手に、よく知っていそうな登山者をつかまえてはいろいろ教えてもらったからである。また、信州側へ垂直に切れ落ちた断崖をへっぴり腰で覗き込み、ゆるやかな傾斜の黒部側を眺めて、非対称山稜なる言葉に実感を持ったりもした。

雪渓をアイゼン（6本爪）装着で登ったのも初体験である。3の年前、立山連峰を縦走中、五色ヶ原手前の雪渓を横断していた時に足を滑らして転落し、途中、岩に引っかかって危うく命拾いをしたことを思いだした。終戦後の甚しかった当時はズック靴だったのである。

めずらしくて貴重な体験は、松沢真逸氏彫刻近くの雲の上に見たブロッケン現象である。そのなかに手を振っている自分を確認でき、狂喜してカメラに収めた。

帰宅後、新田次郎の直木賞受賞作『強力伝』を、実感をもって再読することができたのも大きな収穫だった。

それにしても厳しい登山だった。一日で標高差1400㍍を登ったのは20歳台の日本三名山（白山・立山・富士山）以来ではなかろうか。下山は白馬大池経由だが、標高差1100㍍で膝がガクガクとなる始末だった。

槍・穂高よりキツイといっていた人もいたが、それを聞くとまだ山登りを続けられそうな気もする。その自信を得たことが最大の成果だったかも知れない。

（東谷　宏）

8月21日の槍岳山荘はウィークデーというのに満員だ。個室は6人用で一万一千円。乗泊り用室を覗いたら90名まで数えられる所に6人だけ。早速アルコー

塩の道　千国街道
「百八十七体一観音原」
ホテル
白馬ブランシェ
〒399−9300
長野県北安曇郡白馬村いわたけ
電　0261−72−4452

八ヶ岳南北縦走の中心地
59年秋新館増築完成全館個室
木の香匂う新浴室温泉木造家
オーレン小屋
1泊2食付き　6000円
4月末〜11月末開設
〒391−0213
茅野市北横谷
電　0266−72−2220　小平勇次
0266−72−1279

北八ヶ岳の登山基地　冬はスキー
JR茅野駅・北八ヶ岳登山口まで送迎します
蓼科高原
プチホテル　カナール
〒391−0301
茅野市北山蓼科高原笹ノ平55
13の1
電　0266−67−2258

日本百名山の宿
信州戸隠山
森の宿めるへん
高妻山・黒姫山登山口まで送迎
クロカン・コースご案内
〒381−4100
長野市戸隠豊岡水ヶ原
電　026−254−2081

日本唯一の女人禁制の山「大峯山（八ヶ岳）」の登山口
温泉・名水の里
旅館　紀の国屋荘八
1泊2食付　7,000円から
〒638−0431
奈良県吉野郡大川村洞川
電　07476−4−0309

九州の最高峰・日本百名山
宮之浦岳に一番近い宿
屋久島安房登山口
屋久島グリーンホテル
〒891−4311
鹿児島県熊毛郡屋久町安房
電　09974−6−3021

御在所登山に
愛知川渓谷沢歩きに
山好き仲間の集う宿
鈴鹿渓谷
山小屋　朝明荘屋
〒510−1251
三重県三重郡菰野町千草
電　05593−9−1789

③サービスチェーンを利用するときは、電話か往復ハガキで必ず予約をして下さい。
④宴会のときに料金を確認して下さい。

ルだけ持って、寝に行った。
いつも思うのだが、上高地に汗だくでおりてきても上等なシャワールームが見つからず、水道で試いて着替えできたが、今回バスターミナルにある美化センター内に、男女別シャワーが二台ずつあるのが判った。2分30秒で百円。脱衣所は三坪ほどで、裸で待っていれば、1人3分として男10人でも15分で終わる勘定になる。女性も同じ。
もうひとつ、新築中のビジターセンターの中に流刺不要でもよいから、シャワールームをつくってもらいたい。（日野節雄）

山行短歌

6月5日　丹波小金ヶ岳
北壁の岩場に立ち夏空呼べど
歌声とだえ渇きアルプス
6月10日　六甲青谷道～摩耶山
樹星台やがて巨岩れて白鳥座の
羽根と化したる森の精霊
6月14日　北摂河武山
森眠る虎木いっせいにかがやき
小鳥さえずり復活の日に
6月18日　紀泉根尾山～槙山
蔵岩のゲレンデ越え出会えたに
ささユリ愛い顔は何がため
6月22日　比良駒村～武奈ヶ岳
今日限りの指揮に列して山行けば
比良は悲しむような雨空
7月6日　六甲青谷道～摩耶山
星のない七夕の夜ひそやかに
銀河なぞりて夏ツバキひらく
7月20日　若狭青葉山
未知の海原へ蝶々飛び去れば
ナデシコなぐさめ風の接吻
7月26日　北アルプス西穂高岳
ピラミッド跨ぐと永遠が見えた
腕繋ぎ合って歓喜のウェーブ
7月30日　敦賀岩籠山
インディアン平原風に吹かれて
風の矢に射抜かれて燃える夏
（木村太郎）

山行短歌

7月5日　鍋尻山・高望山
いぼ水の木陰に清く白糸草
きわやかな風さわやかに咲き
夏草にひときわ目立つ白い花
トリアシショウマそよ風にゆれ
7月9日　元越谷
渓谷は岩と水流調和して
ナメトロ滝を友と楽しむ
絶景の大岩の上腰すえて
涼風の中プシュッと缶切る
7月23日　須谷川
谷深く岩ノ洞門ひんやりと
シャワーを浴びて薄暮を行く
須谷川源流の山ホトトギス
ヒグラシ鳴いてウグイスの声
7月30日　イハイガ岳・向山
登り谷鞍頭のコル鹿の群れ
七、八頭がガレを跳び行く
8月6日　元越谷左俣
大滝の白い飛沫を仰ぎ見て
その横の岩壁の行列
ナメ滝のシャワーを浴びてよじ登る　この爽快さ沢の醍醐味
8月20日　前谷谷・赤坂谷
渓谷の岩壁に咲く岩煙草
可憐紅色深い谷間に
仙香谷渓を泳いで流登り
赤坂のナメ焚火囲んで
（岩野　明）

疲れないことをすると疲れる。ここ一年半ほど、集中的に「はりま」を歩いてきた。その一進を文章にし写真を付けて、この秋、世に問うことになった。
播州井で、平坦がモットーに仕上げるつもりが、時々背伸びをし脱線する。
今回、ハイキングという言葉をよく使った。ハイキングと山登りの定義はあるだろうが、線引きが難しいので「ハイキング」をタイトルに使っている。このように日頃何気なく口にする言葉も慎重に使うはめになった。
広範すぎて、兵庫県のエキスパートは誰るとして、せめて地元「はりま」のエキスパートになりたいと思い日頃から勤んでいる。なのに、今回の作業で、知らないことがいかに多いか改めて知らされた。
『はりまハイキング』完結の始末記は、新たな挑戦への発表である。（須磨隔　輝）

登山地情報
台高の明神岳へ登る大又林道は、三度小屋谷出合から先が工事で通行止め。期間は来年2月末までの予定です。
大又から釜岳経由か伊勢辻山経由、あるいは高見峠から主稜線を行くことが考えられます。
少々高くつきますが、秋道麦谷線を二階岳の登山口までタクシー（近鉄榛原駅から小型4人のりで約9000円）で行き、二階岳や木ノ実ヤ塚を通って、釜岳経由で行くのがいちばん楽だと思います。（村田智俊）

山行計画
（11・12月）
新ハイキングクラブ阪西

このページの山行計画には、「会員に限る」と特記してあるほかは会員外の方でも参加できます。一人ずつ往復ハガキに記入例によって必ず出発の7日前までに到着するように申込み先に申し込んでください。電話・FAXでの申し込みはお断りします。「雨用」のほかに参加名簿代その他の資料代実費をいただくことがあります。
山行申し込み後参加できなくなった場合はすぐ係に連絡してください。
体調の悪い方、幼児と飛び入りはお断りします。
例会の参加者全員に傷害保険がかけられています。出発点呼の際、係に保険料日額50円と救援対策費日額50円（宿泊日帰りの場合は2日になり200円）を支出していただきます。
傷害保険特約内容は次の通りです。（安田火災海上保険会社と契約）

死亡・後遺障害保険金額	1000万円
入院保険金　日額	5000円
通院保険金　日額	2500円

保険の対象は集合時から解散時まで。事故があった場合は解散までに係に申し出てください。この保険に該当しないものは次の通りです。①ピッケル・6本爪以上のアイゼン・ザイル・ハンマー・ワカンを持参することを明記した山行　②スキー使用の山行　③沢・岩・氷雪登はんを目的とした山行　④宿泊場所内の事故　⑤病死の場合（詳細は係まで）

（記入例）
（往復ハガキを使用）

山行き申込み書
山行名（正確に記入すること）
期日
住所 〒
氏名
会員番号
（会員でない方は会員外と記入）
電話番号
生年月日
緊急時の連絡先　TEL
（山行中の連絡先を記入）

返信ハガキの宛名欄にご自分の住所氏名と「様」を記入してください。

御池岳の池を巡る自然探査山行12
（中級向き）

期日　11月3日(祝)　日帰り
集合　JR関ヶ原駅8時20分／三菱鉄道西野原駅8時45分
コース　各集合駅（出）コグルミ谷登山口—長命水—カタクリ峠—幻滝—丸山—ボタンブチ—宇助の池—風池—道池—カタクリ峠—長命水—コグルミ谷（解散）
費用　交通費各自、車代（関ヶ原駅1000円・西野原駅500円）
準備　2万5千4徳立
係　◎山田明男　○高原芳彦
申込み　〒503-0535　海津郡南濃町松山634の13　山田明男まで
＊集合駅を明記ください
＊マイカーの方はその旨記載ください
＊定員30名
御池岳山頂からボタンブチへ向かい、そこからの紅葉が楽しみましょう。雨天中止
問合先・高話山（一般向き）

山行例会の実施について
山行例会は保険を掛けたり、登山届けを提出しますので、実施日の7日前までに上記記入例の通り、必ず往復ハガキで申し込んでください。人数により前もって、バスなどをチャーターする必要もあります。また山ではいかなる事態が発生するかも。緊急連絡先など、記載すべき事項はもれなくご記入ください。
申し込みの返信案内は細目が決まり次第、山行日の10日前頃にします。早くから申し込まれた方はそれまでお待ちください。
定員のある計画は先着順に受け付けます。
記號のグレードは、常日頃山歩きに親しんでおられることを前提にしています。
（初心者向）やさしいコース
（初級向）どなたでも歩けます
（一般向）ハイキングの標準コース
（中級向）かなり経験者のコース
（やや健脚向）・（健脚向）は、危険な所があり、キツイ登りや、くだりが長く続くコースと、ご理解ください。

期　日　11月3日(祝)　日帰り
集　合　JR三ノ宮駅東急インホテル前8時00分山発
コース　三ノ宮駅（バス）登山口—湯槽谷—高越山—船窪ツツジ園（バス）ふいご温泉（入浴・バス）三ノ宮駅（解散18時30分頃）
費　用　約6000円（バス代）
地　図　2万5千＝船町
係　◎井上　保
申込み　〒674—0037　明石市大久保町谷八3の1・20の104　井上　保まで
＊定員27名（会員優先）
標高差1040m、3時間の登りがあります。役行者の開基で徳島県民自慢の山です。雨天決行

鈴鹿・鎌ヶ岳から雲母峰（中級向き）
期　日　11月5日(日)　日帰り
集　合　近鉄名古屋駅北口6時10分／近鉄四日市駅湯の山線ホーム8時50分
コース　四日市駅（電車）湯の山温泉駅（タクシー）武平峠—鎌ヶ岳—岳峠—白ハゲ—雲母峰—釜谷不動—湯の山温泉駅（解散16時頃）
費　用　約2700円（名古屋から）
地　図　昭文社＝「御在所・鎌ヶ岳」
係　◎小出良泰
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大峰10の10　新ハイキング関西まで
＊集合駅を明記ください
鈴鹿の「槍」と呼われる鎌峰。山頂直下は鎖場もあり、登っていて楽しくなります。雲母峰は鎌ヶ岳の前衛峰です。雨天中止

近畿百名山に登る（第21回）
三重・局ヶ岳（一般向き）
期　日　11月12日(日)　日帰り
集　合　近鉄大和八木駅8時00分
コース　大和八木駅（バス）局ヶ岳神社（バス）新登山口—旧小峠—局ヶ岳—岳神社（バス）大和八木駅（解散17時頃）
費　用　約5500円（貸切バス代）
地　図　2万5千＝宮岡
係　◎村田智俊
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大峰10の10　村田智俊まで
＊定員50名
山頂から伊勢湾を望む遠望はすばらしい。新登山道から登ります。小雨決行

鈴鹿を歩く105
雨乞岳（健脚向き）
期　日　11月12日(日)　日帰り
集　合　藤切谷林道入口8時30分
コース　藤切谷林道—奥ノ畑谷—奥ノ畑峠—南雨乞岳—雨乞岳—西尾根—炭焼きコバ—奥ノ畑谷—旧林道入口（解散）
費　用　交通費各自
地　図　昭文社＝「御在所・鎌ヶ岳」
係　◎宮野　明
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大峰10の10　新ハイキング関西まで
＊マイカー山行
奥ノ畑谷の紅葉を楽しみ、南雨乞岳から雨乞岳へ。西尾根をくだります（24号46ページ参照）。雨天中止

湖東・繖山から安土城址
期　日　11月12日(日)　日帰り
集　合　JR名古屋駅中央改札口7時30分／JR能登川駅9時10分
コース　能登川駅—箕子山公園—八王子山—瓜生山—繖山—観音正寺—観音寺城址—桑実寺—北腰越—安土城址—安土駅（解散15時頃）
費　用　約3500円（名古屋から）
地　図　2万5千＝能登川・八日市
係　◎小出良谷　○杉本　高
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大峰10の10　新ハイキング関西まで
＊集合駅を明記ください
能登川から近世武将の夢想と言われる安土城址まで雑木林のなかの開けた尾根道を歩きます。雨天中止

鈴鹿百山11
草木・孫太郎・藤原岳（健脚向き）
期　日　11月12日(日)　日帰り
集　合　JR関ヶ原駅8時20分／三岐鉄道伊勢治田駅8時00分
コース　各集合駅（車）青川休み　コバ—滝ヶ谷右手尾根—草木—孫太郎—藤原岳展望台—治田峠—青川休み　コバ（解散17時頃）
費　用　交通費各自、車代（関ヶ原駅1000円、西野尻駅500円）
地　図　2万5千＝篠立
係　◎山田周男　○高橋芳彦
申込み　〒503—0555　海津郡南濃町松山624の19　山田周男まで
＊集合駅を明記ください
＊マイカーの方はその旨記載ください
＊定員15名（健脚コングコース、足に自信のある方）
青川渓谷の紅葉を楽しみましょう。登頂時間により、後半をキャンセルして西藤原駅へくだることもあり。雨天中止

平日ふれあいハイク23
北山・廣村八丁から品谷山（一般向き）
期　日　11月14日(水)　日帰り
集　合　京阪出町柳駅発都バスターミナル7時40分（50分発に乗車）
コース　出町柳駅（バス）倉原—ダンノ峠—四明五郎峠—八丁—スモモ谷—品谷山—ダンノ峠—高峠（バス）出町柳駅（解散19時15分頃）
費　用　約2100円（出町柳駅から）
地　図　昭文社＝「京都北山2」
係　◎川上久雄　○寺井恒夫
申込み　〒610—0121　城陽市寺田大峰10の10　新ハイキング関西まで
廣村八丁から品谷山に登り、見晴らしの良い尾根をダンノ峠にくだります。9月に雨天中止のため再行します。雨天中止

平日水曜ハイク24
北摂・大峰山から中山（一般向き）
期　日　11月15日(水)　日帰り
集　合　JR宝塚線武田尾駅8時00分（大阪駅7時15分発）
コース　武田尾駅—廣線跡—桜の園—大峰山—十万辻—長尾—中山—中山寺—阪急中山寺駅（解散）
費　用　約1000円（大阪から）
地　図　昭文社＝「北摂の山々（両面）」
係　◎鈴浅次男　○宮木一雄
申込み　〒569—1133　高槻市川西町1の38の20　鈴浅次男まで
変化に富んだ低山の楽しみ。廣線跡の通行にはトンネルあり。灯火必携。雨天決行

摂磨・東山と千町ヶ峰（一般向き）
期　日　11月18日(土)～19日(日)　1泊2日
集　合　(18日)　JR姫路駅南口9時30分（16日）姫路駅（車）フォレストステーション波賀—東山往復（車）千町（19日）千町—こぶしの里—世坪—千町ヶ峰—作禁道入口—千町—こぶしの里（車）姫路駅（解散18時頃）
＊19日のみのマイカー参加可能、参加費500円（千町集落へ9時30分までに集合、中国車山時／ンターから約1時間）
装　備　寝袋持参
費　用　約5500円（姫路駅から交通費・宿泊3食代ほか）
地　図　2万5千＝神子畑・音水越・安積
係　◎須磨岡　輔
申込み　〒671—2262　姫路市余部区上余部50の2の11　須磨岡　輔まで
＊定員20名
千町ヶ峰登山は地元一宮町観光協会との共催。地元の温かい炊き出しも計画されていて、地元の人とも交流できます。＊19日のみ参加の方は申込みハガキに記入ください。詳細は当日にて。雨天決行

自然観察山行52
美濃長嶺ヶ先（中級向き）
期　日　11月18日(日)　日帰り
集　合　JR大垣駅8時40分
コース　大垣駅（バス）中新—612新—7730新分岐—服部堂—鎗ヶ先—分岐—アカマツ大木—関所寺—寺木（バス）大垣駅（解散）

費　用　約3500円（大垣駅から貸切バス代等）
地　図　2万5千＝美濃
係　◎藤見守康
申込み　〒504－0828
各務原市蘇原柄田町1の13の5　藤見守康まで
＊定員30名
＊10月31日まで

揖斐の小ぶりな山ですが、急なやせ尾根を登ります。自然観察と写真撮影に伴う不規則な歩き方が苦にならない方ご参加ください。
小雨決行

木曽・風越山（一般向き）
期　日　11月19日(日)　日帰り
集　合　JR名古屋駅中央改札口8時10分
コース　名古屋駅（電車）上松駅（タクシー）鷹狩屋登山口—風越山（往復）—鷹狩屋登山口—木曽土岐川上松駅（電車）名古屋駅
（解散17時51分）
費　用　約4200円（貸切ワイド使用・名古屋から）
地　図　2万5千＝上松
係　◎小出良春　○鷹長　邦
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

ススキの斜面を登るにしたがって眺望が広がってくる。帰路は木曽古道を駅まで歩きます。
雨天中止

三重の山53
飯高・檜塚奥峰（やや健脚向き）
期　日　11月19日(日)　日帰り
集　合　飯高「道の駅」（国道166号線）8時00分
コース　飯高道の駅（車）マナコ谷登山口—林道十三峠—林小屋—主稜線分岐—檜塚—檜塚奥峰—明神岳—明神平—奥山谷出合—ワサビ谷出合—千枚林道登山口（車）道の駅（解散16時30分頃）
費　用　1150円（交通費各自）
地　図　2万5千＝大台生
係　◎稲垣栄夫　○尾崎英五　○新町幸夫
申込み　〒513－0843
鈴鹿市岸田町4の5
尾崎英五まで

県境を除く三重県内の最高峰1420mで、特に秋の紅葉が美しいと案内者にある。小雨決行

城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

中ユリ道から大石谷は廃道化しており、崩壊地トラバース、ルートファインディングも必要です。崩壊・落石の多いところなので、天候によりコース変更します。
雨天中止

吉野・高取城址から石舞台（一般向き）
期　日　11月26日(日)　日帰り
集　合　近鉄名古屋駅北口6時30分／近鉄吉野線壺阪山駅9時40分
コース　壺阪山駅（バス）壺阪寺—森淵谷—壺阪山城址—壺坂—栢森—石舞台—亀石—飛鳥駅（電車）橿原神宮前駅（解散16時15分）
費　用　約4500円（名古屋から）
地　図　2万5千＝飛鳥
係　◎小出良春　○中村美雄
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

＊集合駅を明記ください
吉野山を望む古城の山。老樹の茂るなかに石垣だけが往時の面影を残している。城を後に山伝いに栢森へ出て石舞台へ行きます。
雨天中止

鈴鹿を歩く107
猪谷・釈迦ヶ岳（健脚向き）
期　日　12月3日(日)　日帰り
集　合　紅葉谷の奥ノ神崎川林道・風越谷林道分岐広場8時30分
コース　分岐広場（車）神崎川林道終点—白滝谷分岐—933峠—猪谷—釈迦ヶ岳—赤坂谷源流—赤坂谷—カシコラ谷—仙養谷—神崎川—林道広場（解散）
費　用　交通費各自
地　図　昭文社＝「御在所・鈴ヶ岳」
係　◎岩野　明
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

＊マイカー山行
神崎川の白滝谷から釈迦ヶ岳にアタックし、赤坂谷から仙養谷をくだります（50号・54ページ参照）。
雨天中止

北山ちょっと歩き15
日吉大社から横川中堂（一般向き）
期　日　11月22日(水)　日帰り
集　合　JR湖西線比叡山坂本駅9時00分
コース　比叡山坂本駅—日吉大社—表参道—横川中堂—玉体杉—黒谷青龍寺—登山口バス停（解散15時30分頃）
費　用　約1500円（大阪から）
地　図　昭文社＝「京都北山」
係　◎岩山繁三
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

紅葉の日吉大社から比叡山と表川中堂へ、そして黒谷青龍寺へとくだり、歴史のロマンを感じながら歩きます。黒谷には野鳥が多い。
雨天中止

△鈴鹿を歩く106
藤原岳（健脚向き）
期　日　11月23日(祝)　日帰り
集　合　瓶池林道・小文谷林道分岐広場8時00分
コース　分岐広場—小文谷林道—ノタノ坂—遠知峠—上倉

尾根—真ノ谷—頭陀ヶ平—大狗岩—藤原岳—藤堂—千一治田峠—茨川—ノタノ坂—小文谷林道—分岐広場（解散）
費　用　交通費各自
地　図　昭文社＝「養老山・伊吹・藤原」
係　◎岩野　明
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

＊マイカー山行
小文谷林道から遠知峠を登り、真ノ谷・頭陀ヶ平・藤原岳・治田峠・ノタノ坂と一周します（21号・46ページ参照）。雨天中止

地図読み山行43
北摂・黒岳から明神ヶ岳（一般向き）
期　日　11月23日(祝)　日帰り
集　合　JR高槻駅北口バスのりば8時00分
コース　高槻駅（バス）桜田坂前—鷹手坂—黒岳—死尾峠—明神ヶ岳—万堂峠—中畑回転場（バス）高槻駅（解散）
費　用　約2000円（大阪から）

地　図　2万5千＝法貴
係　昭文社＝「京都西南部」
中込み　◎藤元一彦　○中村　登
〒536－0008
大阪市城東区関目1の9の90　藤元一彦まで
＊定員30名
＊11月16日まで

新ハイキング関西支部合同撰挙と母波の国境の二つの山を結んで歩き、地形図とコンパスの使い方を勉強します。晩秋の一日、多彩の紅葉と山上からの展望を楽しみましょう。＊シルバー型コンパスと地図を持参ください。
雨天中止

比良・荒川峠から大荒谷（健脚向き）
期　日　11月25日(日)　日帰り
集　合　JR湖西線志賀駅9時15分
コース　志賀駅—荒川峠—鳥谷山—比良岳—中ユリ道—大岩谷—志賀駅（解散16時頃）
費　用　約2000円（大阪から）
地　図　昭文社＝「比良山系」
係　◎浅野弘子
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

＊集合駅を明記ください
比良山系の最高峰。冬期は雪崩の多い谷です。
雨天中止

鈴鹿を歩く108
鎌ヶ岳（健脚向き）
期　日　12月10日(日)　日帰り
集　合　近鉄名古屋駅北口6時30分／近鉄吉野線壺阪山駅9時40分
コース　壺阪山駅（バス）壺阪寺—森淵谷—壺阪山城址—壺坂—栢森—石舞台—亀石—飛鳥駅（電車）橿原神宮前駅（解散16時15分）
費　用　約4500円（名古屋から）
地　図　2万5千＝飛鳥
係　◎小出良春　○中村美雄
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

＊集合駅を明記ください
鎌ヶ岳の西面を登ります。
雨天中止

京都北山歩き93
黒尾山・長野少林寺山（一般向き）
期　日　12月3日(日)　日帰り
集　合　JR京都駅八条口近鉄改札口付近8時00分
コース　京都駅（バス）周山—城山—黒尾山—栃本—基石坂—長野少林寺山—大長野（バス）京都駅（解散16時30分頃）
費　用　約3500円（貸切バス代）
地　図　昭文社＝「京都北山」
係　◎村田智俊　○吳井裕夫
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
村田智俊まで

明智光秀築城の城山から黒尾山に登り、落ち武者を辿る長野少林寺山へ行きます。小雨決行

○鈴鹿百山12（忘年会山行）
鳥帽子岳（やや健脚向き）
期　日　12月3日(祝)　日帰り
集　合　JR関ヶ原駅8時30分／三岐鉄道西野駅8時45分
コース　名張駅（車）鈴鹿—鳥帽子岳—鳥帽子岳—鈴鹿—名張駅（車）

―時山キャンプ場（忘年会）
費　用　交通費各自、車代（関ヶ原駅1000円・西野尻駅500円）
地　図　2万5千＝篠立
係　◎山田明男　○宮原孝修
申込み　〒503―0535　海津郡南濃町松山824の19　山田明男まで
＊集合駅を明記ください
＊マイカーの方はその旨記載ください
＊定員25名
鳥帽子岳へ午前中に登り、午後は焼き肉での忘年会を開催します。雨天中止

鈴鹿・松尾寺山（一般向き）
期　日　12月3日(日)　日帰り
集　合　JR名古屋駅中央改札口　8時30分／JR醒ヶ井駅　10時05分
コース　醒ヶ井駅―西坂谷山口―地蔵峠―松尾寺山―六地蔵―坂口橋（バス）醒ヶ井駅（解散15時頃）
費　用　2040円（全空プリー使用・名古屋から）
地　図　2万5千＝彦根東部

◎小出良春
〒610―0121　城陽市寺田大群10の10　新ハイキング関西まで
＊集合駅を明記ください
霊仙山の前衛の山です。山頂には松尾寺があり、信仰の道がハイキング道として整備されています。雨天中止

平日水曜ハイク35（忘年会山行）
北山・天ヶ岳から吉井（一般向き）
期　日　12月6日(水)　日帰り
集　合　叡電出町柳駅7時35分（40分発）
コース　出町柳駅（電車）叡山駅―瀬上原―三又峠―天ヶ岳―吉井（忘年会・送迎バス）北大路駅（15時頃解散）
費　用　約5500円（交通費・忘年会）
地　図　昭文社―「京都北山1」
係　◎渡辺次男　○青木一雄
申込み　〒569―1133　高槻市川西町1の18の20　渡辺次男まで
＊定員25名（会員に限る）
＊11月28日まで

天ヶ岳を吉井にくだり、恒例の「鳥料理」の鳥すきで忘年会をします。雨天決行

遠東ハイク28
東都西山・小倉神社から駅迦岳（一般向き）
期　日　12月9日(土)　日帰り
集　合　JR長岡京駅8時30分（金ヶ崎行きバスに乗車／阪急長岡天神駅からの人は申し込みハガキに明記）
コース　長岡京駅（バス）円明寺―ケ丘―小倉神社―小倉山―柳谷―大沢―駅迦ヶ岳―京都の森―奥畑印寺―（解散・バス）JR・阪急各駅へ
費　用　約500円（バス代等）
地　図　昭文社―「京都西山」
係　◎村野東彦　○加藤元彦
申込み　〒610―0121　城陽市寺田大群10の10　新ハイキング関西まで
＊マイカー山行

初冬の京都西山を歩きます。時間に余裕があればオプションコースを追加します。＊阪急長岡天神駅前で忘年会を計画しています。参加希望の方は申し込みハガキに「忘年会希望」と明記ください。小雨決行

鈴鹿を歩く108（忘年会山行）
政子と西山（一般向き）
期　日　12月10日(日)　日帰り
集　合　国道477号線／鹿見峠送迎線下広場8時30分
コース　広場―茶茸山―政子―奥草山―林道―477号線―鹿見峠―西山（往復）―広場（忘年会・解散）
費　用　食事は各自持参
地　図　昭文社―「御在所・鎌ヶ岳」
係　◎吉野　明　○山田晃二　○佐田繁美
申込み　〒610―0121　城陽市寺田大群10の10　新ハイキング関西まで
＊マイカー山行

鹿見峠周辺の茶茸山と政子・西山に登り、下山後広場で昼食忘年会を盛大に行います（雨天の場合は17日(日)に順延）。

東濃・三森山（一般向き）
期　日　12月10日(日)　日帰り

集　合　JR名古屋駅中央改札口　8時40分（大船駅5時発）
コース　名古屋駅（電車）東那駅（明智鉄道）岩村駅（タクシー）岩村ダム―三森神社参拝道入口―三森神社―三森山（往路）―岩村駅（電車）東那駅（電車）名古屋駅（解散15時51分）
費　用　約3500円（名古屋から）
地　図　2万5千＝岩村
係　◎小出良春　○鷹巣　邦
申込み　〒610―0121　城陽市寺田大群10の10　新ハイキング関西まで
＊集合駅を明記ください
三森山は日本一高い山城のあることで知られ、岩村町の信仰の山。雑木林の続く登山道には観音菩薩の石仏が山頂まで続きます。雨天中止

自然観察山行53
美濃・小島山（一般向き）
期　日　12月16日(日)　日帰り
集　合　JR大垣駅8時40分
コース　大垣駅（バス）―本郷巻山口―山腹数付点―1.80鉄塔―小島山―林道出合―JR名古屋駅中央改札口
費　用　約3600円（大垣駅から登山バス代等）
地　図　2万5千＝池野
係　◎小出良春
申込み　〒610―0121　城陽市寺田大群10の10　新ハイキング関西まで
＊集合駅を明記ください
鷲見峠周辺の山々の前衛峰を登り、遠記ヶ原の眺望を楽しみます。自然観察と写真撮影に伴う不規則な歩き方が苦にならない方ご参加ください。小雨決行

六甲・須磨アルプス（一般向き）
期　日　12月17日(日)　日帰り
集　合　JR名古屋駅中央改札口　6時15分／JR須磨駅10時00分
コース　須磨駅―須磨浦公園―鉄拐山―高倉台団地―梅尾山―鵯越山―坂谷―菊水川駅（解散15時頃）
費　用　約2500円（会員割引きっぷ使用・名古屋から）
地　図　2万5千＝須磨・神戸南部
係　◎小出良春　○鷹巣　邦
申込み　〒610―0121　城陽市寺田大群10の10　新ハイキング関西まで
＊集合駅を明記ください
鳥取浜食による荒々しい花崗岩の岩場歩きで、鉄バシゴや鎖場もあります。雨天中止

忘年会山行
金勝アルプス・天狗岩（一般向き）
期　日　12月17日(日)　日帰り
集　合　JR草津駅8時30分
コース　草津駅（バス）上桜生―サカサ観音―水晶谷―耳岩―天狗岩―鶴脚山分岐―上桜生―丈野野営場（忘年会・バス）草津駅（解散16時頃）
費　用　約2000円（バス代）
地　図　2万5千＝瀬田・三雲
係　◎奇田智敏　○安倉正勝
申込み　〒610―0121　城陽市寺田大群10の10　村田智俊まで
天狗岩からの展望を楽しんで、キャンプ広場で忘年会をします。＊会費・飲み物は各自持参ください。雨天中止

北山ちょっと歩き16
越畑から地蔵山・愛宕山（一般向き）
期　日　12月20日(水)　日帰り
集　合　JR京都駅山陰線のりば　7時30分（7時42分発乗車）
コース　京都駅（電車）八木駅（バス）越畑―地蔵山―愛宕山―愛宕神社―表参道・水尾分岐―米谷道―JR保津峡駅（解散16時頃）
費　用　約2000円（大阪から）
地　図　昭文社―「京都北山1」
係　◎真山繁三
申込み　〒610―0121　城陽市寺田大群10の10　新ハイキング関西まで
初冬の地蔵山から愛宕山をゆっくり歩きます。雨天中止

近畿百名山に登る（第22回）
紀北・高野山（一般向き）
期　日　12月23日(水)　日帰り
集　合　JR紀河駅9時40分
コース　紀河駅―一本松―ちりなし峠―田代峠―高野山―

風穴―明神岳―一本松―松河駅（解散15時30分頃）
約3000円（大阪から）
2万5千―松河・前門山
◎村田智俊　○長比恭美
〒610―0121
城陽市寺田大畔10の10
村田智俊まで
眼下に紀ノ川を望む。紀州富士と言われる大展望の名山に登ります。小雨決行

丹波・牛松山（一般向き）
期日　12月24日(日)　日帰り
集合　JR名古屋駅中央改札口6時15分／JR亀岡駅9時35分
コース　亀岡駅（バス）北保津―金刀比羅宮の鳥居―金刀比羅神社―牛松山―愛宕神社―国分（バス）亀岡駅（電車）京都駅（解散15時41分）
費用　約2750円（昼食は各自）
地図　2万5千＝亀岡
係　◎小出良春　○中村英雄
申込み　〒610―0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

＊集合駅を明記ください
丹波富士とも呼ばれる牛松山へ。金刀比羅神社には保津川下りの小舟が奉納されています。雨天中止

近畿百名山に登る（第23回）
紀南・子ノ泊山と烏帽子山
（一般向き）
期日　1月2日夜(土)～4日(月)
前夜発1泊2日
（2日）近鉄大和八木駅22時30分
コース　（2日）大和八木駅（夜行バス）
（3日）（バス）紀宝町相賀中ノ谷登山口―子ノ泊山―和気（バス）温泉駅温泉四国グリーンランド（泊）
（4日）高田グリーンランド（バス）大門坂―陰陽ノ滝―松尾ノ滝―烏帽子山―林道―山ノ神―三ノ滝―二ノ滝―那智青岸渡寺（那智の滝）―大門坂（バス）わたらせ温泉（入浴・バス）大和八木駅（解散19時頃）
費用　約25000円（宿泊・貸切バス代）
地図　2万5千―大里・新宮・紀伊勝浦
係　◎村田智俊　○安倉正勝
申込み　〒610―0121
城陽市寺田大畔10の10
村田智俊まで
＊定員23名
暖かい紀南の二つの名山を登ります。正月の那智山へもお参りします。温泉でゆっくりくつろぎます。雨天決行

イベント情報

▼大養孝「万葉の旅」後期展
平成12年9月20日(水)～平成13年3月18日(日)（月曜・年末年始休館ただし10月・11月は休みません）
大養孝の『万葉の旅』展・大養孝の取材グッズ・『万葉の旅』直筆原稿や校正原稿、蔵書・大養孝揮毫の万葉歌・伊藤銀造「万葉の旅」写真展、他貴重展示多数あり。
南部明日香ふれあいセンター
大養孝万葉記念館☎0774（54）9300

▼第5回「ふれあい線向山Day」
平成12年11月10日(金)10時より（10時から13時の間に参加された方に「線向山の日・登山証明書」をお渡しします）。特設バザー・オリジナルグッズ販売・こもれびコンサート・山頂での展望と自然の説明会など企画しました。
日野町観光協会☎0748（52）1211

山行報告
（7・8月）
新ハイキングクラブ関西

東素・笠置山
7月2日(日)　晴れ
JR名古屋駅集合8・10～18（電車）亜那駅9・25（タクシー）姫栗9・45―経塚10・10～15―堰堤11・00～05―おみたらし12・08～17―笠置山12・30―物見岩12・50（昼食）13・15―ヒトツバタゴ13・57―姫栗15・10（バス）亜那駅15・35（解散）
ヒカリゴケは神社の裏手にある大きな窪地の穴の中にあった。下見の時よりも、雨上がりで湿気をおびていたからなのか、それとも光の加減か、より輝いていた。周囲の岩穴を見ると緑の宝石だらけだった。
（参加者）姫栗　邦　渡辺美代子　真田明子　岡本美千代　鈴木美代子　○朝倉利己　◎小出良春　（計7名）
宝生・学能堂山

（近畿百名山を登る第15回）
7月2日(日)　晴れ
近鉄名張駅集合8・30～35（バス）杉平9・30―宝寺9・35～10・00―黒埼尾根11・20（昼食）12・30―学能堂山12・45～八剣神社13・45～14・10―林道14・25～50―神末上村15・10～40（バス）名張駅16・40（解散）
杉林の急坂を尾根へ登って、涼しい樹林のなかで食事した。山頂は草原が広がり展望が抜群だったが、暑くてゆっくりしておられない。多少のやぶをこいで小須磨峠へ行き下山した。ヤッコリが目を楽しませてくれた。
（参加者）長比恭美　山中真知子　田中雅雄　角田一江　前川和佳子　秋田盛郎　塩見香織　松上美代子　小谷和子　岡田春治　松塚千佳子　岩田育士　上田久子　高田久美子　小山　輝　三井敏一　南　寿子　辻村幸裕　松下　武　久保三英次　小堂　学　稲田節子　西村泰治　渋谷達郎　柳原隆子　木村千代子　島田昭子　高岡信男　中島　隆　加藤元彦　樋田利洋　山根弘美　堀方由子　中谷勝香　野里マツヨ　永倉信子　大本久子　新治悦子　小林　稔　西村義朗　森　瑞代　中谷孝子　山崎勝治　山高多恵子　横澤義春　稲木芳雄　松村智子　波谷節枝　森田和子　坂　良男　篠部　純　小田智子　山本千鶴子　小林　桂　西村正春　美村孝治　原　幸子　林　陽子　前田幸子　小川明美　萩野勝子　中上紀代子　中川光郎　畑　久子　波多野恵子　笹田春美　○安倉正勝　◎村田智俊　（計68名）

延美・冠山（自然観察山行45）
7月8日(土)　◎警見守康
＊雨天のため中止しました。

大峰・弥山から大普賢岳
（週末ハイク25）
7月8日(土)～9日(日)　1泊2日
（8日　曇り）近鉄大和上市駅集合9・30（タクシー）行者還トンネル西口11・10～25―縦走路出合12・20（昼食）12・55―弁天の森13・15―聖宝の宿跡13・45～55―弥山小屋14・50（泊）
（9日　晴れ）弥山小屋6・35―聖宝の宿跡7・16―弁天の森7・50―ノタワ8・30―大川辻9・30―行者還岳9・55～10・00―七曜岳11・00―七ツ池11・15（昼食）12・05―弥勒岳13・00―太普賢岳13・20～40―小普賢岳分岐14・10―鷲ノ窟14・35～45―釜ノ窟14・55―和佐又ヒュッテ15・35～16・00（タクシー）大和上市駅17・00（解散）
オオヤマレンゲは見頃には少し早めだったが十分楽しめた。2日目はブナ林のなかをバイケイソウの花を楽しみながら長丁場を無事歩き通した。
（参加者）長松雅子　中村静香　若松雪子　塩見俊男　塩見香織　角田一江　船越利明　船越みよ子　山本巫子　小林　桂　中尾博子　北川史板　中村和江　青木一雄　喬浪次男　秋田盛郎　堀方由子　金森節子　石川賢一　中島義智子　真田久子　吉塩　清　鈴木美代子　南　寿子　瓜坂利明　原　幸子　柳楽市郎　徳田勝子　◎警見守康　（計30名）

イタリア・ドロミテとスイス・ベルナオーバーランド
ハイキング8日間
7月8日(土)～15日(日)
羽地6泊8日間
（8日）関西空港9・40＝フランクフルト空港14・00～16・45＝ベニス空港18・00～46（バス）コル

チナダンベッツォ21・00（泊）
（9日）コルチナダンベッツォ9・00（バス）オーロンゾ小屋9・55～10・05—岐11・13～30—ドライチンネン小屋12・15（昼食）13・30—岐14・16～30—オーロンゾ小屋駐車場15・40～50（バス）ミズリ湖16・15～30—コルチナダンベッツォ17・10（泊）
（10日）コルチナダンベッツォ9・00（バス）インスブルック17・00（市内観光・泊）
（11日）インスブルック8・00（バス）ルッツェルン12・30（市内観光）14・00＝ラウターブルンネン16・20～40＝ウェンゲン17・00（泊）
（12日）ウェンゲン7・43＝ラウターブルンネン8・05（バス）グリンデルワルド8・35～50＝フィルスト9・05～10・00—中間駅11・45—グリンデルワルド12・30～14・00＝メンリッヒェン14・20～30＝ウェンゲン（泊）
（13日）ウェンゲン7・25＝クライネシャイデック7・45～55＝ユングフラウヨッホ8・50～10・05＝クライネシャイデック10・50～12・45—ウェンゲンアルプ13・25～35—ウェンゲン14・50～16・30＝ラウターブルンネン16・50～17・00＝チューリッヒ19・30（泊）
（14日）チューリッヒ空港9・40＝ベルリン空港11・00～12・40＝フランクフルト空港15・00～40＝
（15日）＝関西空港7・35（解散）
ドロミテではドライチンネンの奇観を一周。スイスではアイガー・メンヒ・ユングフラウの白銀の峰を仰いで歩いた。真夏の雪山散歩や高山植物群に親しんだ山旅だった。
（参加者）澤田悦之　家入敏光　家入親子　大西修郎　大西規子　隣　易子　岸本笑美　田中三喜子　篠崎義子　中川博史　砂原慶雲子　落合北彦　田中順子　浜田貴美子　白井昭夫子　高岡高美子
◎塚元一彦　（計17名）

元越谷（鈴鹿を歩く97）
7月9日（日）晴れ
元越谷林道入口手前広場集合8・30—元越谷9・10—大滝9・40—佐俣出合10・10—鈴谷谷出合11・00—源流11・35—大岩12・00（昼食）13・00—仏隆15・25—宮指路岳14・10—猪足谷林道14・40—元越谷分岐15・30—国道477号経由広場15・55（解散）
参加者が多く二組に分かれて出発。後者のなか、沢に入ると生き返った感じで、早速淵に飛び込む人もあり、ナメ・ト・滝を十分に堪能した。大岩と接線は涙風が吹き過ぎ知らずの山行となった。
（参加者）後藤康幸　伊藤喜久男　吉村　昭　山田豊三　落合ひろ子　池田繁美　高岡芳彦　的場たか子　大石敬美　神野孝允　武藤田美子　永戸鉄治　池田隆一　辻　やす香　筑野　明　水谷俊之　網代美智子　渡辺康夫　谷　守　馬場弾平子　田辺弘子　山島守雄　小林　実　西村正春　徒弘幸治　武村千鶴
◎吉野　明　（計27名）

宝生・三郎ヶ岳
7月9日（日）晴れ
近鉄榊原駅集合9・10～36（バス）高井9・50—仏隆寺10・27～35—唐戸峠10・43～53—唐戸山10・25～33—林道12・00（昼食）12・30—三郎ヶ岳13・00～19—高城山13・39～50—仏隆寺14・30～45（タクシー）榊原駅15・10（解散）
桜で有名な仏隆寺から唐戸峠に向かう。峠からの尾根道は二年前の台風による倒木が多かった。小ピークのアップダウンも緑のササと吹き抜けるさわやかな風でルンルン気分になった。
（参加者）本間　隆　松上美代子　小林　稔　永島律子　草野智雅子　炎谷弘治　西野幸夫　西野加代子　小川晴美　徒尾久代　松本康蔵　堀　久子　吉條孝次　岡本美子子　大本　勝　大本久子　森　晴代　向田　豊　若木啓二　辻　嘉一郎　鳥居義男　森　日野　鷹夫　邦　市野博文　近田智子　三井紘一　林　陽子　○中村英雄
◎小山良春　（計29名）

比良・サカ谷から蓬莱山
（平日水曜ハイク30）
7月12日（水）曇りのち晴れ
JR堅田駅集合8・10～15（バス）坂下8・45—登山口9・00—小女郎ヶ池10・50～11・20—蓬莱山11・30（昼食）12・30—打見山12・50～13・00—天狗杉13・50—堅下神社14・50（解散）—志賀駅
サカ谷の流れは涼しかったが、杉林の急登にかかると蒸し暑くなった。小女郎ヶ池や蓬莱山頂は風が吹いて過ごしやすく、武奈ヶ岳や釈迦ヶ岳が展望できた。皆さん健脚で予定より早く志賀駅に着いた。
（参加者）塩見喜織　中村静香　木本恭子　島田宗子　加藤元彦　近藤　恭　中村英雄　東山登夫　本間　隆　辻　節子　真田久子　堀内光子　白根清子　白根清子　角江朝子　白根清子　堀澤ふみ子　辻　石子　谷　守　千葉千枝子　松山みつ　津上　明　岩本いすゞ　国松義雄　角田一江　馬場鶴次子　山本京子　○吉木一雄
◎渡辺次男　（計29名）

北アルプス・常念岳から蝶ヶ岳
（名山限歩9）
7月14日（土）夜～16日（日）1泊2日
◎秋葉俊司
＊締切日までに報告がなく掲載できません。

鈴鹿・釈迦ヶ岳
7月16日（日）晴れ
近鉄湯の駅集合9・18（タクシー）水無9・40—切通し岩11・06—尼高山分岐11・55～12・07—松尾尾根の頭12・30（昼食）13・10—釈迦ヶ岳13・13～20—猪岳13・40～50—908m14・15～25—羽鳥峠14・40～45—鈴鹿15・20—湯の山ロッテ15・40～16・12（バス）亀野駅16・40（解散）
いきなりの急登で、松尾尾根を休憩しながら登った。ガレ場は危険なので前の人が歩いた後を歩くこと。松尾尾根の頭で昼食。広くて展望もよい。羽鳥峠への下りの尾根にはゴヨウツツジが多いと教えてもらった。（記録・藤井洋子）
（参加者）岩田育士　占部信義　中村英雄　中谷孝子　保田　正　高津智美　長沢佐夫　高田久美子　森本　勝　森本孝子　中尾美智子　田端義雄　多賀久子　笑新孝治　栗井洋子　三井紘一　松上美代子
○鷹雄　邦　◎小山良春　（計19名）

飯高・宮の谷渓谷（二軍の山22）
7月16日（日）晴れ
「飯高道の駅」駐車場集合8・00（車）宮の谷出合9・45—大飛び岩10・20—千丈谷10・50—水無谷出合11・10（分岐）—流滝11・30（昼食）12・30—水越谷出合12・50—宮の谷出合14・00—宮駐車場14・10（解散）
天気予報に反して雲一つない青空で真夏の暑さ。渓谷はエメラルドグリーンの美しい色。そこで手と顔を冷やす至福。落差50mという流は歩く所もないぐらいの迫力ある滝を見て涼みながら昼食をとった。
（参加者）原　光一　原　幸子　脇田和洋　小和田男　岡本美子子　今西長代　和田四郎　落合ひろ子　川本　隆　澤田誠郎　的場たか子　石田真由美　○新町幸夫
◎尾崎英五　（計14名）

北山・足尾谷から雲子山
（北山ちょっと歩き1）
7月19日（水）晴れ
京阪宇治町柳駅集合7・35～45（バス）足尾谷口8・45～55—ツボクリ谷分岐10・10～15—ツボクリ谷大滝10・35～40—雲子山11・35（昼食）12・35—雲子谷分岐14・00～06—平15・00～55（解散・バス）出町柳駅
北山歩きの良さ　渓谷と滝元90%を存分に味わって歩いた。希望者はミタニ峠から三谷口～小出石まで歩いた。
（参加者）南　寛子　中村吉五郎　加藤元彦　高岡信男　今村　哲　栄生　曽　長沢佐夫　徒尾久代　藤井敏子　神上　明　和田直樹　木本恭子　武田元司　松本忠雄
◎長山繁三　（計15名）

鈴鹿・銚子谷から鈴ヶ岳
（鈴鹿百山7）
7月20日（日）晴れ
JR関ヶ原駅8・20／三岐伊勢治田駅集合9・00（車）青川休みコバ9・20—トンネル9・50—銚子大滝上10・20—銚滝上11・15—大ガレ上11・50（昼食）12・25—綾線13・10—セキオノコバ13・40—鈴ヶ岳14・00—クラ分岐15・00—滝の平15・20—林道16・30—青川休みコバ16・45～17・00（解散）
大滝の捲き道と銚滝横の登りが一番危険な場所。何とか無事にクリアーできた。名だたるヤマヒルの生息地で平分の人がやられた。
（参加者）鍋谷市郎　伊藤原美子　西村文男　本間　隆　落合ひろ子　鈴木信夫　鳥居義春　佐藤田文子　石浜倫子　乃下由子　的場たか子　大村敏子　栗本敬夫　山野志保江　山村春男　後藤康幸　伊藤喜久男　栗木美智子　○宮岡繁彦
◎山田明男　（計20名）

北アルプス
雲ノ平・鷲羽岳・水晶岳・雲の平　（自然観察山行46）
7月20日（日）～23日（日）3泊4日
◎日　晴れ　奥黒部ロッジ5・30（タクシー、待機時間あり）高瀬ダム7・30—ブナ立尾根取付点

7・55―（昼食休憩）―烏帽子小屋13・10～50―烏帽子岳14・45～15・10―烏帽子小屋16・00（泊）

（21日　晴れ）烏帽子小屋6・00―三ツ岳7・10―野口五郎岳10・00―真砂岳10・50―（昼食休憩）―東沢乗越12・35―水晶小屋13・40―水晶小屋14・25―（昼寝で休憩）―水晶小屋15・25（泊）

（22日　曇り時々雨）水晶小屋5・40―ワリモ岳6・40―鷲羽岳7・00―ワリモ岳7・40―山荘跨越8・00―鉢ノ岳8・50―雲の平小屋10・25（昼食）11・45―祖母谷12・00―薬師沢小屋15・00（泊）

（23日　晴れ）薬師沢小屋5・00―本谷橋7・40～8・00―折立11・15（タクシー）富山駅着「白樺ハイツ」12・30（入浴・昼食）13・35（タクシー）JR富山駅14・20（解散）

＊詳細は「紀行文」をお読みください（本誌56ページ）。

（参加者）足立博子　加納由紀子　亀本庸治　吉藤孝次　櫻井昭一　櫻岡光子　中井幸子　豊田真理子　夏山春子　山崎勝美　前川和佳子　山木宜治　横井　徹　横井麥子　若松朝子　○三井紘一　（計17名）

◎秋葉敏司

＊締切日までに提出がなく掲載できません。

南アルプス・聖岳から赤石岳

（名山開歩10）

5月2日（夜）～6日（朝）　3泊4日

◎秋葉敏司

元越谷左俣（鈴蘭を歩く39）

5月6日（朝）　晴れ

元越谷林道手前広場集合8・25―元越谷9・10―大滝9・35―左俣出合10・10―源流11・45―尾根広場12・05（昼食）12・00―鞍部13・30―仙ノ谷13・40―三俣小林道14・20―477号線広場15・15（解散）

今回も二組に分かれて山菜。連日の猛暑でさっそく水浴び泳ぎの沢歩き。大滝ではザイルで流を直登しているパーティを追い越し、左俣出合ではドボンドボンと単心に返って水を楽しむ。ナメ滝のシャワー、涼風の尾根歩きも楽しんだ。

（参加者）徳藤康幸　山田晃二　吉岡　仁　大石孝夫　落合ひろ子　島田信吾　高原芳彦　松元勇二郎　山村基男　昭　吉村　徹　水谷俊之　水戸敏治　湯浅康夫　篠部　純　湯田隆一　神野孝允　的場たか子　渡野　明　武村千鶴　石田眞由美　森本浄子　高田智美　綿木実恵子　谷　久雄　河辺牧男　武藤由芳子　◎若野　明　（計27名）

福井・日野山

8月6日（朝）　晴れ

JR武生駅集合10・40（タクシー）宮谷分岐11・00―宮谷分岐11・40―日野山12・00（昼食）12・50―日野神社15・40―王子保駅16・35（電車）栄駅18・30（解散）

快適な尾根歩きが続き、山頂が近づくとブナが出てきた。山頂直下は岩稜帯の急登だった。日野神社のある山頂からの展望は、福井まで来た甲斐がある好展望だった。

（参加者）西居繁弥　松上美代子　中村啓一　北村　正　中尾英智子　森　昌好　速水　保　岡本孝子　市野博文　森　晴代　岩本いすゞ　土井隆夫　渡辺英代子　○中村英雄　◎小出良春　（計15名）

比良・堂満岳から荒川峠

8月6日（朝）　晴れ

JR比良駅集合8・45～50（バス）イン谷口9・05～15―ノタノホリ9・45～55―堂満岳頂上11・30（昼食）12・20―堂満岳12・35～40―縦走路出合13・00―蓬比良峠13・30―荒川峠13・55―水場15・00～10―志賀駅16・15（解散）

是いなか、急登をこなし堂満岳に登った。あとは展望を楽しみながら縦走路に出て、荒川峠から岩清水の流れる水場へくだった。

（参加者）藤木紀子　中村佳津子　今井武司　長比恭美　馬籠忠男　本間　隆　角田一江　茨木良雄　山科邦彦　辻村平治　柳川雪雄　松本庸蔵　英代　猛　加藤浩二　浦上　明　青木一雄　中川光郎　中川節子　川上春代子　○湯浅次男　◎村田智愛　（計19名）

若狭・野坂岳

（平日水曜ハイク30）

5月9日（水）　晴れ

JR敦賀駅集合8・20～55（タクシー）登山口9・30―トチノキ地蔵水場9・55～10・10―一の岳10・50―二の岳11・10―三の岳11・25―野坂岳11・35（昼食）12・30―トチノキ地蔵13・25～35―登山口13・55―JR粟野駅14・25～45（解散）

暑き厳しいところトチノキ地蔵の名水でひと息つき、山頂からの展望も満足できた。午後は日もかげり秋まで元気に歩いた。

（参加者）塩尻喜雄　平田耀美　高岡信男　近藤　恭　横澤嘉春　田口　明　本郷　隆　松田孝子　佳子　谷　守　倉田久子　千葉千枝子　東山澄夫　林尾一正　宮村孝次郎　諏訪統子　渡辺建郎　長尾亜子　山田騎雄　阪口豊司　林　千賀子　中村時香　中尾博子　山本京子　青生幸子　畑井和子　大橋宗雄　平敬英子　竹内喜久子　○青木一雄　◎湯浅次男　（計30名）

南アルプス

甲斐駒ヶ岳・仙丈岳・北岳

8月12日（夜）～16日（朝）

前夜発3泊4日

（12日）京王駅八幡口集合22・30～40（車）

（13日　曇りのち雨）（車）戸台3・30（仮眠・朝食）6・25（バス）大平山荘7・20～30（バス）北沢峠7・35～45―駒津峰10・30―甲斐駒ヶ岳12・00（昼食）12・30―北沢峠16・00―大平山荘16・15（泊）

（14日　晴れ）大平山荘5・45―雨の胃ヒュッテ8・30―仙丈小屋10・00―仙丈岳10・30（昼食）11・05―野呂川越16・00―吉倉小屋16・20～23―十枚岳分岐11・40～50―一の岳12・10―二の岳12・25～45―野坂岳13・00（昼食）13・40―第2鉄塔14・45―栃川・35―小屋・駅前神社15・50～16・10（タクシー）敦賀駅16・30（解散）

水場でゆっくり休む。一の岳を過ぎるとブナ林になった。山頂は360度の展望。山麓への踏み跡もしっかりしていた。アサギマダラがふわりふわりと舞っていた。

（日程・原　文子）

（参加者）寺田久広　小原きぬ子　小山　輝　島田泉子　中谷幸子　真田明子　和泉元一　野々山　寛　緒方由子　呉比裕美　渡辺英代子　木村光江　増山国広　伊藤嘉英子　小田洞子　原　文子　鷹巣　邦　森藤忠子　吉野博文　高民宏美子　馬籠忠男　島　進　中尾英智子　城尾公代　丹方清一　岡本孝子　速水　保　森　昌好　武藤英孝子　英村孝治　森　晴代　榊瀬保市　加藤　潔　丹下由子　○中原英雄　◎小出良春　（計36名）

比良・白滝谷

（平日ふれあいハイク21）

7月25日（日）　◎川上友堅

＊雨天のため中止しました。

丹波・長老ヶ岳

7月30日（日）　晴れ

JR和知駅集合10・30（バス）熊野神社11・00―林道終点11・30―尾根取付12・00―無線中継所12・50―長老ヶ岳13・00（昼食）13・30―七色の木14・45―仏主15・10（バス）和知駅15・52（電車）京都駅17・21（解散）

大勢の参加で臨時バスを出してもらった。谷を吹く風も心地よく涼感に歩くことができた。

（参加者）塩尻喜雄　五味智雅子　柳川常雄　岩田雪士　中嶋日出男　寺田久広　向田　豊　川北恵美子　小山　輝　三井紘一　松下美智子　中谷幸子　石川　敏　横川ゆり子　黒籠忠男　本郷　隆　中原英雄子　田中　明　米谷建治　野々山　寛　北村　正　北村　禎　森澤嘉春子　橋詰和代　中川光郎　藤野英紀恵　木村光江　秋田満郎　川上春代子　小田洞子　中村時香　岩本いすゞ　細井和子　高橋源治　高橋由紀子　森　晴代　多賀久子　庁　すみ子　島　進　真田明子　前田喜久子　杉本正二　高木　晋　英村孝治　島田孝子　土井隆夫　高岡喜美子　朝倉利己　馬籠保夫　○高岡信男　○中村英雄　◎小出良春　（計32名）

40（泊）
〈16日　曇りのち晴れ〉而俣小屋6・10―大滝8・20―中白峰沢の頭10・10（昼食）10・20―肩の小屋上合流点12・20―北岳13・00～14・00―北岳山荘15・20（泊）
〈16日　晴れ〉北岳山荘6・00―八本宙のコル7・30―二俣9・00―広河原10・30（バス）北沢峠10・55～11・15（バス）戸台12・00（昼）高遠温泉さくらの湯12・30（入浴・昼食）14・00（車）京都駅19・00（解散）
甲斐駒ヶ岳は雨だったが、仙丈岳・北岳はすばらしい展望に恵まれた。道中にたくさんの花に出会えた。長丁場に耐え、食事・急下降もあったが、元気に三山を巡ることができた。山行前は台風が来るのではとの予報で、山小屋ら空いていた。
（参加者）長尾節子　呉比佐美　小谷和子　塩尻俊男　塩尻香織　亜井洋子　富岡啓子　若松　寛　若松幹子　山科邦彦　石原芳子　富松雅子　木村比弘　木村千代子　上田久子　木村太郎　臣元弘子　田中芳雄　○安倉正勝　（計20名）
◎村田智俊

美濃・釜ヶ谷山
8月13日(日)　晴れ
JR岐阜駅集合9・15―岐阜駅バスセンター9・20～40（バス）伊自良キャンプ場10・40―長の院11・55―釜ヶ谷山12・35（昼食）13・30―キャンプ場15・33（バス）岐阜駅17・00（解散）
風もないムンムンする暑さのなかを登る。流れる汗に夏の低山ハイクのすごさを感じる。山頂の展望と下山時の涼しさがすべてを忘れさせてくれ、快調なテンポでバス停に着いた。
（参加者）堀田輝子　中尾美智子　松尾順子　北村　正　野々山　寛　寺田久広　中西三枝　高岡喜美子　吉田明子　奈良邦子　伊東喜美子　小田潤子　則定保夫　○渡辺　邦　（計15名）
◎小出良春

仙香谷・赤坂谷
（鈴鹿を歩く100名谷コース）
8月20日(日)　晴れ
神崎橋広場集合8・30（車）神崎川林道出発8・45―仙香谷出合9・15―赤坂谷出合11・02―大ナメ滝11・20（昼食）12・30―旭道出合13・35―カシコラ谷出合13・50―東安谷14・40―神崎川15・10―林道広場15・30（解散）
仙香谷ではプールのような淵を泳いだり壁をへつったり、シャワーを浴びての滝登りとザイルでの岩登り、そして長い廊下。今までの谷とはスケールが違い圧倒された。赤坂谷の大テン場では食後寒くなり、岩の上で焚火を囲み暖をとった。
（参加者）後藤康幸　伊藤喜久男　山田登三　池田繁美　石田真由美　吉岡　仁　吉村　昭　藤谷ひろ子　大石裕美　神野孝允　武藤由美子　永戸鉄治　小林　桂　戸田比佐志　本下信行　信田信広　松元勇二郎　武村千鶴　森本淳子　高津智美　水谷俊之　横原計国　岡野　明　小林　実　◎若野　明　（計25名）

奥三河・八嶽山
8月20日(日)　晴れ
JR豊橋駅集合8・10～12（電車）大嶽駅11・00―富山村役場センター11・20―鳳野神社11・27～35―尾根12・20～30―一本松13・20～25―八嶽山13・40（昼食）14・10―熊野神社15・25～35―大嶽駅16・17（電車）名古屋19・19（解散）
大嶽駅は廃屋だった。廃多感って愛知県になり、日本一のミニ村富山村から登る。ブナやコナラの続く明るい尾根道から山頂へ。静かな山だった。
（参加者）中西玉枝　岡本美千子　森　昌好　近田智子　渡辺美代子　江戸利子　森　咲代　小崎ゆり子　○鷹巣　邦　◎小山良春　（計10名）

阿弥陀峰と鷲仙山の巡礼
（鈴鹿白山3）
8月20日(日)　晴れ時々曇り
JR阪ヶ井駅集合9・05（車）上丹生浄水場9・20～22―大ケヤキ11・55（昼食）12・35―阿弥陀峰12・55―阿弥陀峰の池13・07―鷹洞口13・45―鷲仙14・10―吉戸ヶ池14・33―ヒョウタン池14・43―鷲仙15・15―一の谷16・13―上丹生浄水場16・55（車）醒ヶ井駅17・15（解散）
三つ廻った池の二つの池で、新たにマメシジミの生存が確認できたのは収穫だった。昨年見たナツエビネの花がなかったのは残念。雨が少なくトリカブトも無残な姿で花は全く見られなかった。
（参加者）湯浅康夫　湯浅みや子　柳楽市郎　塩尻香織　小谷和子　石原信吾　鳥居信吾　光川一美子　奈良武野子　多賀久子　網木美恵子

丹下由子　大村優子　佐吉田文子　三井紘一　西村文男　荻野美紀恵　冨庄卓子　角田一江　宮田仲子　栗本敏夫　山村恭男　儀部　純　原　光一　原　幸子　山野志保江　今井武司　○西原芳彦
◎山田明男　（計38名）

北山・八丁平から峰床山
（北山ちょっと歩き12）
8月23(水)　晴れ
京阪出町柳駅集合7・35～45（バス）高川小学校10・8・50～9・00―伊賀谷林道終点10・00―八丁平11・40（昼食）12・20―オグロ坂峠12・30―峰床山13・10～20―佐坂峠13・50―峰定寺15・30―花背交流の森15・50（入浴）17・00（解散）17・35（バス）出町柳駅
残暑をしばし忘れ、八丁平で遠景からの風を感じながら昼食。佐坂峠付近では林道が開発され、地肌のむき出しが残念だった。下山後、バス時間調整のため花背交流の森で入浴した。
（参加者）塩尻香織　羽田野弘三　松尾麗子　西村新一　松場千佳子　中村　保　南　喜子　中西規俊好　大橋北造　堀尾俊治　中嶋日出男　辻　行子　白坂清子　岩本いすゞ　浦上　明　木下勝子　山尾勝雄
◎呉山繁三　（計18名）

取立山・弘山・白山
（自然観察山行42）
8月25日(金)～27(日)　2泊3日
〈25日　晴れ時々曇り〉岐阜駅集合6・50（バス）取立山登山口12・10～15―取立山13・30―こっぷり山14・30―登山口16・20～30（バス）白峰温泉17・00（泊）
〈26日　晴れ時々曇り〉白峰温泉5・20（バス）市ノ瀬登山口5・50（朝食）6・15―猿蔵環境6・40―千蔵尾根避難小屋9・55―御倉谷山11・50（昼食・別山往復）13・00―大汝14・00―南竜山荘15・15（泊）
〈27日　晴れ時々曇り〉南竜山荘6・55―室堂平8・10～30―別山峰9・00―封泡巡り―室堂平10・20～40―観光新道―殿ヶ池避難小屋11・40（昼食）12・00―別当出合14・00（バス）白峰温泉14・30（入浴）15・10（バス）岐阜駅19・35（解散）
取立山で別山から白山本峰への縦走路を試望し、翌日縦断登15・00で別山に登り、翌々日白山御前峰を登った。高原美原の花々が草原にあたりを彩り、チングルマやハクサンコザクラにも出会えた。
（参加者）安斎　洋　石庄哲二　石原倫子　近江秀子　伊藤喜久男　岡田直規　鷹巣　邦　蔭野美紀恵　武村千鶴　藤松雅子　砂原恵美子　夏山登子　奈良邦子　林　えい子　平田雅美　三浦弘幸　光川一美子　若松　寛　若松幹子　○田中　明
◎鷲見行康　（計21名）

花折峠から天ヶ森
（京都北山歩き92）
8月27日(日)　晴れ
京阪出町柳駅集合8・30～40（バス）花折峠口9・20―花折峠9・40～50―612ピク11・00―ミタニ峠手前鞍部広場11・20（昼食）12・20―ミタニ峠12・30―天ヶ森13・25～40―伏越地13・55～14・10―府道百井線（樹の下の河原）15・00～40―小出石15・55～16・20（バス）出町柳駅17・00（解散）
花折峠から天ヶ森までの縦走を楽しんだ。時々豆電球を見ろす展望地があり風も吹き抜けた。小出石に早く着いたので涼しい河原でゆっくりできた。
（参加者）田中真知子　柳川常雄　塩隅　豊　松本千佳子　堀　良男　角田一江　中村博津子　東山登美　舟岡　武　中西規弥好　妹尾一正　松本　博　吉塚たか子　秋田雅部　谷　守　村井　武　入江武史　青木一雄　中塚吉五郎　神野孝允　宮本青華　宮本悦子　磯部　純　大本久子　松上美代子　辻村幸裕　新治悦子　石田豊美　小谷和子　森田和子　遠谷勝枝　上坂延枝　竹田美美　中井ひろみ　林　勝子　○呉比佐美
◎村田智俊　（計36名）

湖北・己高山
6月27日(日)　晴れ
JR虎姫駅集合9・25～30（タクシー）十楽9・55―与志漕神社10・00―登山口10・33―六地蔵11・20～30―碧玉峠12・15（昼食）13・00―己高山13・20～30―石道峠15・15～25―百楽15・40（タクシー）木ノ本駅16・30（解散）
ブナ林のなかを巻って行くと、六地蔵のある平地な場所に出る。坦々と登って行くと碧玉寺跡の広場。己高山からは石道寺の山岳信仰の道をくだった。
（参加者）杉本　高　近藤　栄　三井紘一　渡辺靖子　高田久美子

新ハイキング社

読み、歩き、書いた

深田久弥の研究

最新刊

深田クラブ編

◆A5判／387頁／定価1680円（税込）

本書は深田クラブの会報に、飯島斎・高澤光雄・高辻謙輔の三氏が、深田久弥についてそれぞれに、研究の成果を発表されたものである。

内容は非常に豊富で、その著作について、その山行について、その交友関係について、その生い立ちについて等、熱心に調べられた、多彩な内容で読みものとして面白い。

●本紙記載の振替用紙でのご注文は送料当社負担

発行所　新ハイキング社

〒114-0023 東京都北区滝野川7-6-13

電話/FAX 03-3915-8110

北村　正　中村勉斉　広田不佐子
大谷章子　荒木光雄　山本すき子
中島　隆　清水昭三　小椋きぬ子
小田昭子　松本知子　増田国広
多賀久子　森澤昭子　遠辺達郎
大村太郎　白鳥恵子　中尾英智子
長沢佐美　辻　行子　中西玉枝
西村稔行　市野博文　宮村孝次郎
美村孝治　上田久子　庁　すみ子
遠水　保　島田京子　○篠崎信男
○中村英雄　◎小山良春（計37名）

台湾・池木屋山
（近畿百名山に登る第17回）
9月2日(日)～3日(日)　1泊2日

〈2日　曇り時々雨〉近鉄榛原駅集合8・40～45（タクシー）林道茨谷線　陸佐登山口9・50～10・00―一陸佐10・30―木ノ実ヶ塚11・00―鹿岳11・40―ピーク広場12・00（昼食）12・40―明神岳14・00―二石山（奥の迷路）15・30―テント場16・00（テント泊）

〈3日　曇りのち晴れ〉テント場7・10―赤岩山8・00―霧降山9・30―池木屋山10・00～15―高滝13・50―出合14・30―宮ノ谷林道終点15・30～16・00（バス）スメール16・20（入浴）17・00（バス）近鉄大和八木駅18・25（解散）

大又から明神平への登山道が工事で通行止のため、茨谷線の二陸佐登山口までタクシーで入った。池木屋山までは高低も少なく、終始針葉樹の広葉樹林のなかを気持ちよく歩いた。テント場は水も豊富で、広い草原の上に四張ものテントが並びにぎやかだった。池木屋山から高滝までの下山は、急な下りと高巻き道があり、疲労も多く、足を捻めた人もおられ時間がかかった。

（参加者）岩田育士　桑　康夫
三井紘一　西岡俊弥　西原裕子
松見　昭　長谷治美　小林　桂
田中　明　山科邦彦　沖　仲
小林　稔　辻　宜序　山下恒三
中尾　勉　平山登子　宮本喜幸
宮本悦子　宮武宗雄　中嶋日出男
堀田東一　堀昌光子　網木美市子
角田一江　小谷和子　入江武夫
○山高義治　◎村田智敏（計25名）

新ハイキングクラブ関西入会の案内

当会は雑誌『新ハイキング関西の山』（隔月刊・年6号発行）の定期購読者を中心にしたハイキングの集いです。

この雑誌は紀行文やコースガイドなどで、関西のハイキングコースや山の情報を発信しています。山の知識を深め、情報豊かで健康な身体をつくり、自然のなかを歩く喜びをともに広めましょう。

「新ハイキングクラブ」は昭和55年発足以来、東京を中心に50年間も好評のうちに活動してきました。関西は平成3年発足で10年目に入りますが、すでにたくさんの会員が活動しています。

会員は当会の山行例会に最先して参加できます。この山行例会を通して正しい山歩きを、楽しい山仲間たちと味わいませんか。

リーダー（係）はすべて無償の奉仕で、各自で切符を買い実費を払い、宿泊料もすべてワリカンです。

会員には毎号『新ハイキング関西の山』をお送りします。

四季の自然に触れながら歩き、若々しい心と健康をいつまでも持続するのはすばらしいことです。これから始めてみたい人も、すでにベテランの人もみなさんご入会いただけます。

入会金　500円（バッジ代）
年会費　3000円（実費共）

入会のお申し込み（郵送）はこの雑誌に挿入の振替用紙をご利用ください。氏名（ふりがな）及び第何号からの送本かを忘れずにご記入ください。

なお、定期購読をご希望される方も会員になっていただきますと、毎号確実にお手元に届きますので便利です。

切手500円分をお送りになれば、『新ハイキング関西の山』見本誌1冊送ります。

○山行リーダー募集

リーダーは2ヶ月に1～2回程度の山行例会を計画・実施していただきます。

集団の奉仕ですが、やりがいもあり、楽しいものです。経験のある方や、やってみたいと思われる方は、新ハイキング関西までご連絡ください。マニュアル「リーダー必携」を送ります。

○新入会員紹介

新しいお仲間のみなさんです。会員番号48226番から48348番まで

【埼玉】河合　亨
【愛知】松井忠義
【三重】松本治二　大西恵子
【滋賀】矢野勝右
【京都】山下晴美　和気洋美
【大阪】岩越忠司　山田芳子
太細照夫　成田一雄　佐坂栄二
和田仁志　田中　昇　小坂さゆり
【奈良】宮嶋昭子　山根弘美　松原貞由美
吉塚たか子
【和歌山】長　進
【兵庫】今井貴博　田中光子
安藤イセキ　（33名）

訂正とお詫び

53号（昭夏）68ページ二段目3行目「矢筈山」は「八剱山」が正しい。

54号（初秋）10ページ下段後ろから4行目「代表部」は「代表者」が正しい。

54号（初秋）32ページ中段後ろから6～5行目「ササに付いたほこり」とありますが、ほこりではなく、ササの表面に付いている白い粉のようなものです。黒いズボンなどでササの中を歩くと白いものが付着しますが、それを言います。

54号（初秋）36ページ二段目2行目「秋野美和恵」は「秋野美紀恵」さんが正しい。

（編集室）

お願い

継続会費の払込みには、必ず会員番号を記入してください。郵便局から払込む「払込取扱票」の、表面の通信欄（用紙の中央部）にSEIC関西No.を記入するようになっています。ここが空欄ですと会員番号を調べるのにたいへん手間がかかります。会員番号は会員証のほか雑誌を発送する封筒の宛名の下にも印刷されています。

毎号お求めになりたい方へ

前もって書店に毎号ほしいと「購読予約」をされますと、どこの書店でもお買い求めいただけます。偶数月の20日ごろ（隔月刊）の発売です。